岩手県埋文センター文化財調査報告書第33集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和56年度分)

昭和57年3月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

(財)岩手県埋蔵文化財センター

発 掘 調 査 略 報

昭和56年度

序

昭和56年度は、県立埋蔵文化財センターの発足と、当埋文センターに新たに資料課を設けるなど、埋蔵文化財保護のための整備を図りその運営が開始された年であります。

その間、県教育委員会の指導と調整のもとに、県、建設省、日本道路公団から委託をうけ県北部を中心に24遺跡について発掘調査を実施してまいりました。

この調査略報は、各遺跡の調査内容について概要をまとめたものです。

これらの調査結果によれば、各遺跡における遺構数、遺物量に違いがありますが、これからの資料整理と分折、検討によってそれぞれ本県の歴史解明に新しい事実を提示できると思われます。報告書刊行までには時間を要するところでありますが鋭意努力してまいりたいと考えております。

本書を刊行するに当り、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対して厚く感謝いたしますと共に、今後のご指導を切に願うものであります。

昭和57年３月

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター
理事長　新　里　　盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役　員

理事長	新里　盈	（県教育長）
副理事長	中原良一	（県教育次長）
常務理事	菅原一郎	（県埋文センター所長）
理　事	吉田良和	（県農政部次長）
〃	田代太志	（県林業水産部次長）
〃	後藤光雄	（県土木部次長）
〃	板橋　源	（岩手大学名誉教授・県立博物館長）
〃	草間俊一	（県立盛岡短期大学長）
〃	小形信夫	（前常務理事）
監　事	白石丈雄	（県教委総務課長）
〃	及川久男	（県教委財務課長）

職　員

所　長	菅原一郎	専門調査員	畠山靖彦	専門調査員	光井文行
副所長	小野寺　登	〃	朝野孝二	〃	佐藤　勝
総務課長	小笠原喜一	〃	菊池利和	〃	高橋義介
庶務係長	岡沢成治	〃	鈴木恵治	〃	佐々木清文
主　事	佐藤久四郎	〃	小平忠孝	〃	酒井宗孝
〃	戸草内幸男	〃	大原一則		
〃	立花多加志	〃	田鎖寿夫	資料課長	瀬川司男
技能員	佐藤春男	〃	佐々木嘉直	専門調査員	高橋　与右ェ門
		〃	栃沢満郎	〃	本沢慎輔
調査課長	嶋　千秋	〃	平井　進	〃	高橋文夫
主任専門調査員	近藤宗光	〃	種市　進	〃	工藤利幸
〃	遠藤勝博	〃	鈴木隆英	〃	四井謙吉
〃	国生　尚	〃	三浦謙一	〃	中川重紀
専門調査員	村上達夫	〃	岩渕　久	〃	松野恒夫

目　　次

I　県営事業関係

(1)　名高根遺跡　（大船渡市）…… 3

(2)　寒風遺跡　（遠野市）…… 11

(3)　志波城跡　（盛岡市）…… 19

(4)　小堀内Ⅰ遺跡（田老町）…… 27

(5)　伊保内遺跡　（九戸村）…… 35

II　建設省関係

(1)　長瀬C遺跡　（二戸市）…… 45

(2)　府金橋遺跡　（二戸市）…… 51

III　日本道路公団関係

(1)　曲田Ⅰ遺跡　（安代町）…… 57

(2)　小井田Ⅳ遺跡（一戸町）…… 65

(3)　沼山遺跡　（一戸町）…… 73

(4)　滝谷Ⅲ遺跡　（九戸村）…… 79

(5)　江刺家遺跡　（九戸村）…… 87

(6)　江刺家Ⅳ遺跡（九戸村）…… 95

(7)　江刺家Ⅴ遺跡（九戸村）…… 101

(8)　嶽Ⅰ遺跡　（九戸村）…… 107

(9)　嶽Ⅱ遺跡　（九戸村）…… 113

(10)　道地Ⅱ遺跡　（九戸村）…… 121

(11)　道地Ⅲ遺跡　（九戸村）…… 125

(12)　馬場野Ⅰ遺跡（軽米町）…… 133

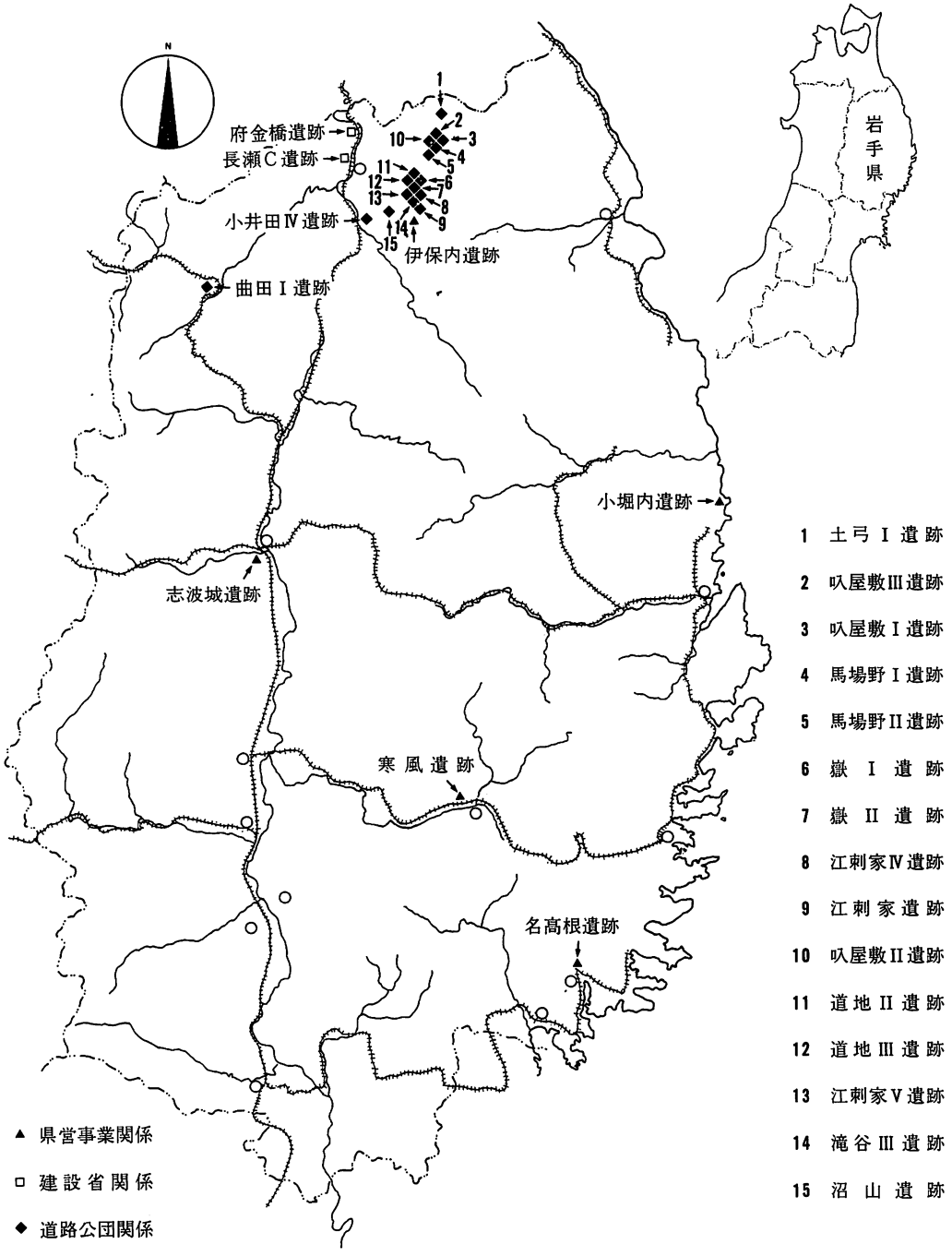
(13)　馬場野Ⅱ遺跡（軽米町）…… 137

(14)　叺屋敷Ⅰb遺跡（軽米町）…… 141

(15)　叺屋敷Ⅱ遺跡（軽米町）…… 149

(16)　叺屋敷Ⅲ遺跡（軽米町）…… 157

(17)　土弓Ⅰ遺跡　（軽米町）…… 165

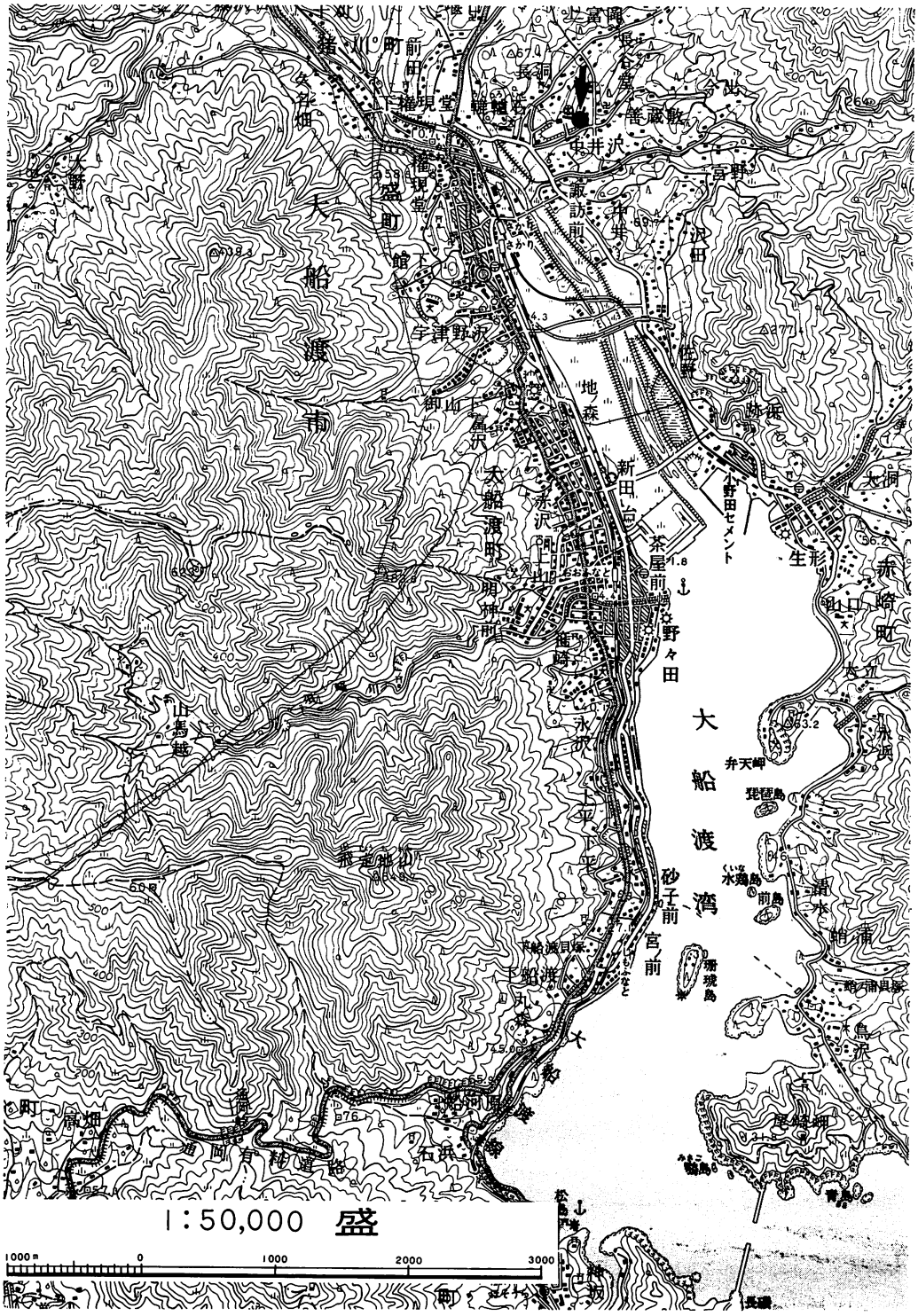


昭和56年度　調査遺跡位置図

I　県営事業関係

(1) 名高根遺跡

遺跡所在地	大船渡市猪川町字長洞２番地
事業主体	岩手県教育委員会
調査期間	昭和56年４月20日～６月６日
調査対象面積	1,800㎡
発掘面積	1,400㎡
遺跡記号	ＮＫＮ－81
調査担当者	専門調査員　三浦謙一
	文化財専門員　渡辺洋一（県立埋文センター）
協力機関	大船渡市教育委員会、県立大船渡高等学校


1:50,000 盛
1000m 0 1000 2000 3000
大船渡湾
大船渡
新田
茶屋前
小野田セメント
生形
赤崎町
大立
弁天崎
琵琶島
水島
砂子前
宮前
珊瑚島
尾崎
鳥沢
宇津野沢
地ノ森
御山
赤沢
明神前
山崎
飛地
長洞
宮野
沢田
浜
有料道路
石兵
高畑
盛町
館
猪川町
前田
上
権現堂
蛸
長洞
宮野
沢田
浜
大洞
赤崎町
大立
弁天崎
琵琶島
水島
前島
鳥沢
尾崎
宇津野沢
御山
赤沢
明神前
山崎
飛地

1　遺跡の立地

本遺跡は、大船渡市猪川町長洞に所在する。遺跡が載る地形面は、大船渡市の北西部から南流する盛川がもつ支流沿いに発達した河岸段丘面である。本遺跡は開析を受けて形成された崖の縁の部分に立地する。周辺の遺跡には長谷堂貝塚、下中井遺跡がある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、県立大船渡高校第二体育館建設に関連する造成工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、平坦部は全面を粗掘りし、斜面部及び盛土部はトレンチ掘りとして遺構検出し、精査した。検出遺構は、縄文時代住居址５棟、平安時代住居址３棟、ピット52基である。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉　縄文時代住居址は、所属時期を決定する遺物を伴出しない。２棟は柱穴の位置関係や数から２回にわたる使用が考えられる。そのうちの１棟からは、１個の柱穴の埋土に剝片38片が集中して包含されており、剝片の貯蔵形態との関連を示すものと考えられる。

平安時代住居址のうち、時期的に先行する住居址は、１辺が 6.6m ±の方形と推定される。柱穴は４個。カマドは北壁ほぼ中央に位置し、煙道は北向きで、礫で構成されている。伴う遺物は、須恵器坏がヘラ切りの後、底部に調整を加えたものがあり、内黒の土師器坏も出土している。残り２棟は、いずれも方形で４個の柱穴をもち、北壁にカマドをもつ。前述のものより若干新しい１棟は、カマドが中央より西側に寄り、煙道部は傾斜して下がってゆき、煙出し部にはピットが掘りこまれている。残りの１棟のカマドは北壁中央部から東側に寄って構築されており、煙道部をもたないタイプの可能性もある。

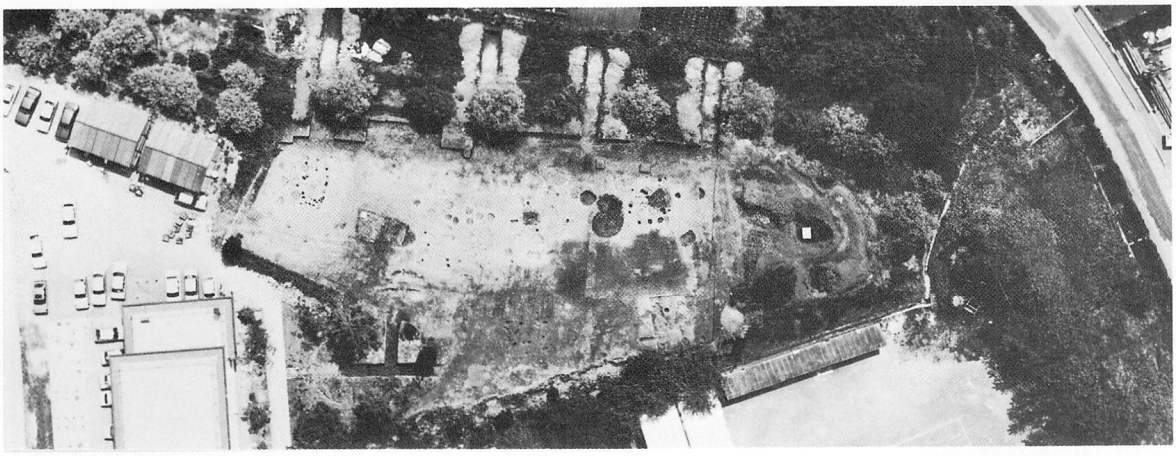
〈ピット〉　52基検出されたピットのうち２基をのぞけば、大きくは円形の形態をもつ浅皿状ピットと、不整円形～楕円形気味の形態をもつ浅皿状ピットとに分けられ、前者が多い。

〈出土遺物〉　数量的には少ないが、土器片では中期前葉～中期末葉・後期中葉・晩期初頭に属する縄文土器のほか、土師器、須恵器が出土している。石器は、石鏃３点、石べら１点、すり石数点などがある。石鏃のうち１点は黒耀石である。黒耀石は他にコアやフレークとしても出土しており、調査で得られた資料としては大船渡市では初めてである。その他鉄鏃２点や鉄製品が出土している。

3　まとめ

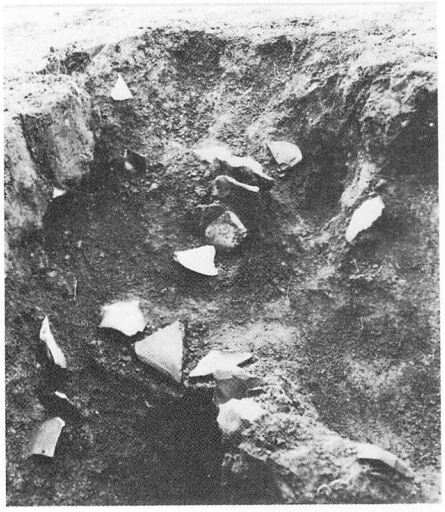
今回の調査成果の一つとして、沿岸南部では初めて平安時代住居址が検出されたことがあげられる。住居址の形態や出土遺物は、県内資料と比較研究することにより、その歴史的位置づけが解明できるであろう。

名高根遺跡遺構配置図

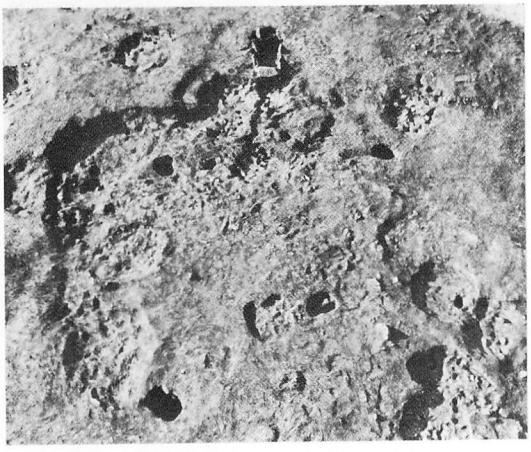


遺跡航空写真

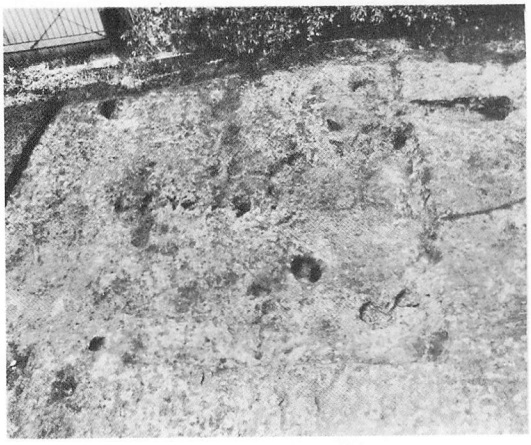
ＢＩ－３住居址（縄文時代）



ＢＩ－３住居址（剝片貯蔵）

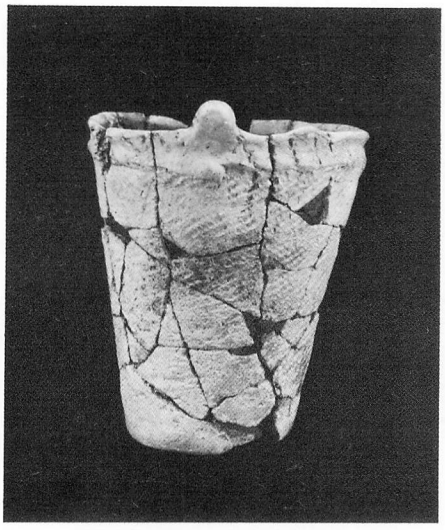


ＢＩ－２住居址（平安時代）

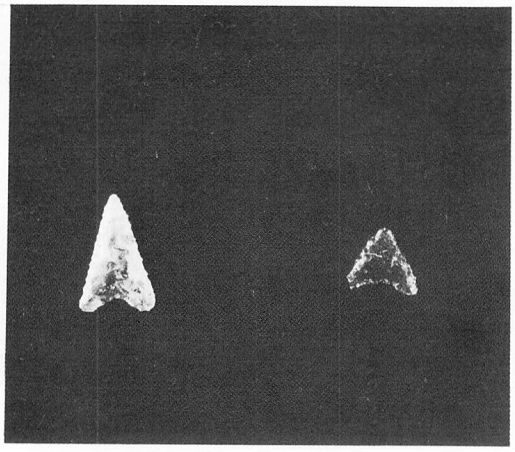


ＢＩ－１住居址（平安時代）

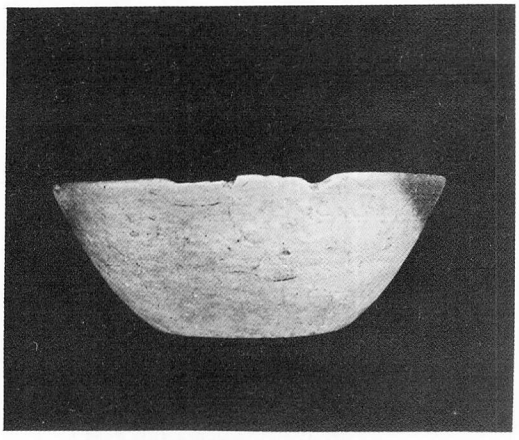
名高根遺跡



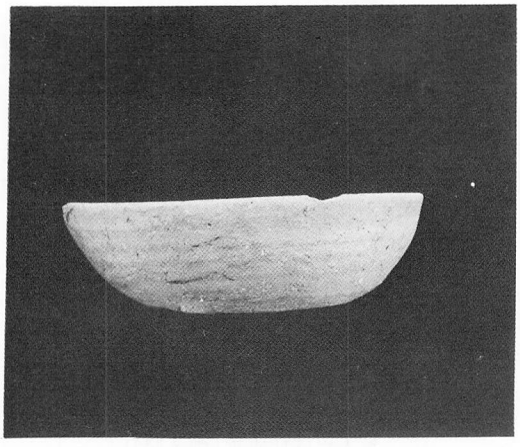
縄文土器　ＡＩ－73ピット



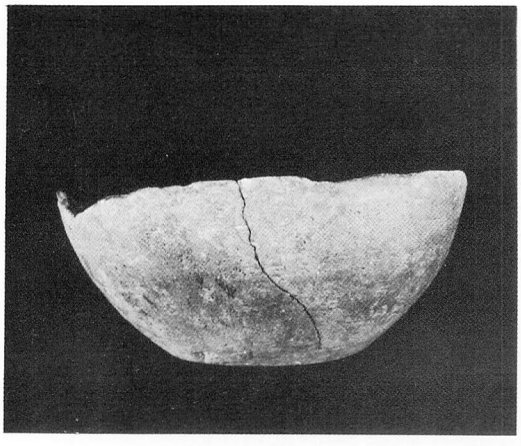
ＡＩ－１住居址　　ＡＩｊ０　Ｏ層



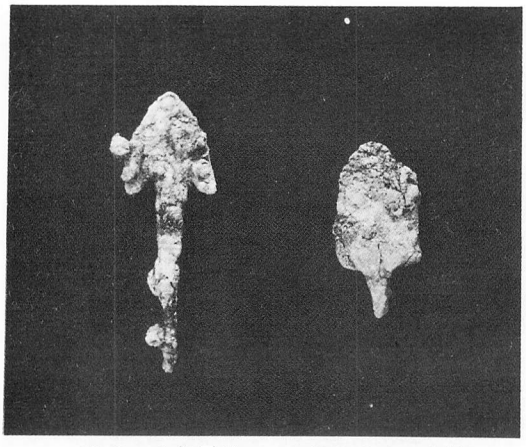
土師器　ＢＩ－２住居址



須恵器　ＢＩ－２住居址



土師器　ＢＩ－１住居址

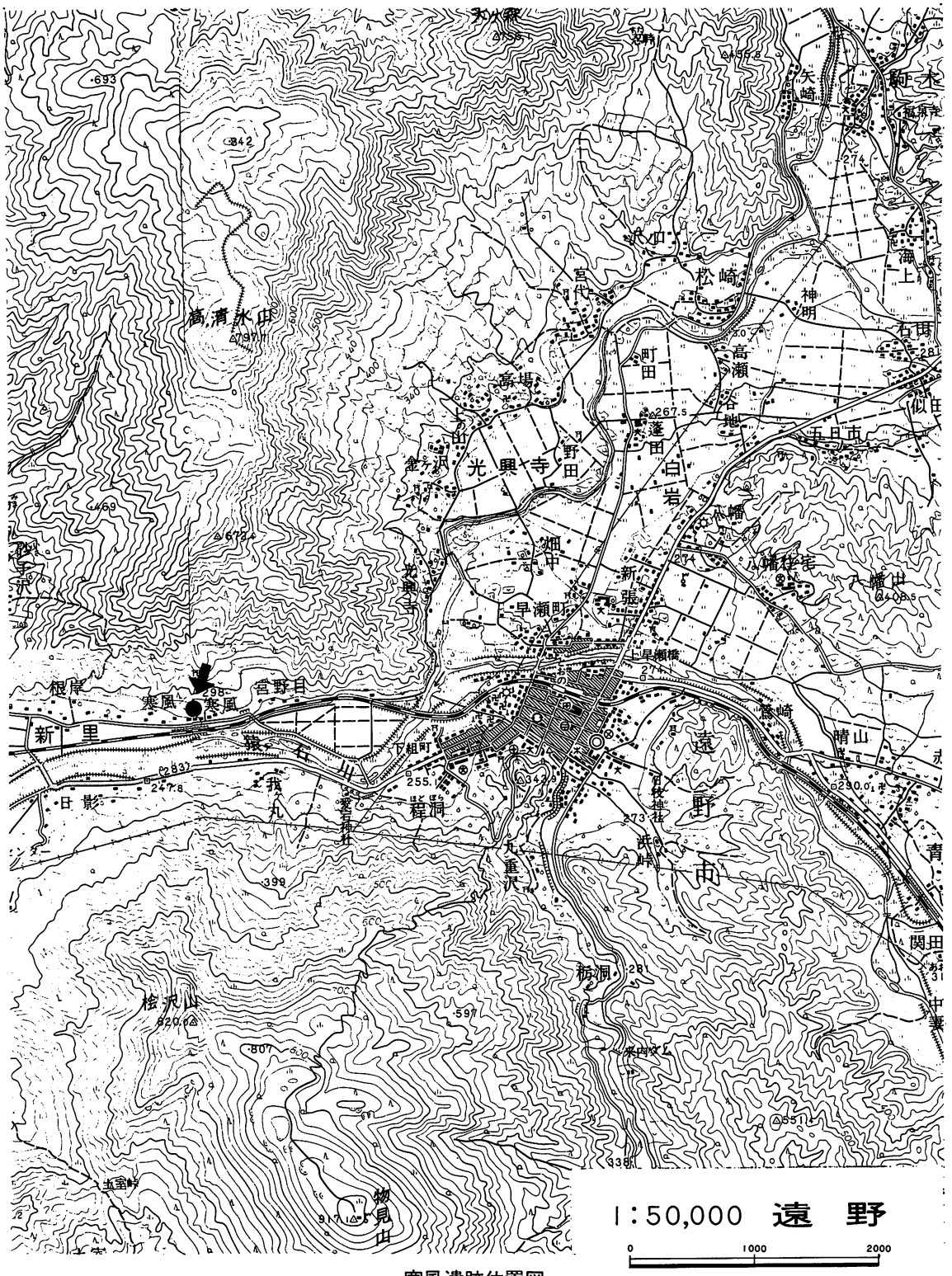


ＢＩ－１住居址　　ＢＩｄ８　Ｉ層

名高根遺跡出土遺物

(2) 寒風（さむかぜ）遺跡

遺跡所在地	遠野市綾織町新里第８地割字寒風野
	遠野市綾織町新里第２地割字宮野目
事業主体	岩手県土木部
調査期間	昭和56年４月16日～６月30日
調査対象面積	14,400m²
発掘面積	10,500m²
遺跡記号	ＳＫ81
調査担当者	主任専門調査員　近藤宗光
	専門調査員　畠山靖彦　　専門調査員　朝野孝二
協力機関	遠野市教育委員会


1:50,000 遠野
0
1000
2000
高清水山
松崎
宮代
神明
海上
町田
高瀬
谷地
蓬田
白岩
五日市
光興寺
野田
金沢
畑中
新張
八幡
八幡社宅
八幡山
早瀬町
上早瀬橋
根岸
寒風
宮野目
新里
猿石川
下組町
我丸
穿石神社
穴洞
丸重沢
浜崎
有秋神社
晴山
遠野
市
関田
栃洞
桧沢山
物見山
五室峠

寒風遺跡位置図

1　遺跡の立地

本遺跡は国鉄釜石線遠野駅西方約３㎞の地点にあり、遠野盆地を西流しながら抜け出した猿ヶ石川を、北は高清水山(797.7ｍ)、南は物見山(917.1ｍ) によって挾むような形になっている地点の高清水山の山麓緩斜面（崖錐性扇状地）に位置する。

調査地域は南西から東に細長く延びており、標高は南西側約 255ｍ、東側 280ｍで、猿ヶ石川との比高は南西側で約10ｍ、東側で約35ｍである。この丘陵は猿ヶ石川沿いの谷筋につき出す形になっており、終日西風が吹き、そのため地山や花崗岩の露頭が顕著である。

2　調査の概要

今回の調査は、国道 283号線道路改良工事に伴なう事前緊急発掘調査である。調査の結果、掘立柱建物跡１棟、竪穴住居址状遺構３棟、ピット２基、焼土ピット３基、陥し穴状遺構３基、馬蹄形周溝１基を検出、精査した。以下調査の概要である。

〈掘立柱建物跡〉

調査区域の南西、猿ヶ石川北岸の河岸段丘上に検出された。近世の曲家と思われ南面している。母屋の桁行は約10ｍの５間で、１間は約２ｍであり、梁行は約 5.5ｍで３間である。更に母屋の前後に庇がある。曲屋の部分は、桁行約４ｍで２間、梁行は約 5.5ｍで３間である。さらにもう１棟南接して桁行、梁行共に４ｍそれぞれ２間の建物も考えられるが、母屋の検討も合せて今後の検討課題としたい。

〈竪穴住居址状遺構〉

竪穴住居址状遺構は、掘立柱建物跡の南に１棟、調査区域中央西寄りに２棟検出された。いずれも隅丸方形と思われる。前者の規模は3.0ｍ×3.5ｍ、後者の規模は3.0ｍ×3.0ｍと 2.0ｍ× 2.5ｍのものである。壁高は削平されているものを除き、最小12㎝、最高26㎝である。柱穴、焼土は検出されず、出土遺物もない。

〈ピット〉

２基検出され、いずれも竪穴住居址状遺構の近くに検出された。ともに皿状のものである。１基は開口部径約70㎝×80㎝、底部径約66㎝×68㎝、深さは20㎝のものである。もう１基は開口部径約224㎝×220㎝、底部径約120㎝×150㎝、深さは15㎝である。出土遺物はない。

〈焼土ピット〉

１基は調査区域のほぼ中央、農道南側に検出され、開口部径約340㎝、底部径約300㎝、深さ50㎝の円形でビーカー状の断面のものである。１基は調査区域東側の丘陵部に検出され、開口部径210×220㎝、底部径 140㎝、深さ70㎝の円形でビーカー状の断面のものである。もう１基は調査区域東端近くに検出され、開口部径170×110㎝、底部径 130×60㎝、深さ20㎝で楕円形で皿状の断面を示すものである。焼土はいずれも新しいもののように感じられる。

〈陥し穴状遺構〉

2基は掘立柱建物跡の南側に検出され、開口部での長さ約 320cm、幅50cm、底部での長さ約 290cm、幅10cm、深さ85cmのものと開口部での長さ約 350cm、幅40cm、底部での長さ約 310cm、幅10cm、深さ85cmのものである。もう1基は調査区域東側の丘陵部に検出され、開口部での長さ約 290cm、幅70cm、底部での長さ約 230cm、幅25cm、深さ80cmである。

〈馬蹄形周溝〉

調査区中央西寄りに検出され、南半分は道路によって切られて消失しているが、東西の径は約 800cmである。溝の部分は上幅約85cm、下幅約60cm、深さ約8cmであり、上層部は削平されており、周溝内には何の施設も確認できなかった。近くから土師器破片が出土した。

〈出土遺物〉

縄文時代早期、前期の特徴をもつ土器片、土師器片、石器、銭貨、角釘、鉄滓などである。縄文土器片は沢の埋土中よりの出土傾向がみられた。

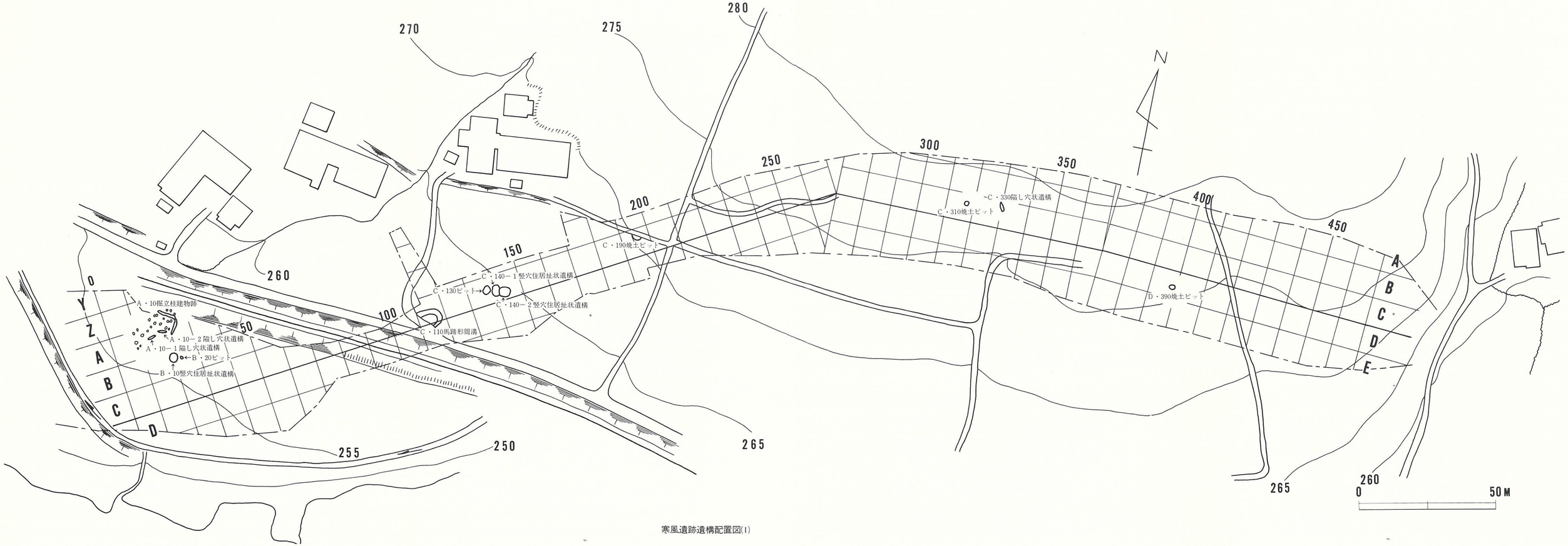
3　まとめ

縄文時代早期の土器としては県内で出土例の少ない押型文の土器片や尖底土器の一部が出土するなど、遠野地区における縄文時代早期の資料として、また馬蹄形周溝が検出されたことで、遠野地区の歴史解明の一端となると思われる。

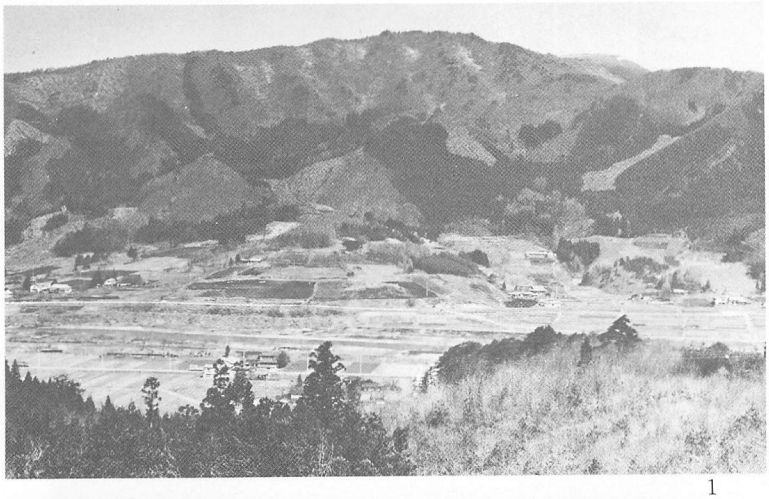
なお調査地域周辺における遺構の広がりと遺跡の範囲について今後の調査に期待したい。

4　その他

遠野市綾織新里第2地割字宮野目の 2,400㎡の調査区域からは、遺構・遺物の存在は確認できなかった。


270
275
280
260
250
255
265
N
0
50
100
150
200
250
300
350
400
450
Y
Z
A
B
C
D
E
A・10掘立柱建物跡
A・10－2陥し穴状遺構
A・10－1陥し穴状遺構
B・20ピット
B・10竪穴住居址状遺構
C・130ピット
C・140－1竪穴住居址状遺構
C・140－2竪穴住居址状遺構
C・110馬蹄形周溝
C・190焼土ピット
C・310焼土ピット
C・330陥し穴状遺構
D・390焼土ピット
0
50M

寒風遺跡遺構配置図(1)



1

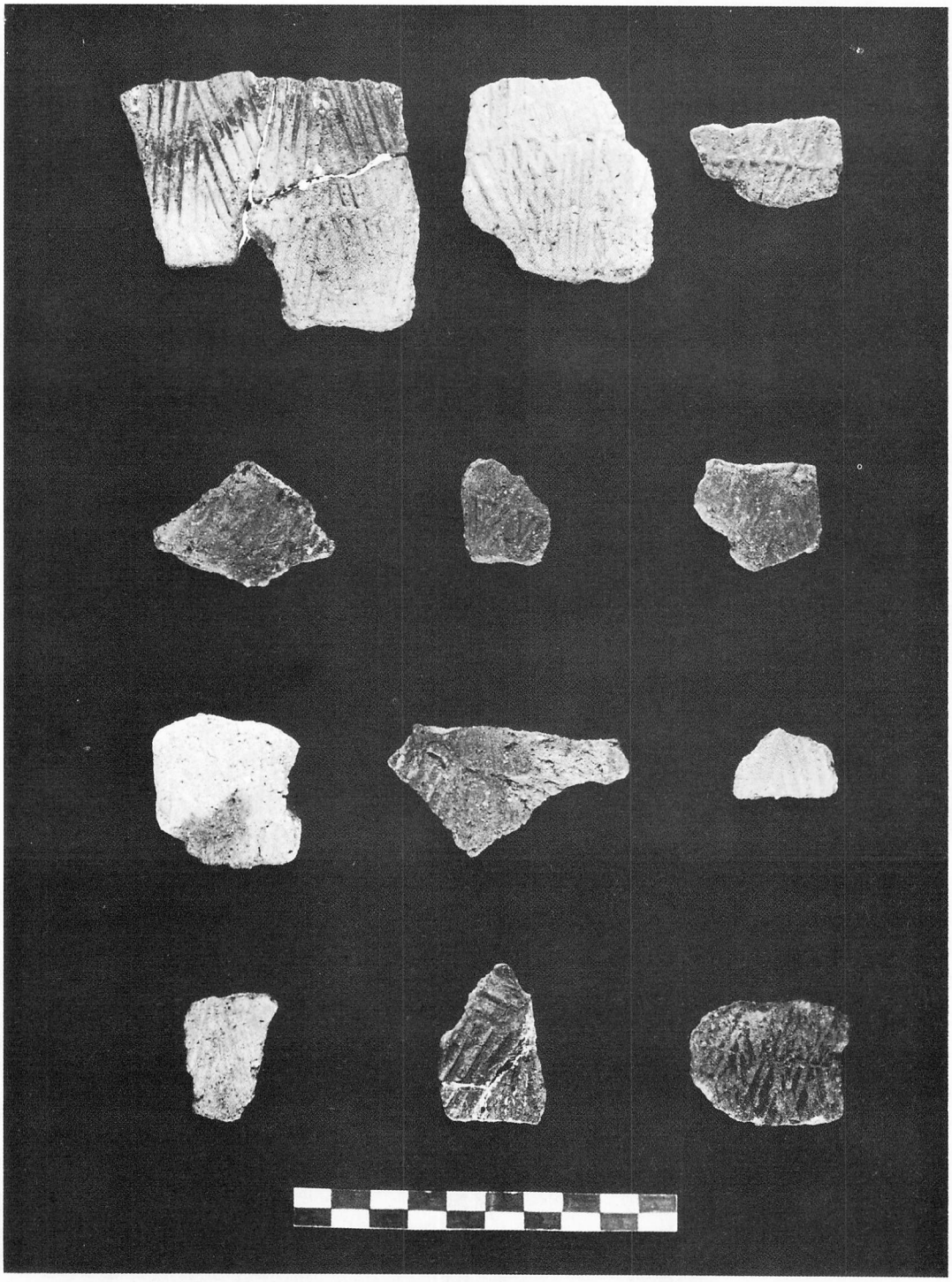
2

3

1.遺 跡 遠 景
2.馬蹄形周溝
3.陥し穴状遺構
4.掘立柱建物跡

4

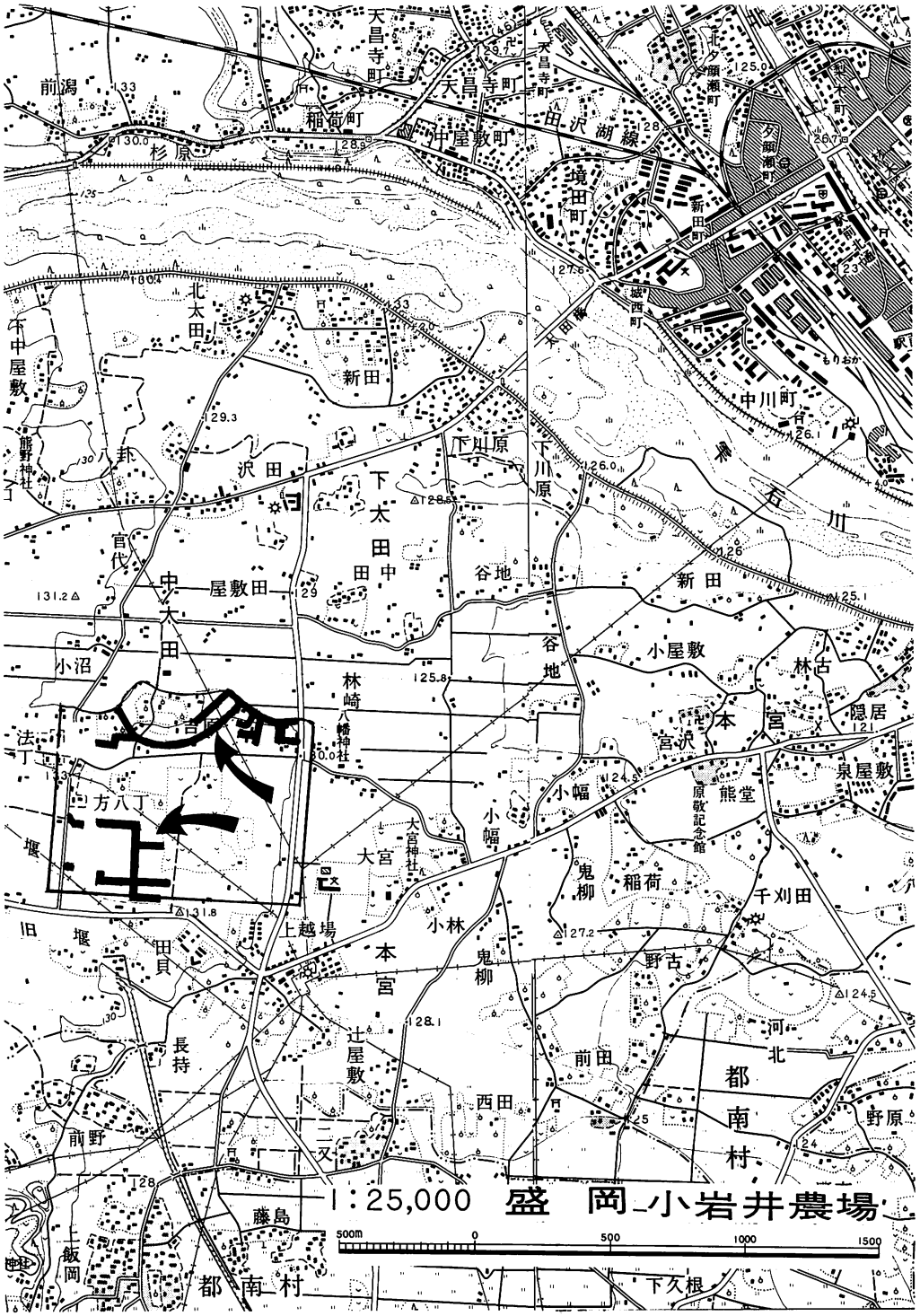
寒 風 遺 跡



寒風遺跡出土遺物

(3) 志波城跡（第21次・第22次調査）

遺跡所在地	盛岡市中太田方八丁・吉原・宮田
事業主体	盛岡南部土地改良事業所
調査期間	昭和56年4月20日～8月12日　11月4日～10日
調査対象面積	5,768m²
発掘面積	5,768m²
調査区記号	ＯＳＷ 021・ＯＳＷ 022
調査担当者	専門調査員　鈴木恵治　専門調査員　大原一則
協力機関	盛岡市教育委員会


1:25,000 盛岡小岩井農場
500m 0 500 1000 1500
天昌寺町
稲荷町
中屋敷町
田沢湖線
境田町
新田町
夕顔瀬町
中川町
下川原
谷地
新田
小屋敷
林古
本宮
隠居
泉屋敷
熊堂
原敬記念館
宮沢
小幅
鬼柳
稲荷
千刈田
野古
河北
都南村
野原
前田
西田
辻屋敷
二又
藤島
飯岡
下久根
長持
前野
上越場
小林
大宮
大宮神社
林崎
八幡神社
小沼
中大田
屋敷田
田中
下太田
沢田
八卦
熊野神社
北太田
中屋敷
杉原
前潟
石川
もりおか

志波城跡位置図

1　遺跡および調査区の位置

志波城跡は盛岡市街の南西約３㎞に位置する。遺跡の北約２㎞には雫石川が東流し、北上川に合流している。遺跡の位置する地形は、雫石川の旧河道が観察できる沖積段丘であり、標高は約 130ｍである。第21次調査区は遺跡全域からみて南西地区にあたり、第22次調査区は北辺部にあたる。南東部分については盛岡市教育委員会が担当している。

2　調査の概要

今次の調査は、明年度から実施される太田方八丁地域県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査であり、文化庁・県教育委員会・盛岡市教育委員会・盛岡南部土地改良事業所等との協議の結果、調査範囲は排水路工事の施工延長線上２ｍの幅員分とし、竪穴住居址が検出された場合にはその全容について調査することとした。その結果21次調査区では志波城の外郭南辺を構成する築地・築地内溝・築地外溝・外大溝と竪穴住居址11棟・溝６条などが検出された。また22次調査区では段丘崖線の直下および北側では遺構が検出されず、遺跡北東部の段丘縁辺付近で竪穴住居址１棟と焼土をともなうピット１基のほか中世以降の遺構が検出された。以下に志波城に伴う遺構について、調査の概略を記す。

〈外郭南辺築地〉

ドテツパタケの西側延長線上に延びる土手の直下で検出された。築地本体の下位には掘り込み地業があり、検出できた巾は約４ｍであり、深さは約 0.2ｍである。埋土は黒色土である。この上に巾約２ｍ、厚さ 0.2ｍで版築が残存していた。構築土は黒色土と褐色シルトの混合土で、細礫を含んでいる。寄せ柱は築地の内側と外側に各々２本検出され、内～外の距離は約３ｍである。

〈築地内溝〉

築地内溝と築地との中軸間距離は約７ｍである。上縁巾は約 2.3ｍであり、深さは現耕作土上面から約 1.2ｍである。埋土は黒色土であり、自然堆積の状況を示している。築地内溝と築地の間には別の溝が並行して存在し、人為的に埋め戻されている。

〈築地外溝〉

築地外溝と築地との中軸間距離は約８ｍである。上縁巾は約 5.5ｍであり、深さは現耕作土上面から約 2.5ｍである。壁は底部から立ちあがった後に外傾している。底部は平坦であり、礫層上面に達している。埋土は上位から水成堆積のシルトと砂の互層、灰黄褐色の薄い粘土層、自然堆積の黒色土、最下位は１次堆積の褐色粘土層である。

〈外大溝〉

外大溝と築地との中軸間距離は約44ｍである。上縁巾は約５ｍ、深さは現耕作土上面より約 1.7ｍである。壁は底部から外傾している。底部は平坦であり、礫層上面に達している。埋土

は上位から礫まじりの黒色土層、水成堆積のシルト層、自然堆積の黒色土層、１次堆積のシルト層である。

〈竪穴住居址〉

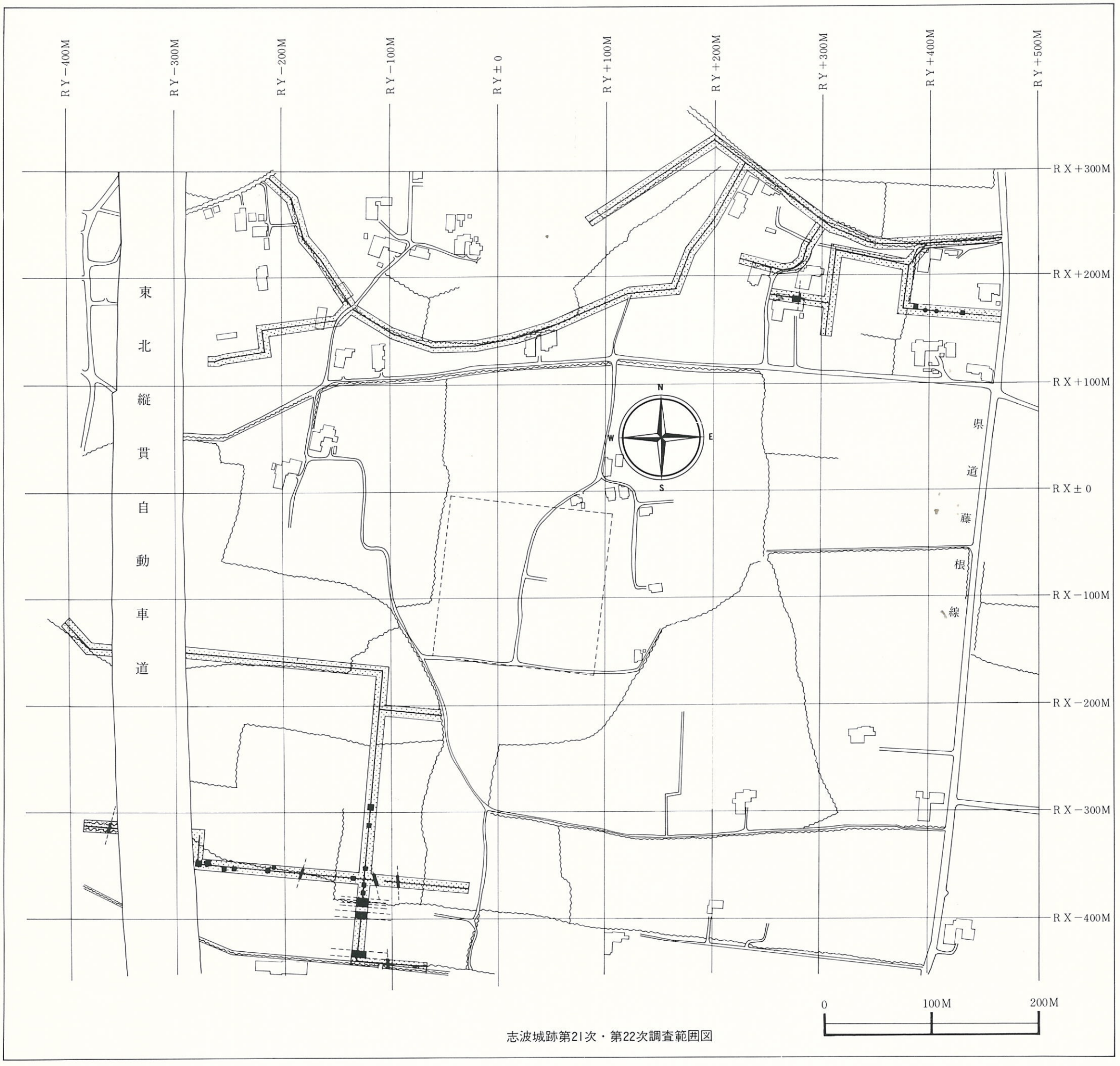
土師器・須恵器を伴出した竪穴住居址は、南辺築地より約30ｍ内側に並行する長さ約 160ｍの範囲で６棟、また築地に直交する長さ約 100ｍの範囲で５棟、内城中心より北東約 370ｍの段丘崖付近で１棟が検出された。平面プランは総体的には方形であるが、僅かに台形を呈する例やカマド脇の壁が張り出す例がある。カマドの位置は東が５棟と最も多く、南が２棟、北と西が１棟である。この他に方向の異なる２基のカマドを持つ例が２棟あり、うち１棟は作りかえである。規模は壁の長さが４ｍを越える例が４棟､3.5ｍ以上のものが８棟である。壁の残存状況は概して良好であり、立ちあがりは直に近い。床面は地山シルトを利用した例が４棟であり、他は貼り床をもつ。カマドの残存状況は悪く、側壁（袖）を検出できなかった遺構もあるが、燃焼部が壁より外側に位置する例もあることから、側壁を構築しなかったとも考えられる。検出できた側壁の構造は、地山の削り出し、礫とシルト、シルトに分けることができる。燃焼部には支脚をもつ遺構が４例あるが、うち３例は礫を直立させて上から甕をかぶせていた。他の１例は偏平な礫を重ねて、坏をかぶせる方法をとっていた。煙道は壁の外方に長く延びる例と、極端に短い例がある。出土遺物は土師器・須恵器・鉄器・石製品がある。土師器はロクロ使用の坏と甕、ロクロ不使用の甕であり、須恵器と共伴する。須恵器は細片が多く、器形を知ることができたのは坏だけである。ロクロ使用の土師器・須恵器の底部切り離し技法は、静止糸切り・回転糸切りも見られるが、回転ヘラ切りが多く、再調整を施している。鉄器には鉄鏃・刀子があり、また手斧を１点出土している。石製品は紡錘車・砥石である。

〈ピット〉

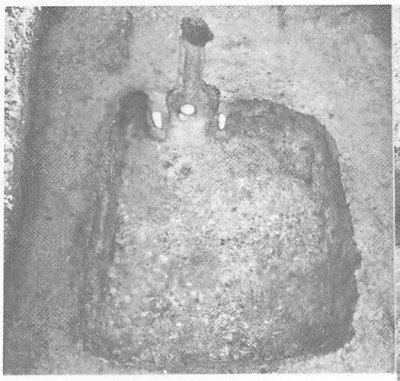
22次調査区の外郭東辺より約70ｍ西側でピット１基を検出した。平面形は隅丸長方形にちかい。長軸の長さは約 2.3ｍであり、深さは約 0.2ｍである。東辺の底部から土師器・礫とともに焼土を検出した。工房跡かとも考えられる。

3　まとめ

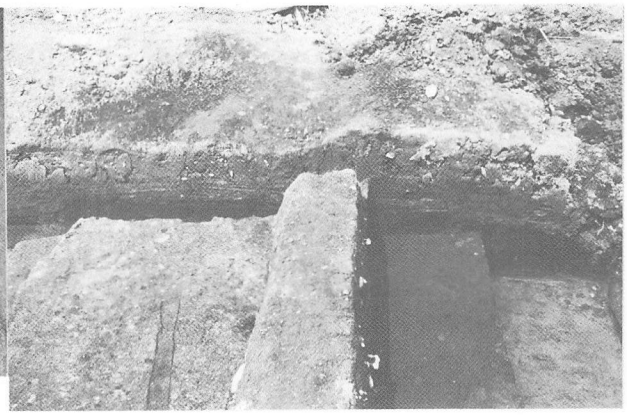
土師器や須恵器を伴う竪穴住居址は、外郭南辺築地から約 100ｍ内側の範囲で検出された。これは東北縦貫自動車道関連調査や、盛岡市教育委員会が担当した調査と考えあわせて、兵士の居住区域が東・南・西の外郭内側約 100ｍ以内にあったと考察する資料となった。また22次調査区のうち段丘崖の直下およびその北側では遺構が検出されず、志波城の北辺が雫石川によって浸蝕されたことを示しているようである。この雫石川の氾濫は築地外溝と外大溝の埋没状況でも確認され、「日本後紀」に述べられているように弘仁２年に洪水を理由として志波城が徳丹城に移転・廃棄されたことを立証するものであろう。



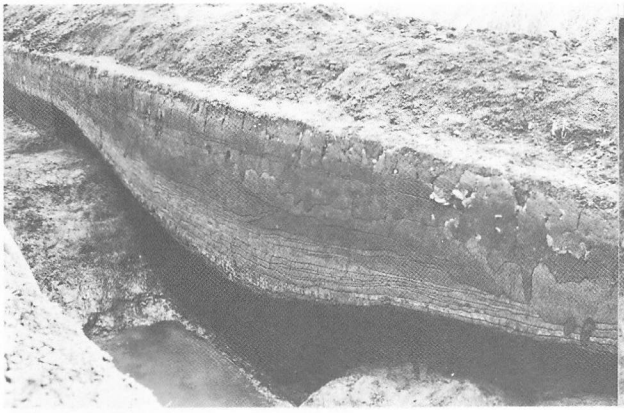
志波城跡第21次・第22次調査範囲図



ＳＩ379竪穴住居址



外郭南辺築地断面

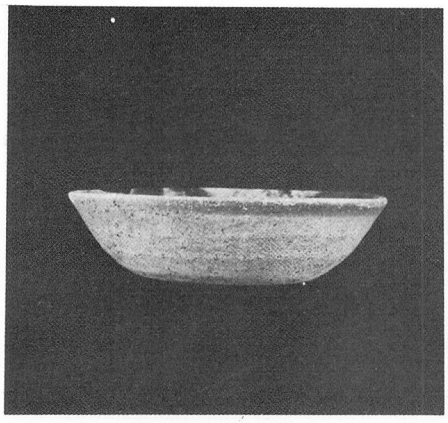


外郭南辺築地外溝

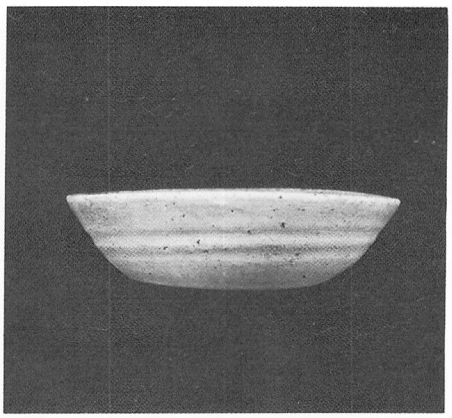
ＳＩ373竪穴住居址遺物出土状況

外郭南辺築地に併行する調査区全景（西から）

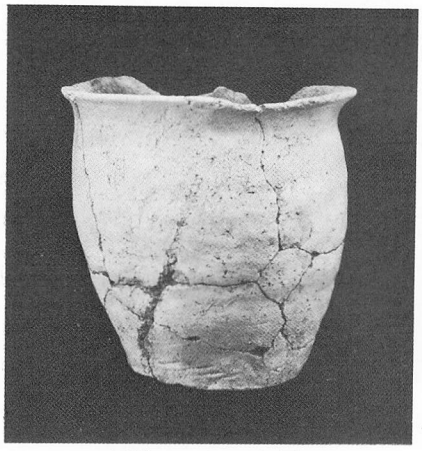
志　波　城　跡



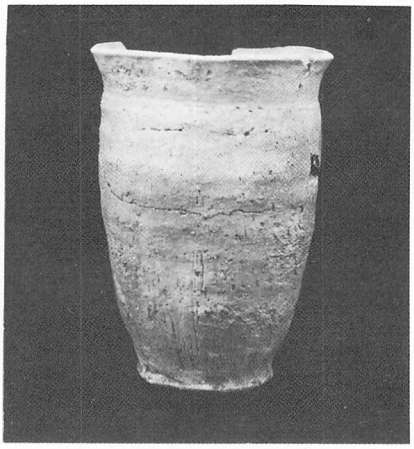
須恵器　ＳＩ378住居址



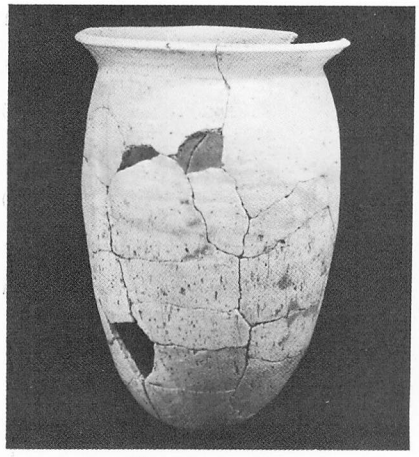
土師器　ＳＩ379住居址



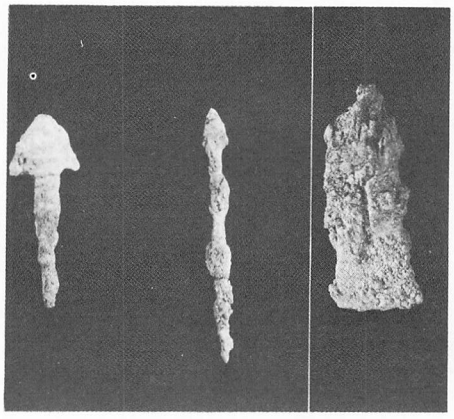
土師器　ＳＩ373住居址



土師器　ＳＩ384住居址



土師器　ＳＩ373住居址

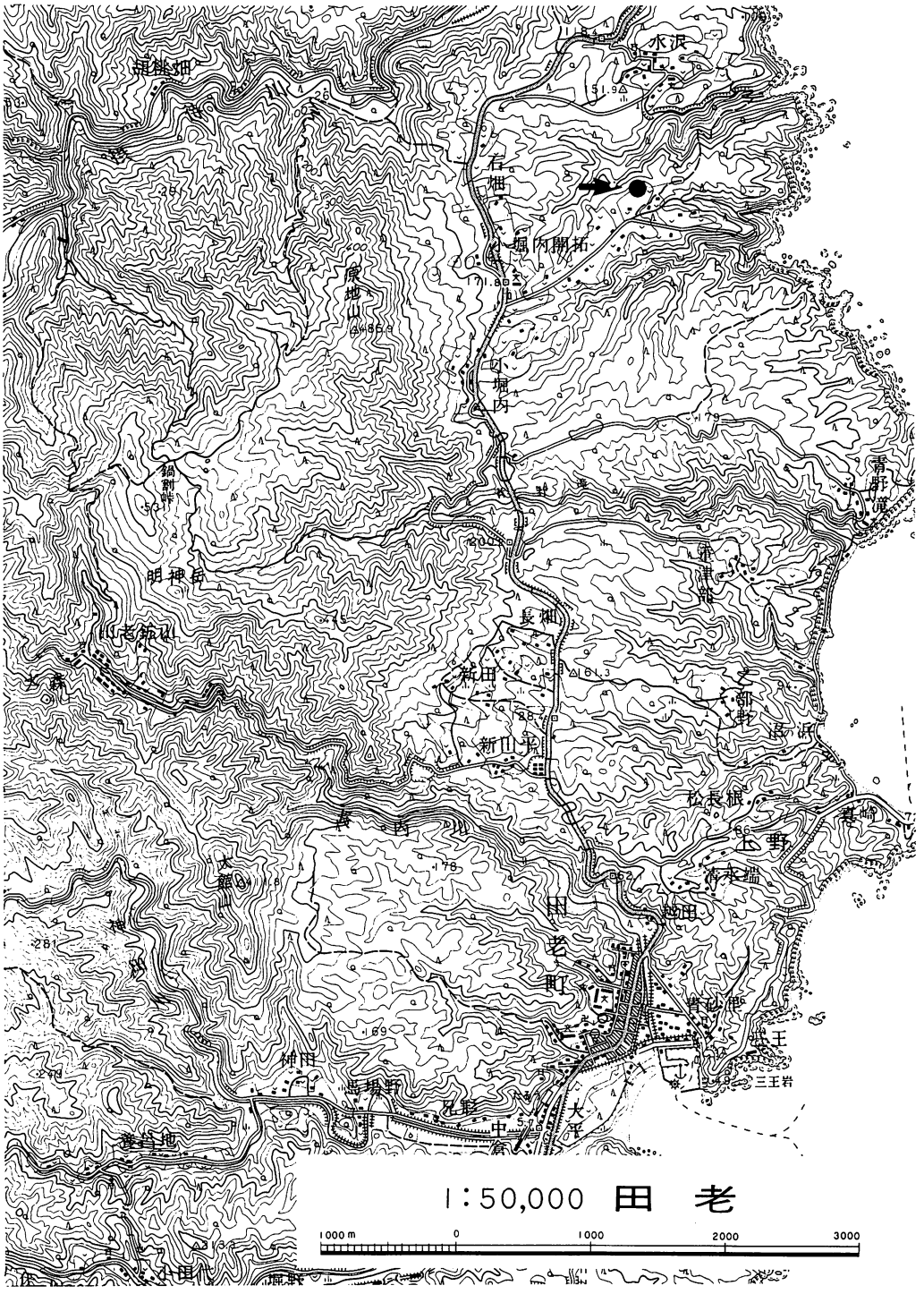


鉄　器

志波城跡出土遺物

(4) 小堀内（こぼりない）Ⅰ遺跡

遺跡所在地	下閉伊郡田老町大字摂待字向新田
事業主体	岩手県福祉部
調査期間	昭和56年8月17日～10月24日
調査対象面積	3,000m²
発掘面積	3,000m²
遺跡記号	ＫＢＮＩ81
調査担当者	専門調査員　大原一則　　専門調査員　鈴木恵治
協力機関	田老町役場、田老町教育委員会


1:50,000 田老
1000 m
0
1000
2000
3000
水沢
石畑
小堀内開拓
小堀内
明神岳
長畑
新田
新山手
松長根
上野
清水川
田老町
三王岩
大平
中
乙部
神田
小田代

小堀内Ⅰ遺跡位置図

1　遺跡の立地

本遺跡は、田老町北部に位置し、国鉄宮古線田老駅より国道45号線を約７㎞北上、田老町立田老第三小学校小掘内分校より東へ約１㎞の地点にある。遺跡は、北上山地の東縁から太平洋へ注ぐ摂待川、青野滝川に狭まれた海岸段丘奥の東緩斜面に存在する。標高は、143ｍ～145ｍである。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、田老大規模年金保養基地建設に伴う緊急事前発掘調査である。また、本遺跡は、一昨年、岩手県教育委員会文化課によって幅２ｍのトレンチ掘りによって試掘調査が行なわれ、東側から縄文時代早・前期の竪穴住居址が検出されている。今回は、それらの竪穴住居址が検出された東側を避け、遺物を多量に出土した西側を全面発掘調査したものである。

調査の結果は、竪穴住居址は検出されず、ピット３基、炭焼窯１基が検出された。以下、調査の概要である。

〈ピット〉

３基検出された。うち、Ｂ５ｒ13ピットは、調査区西端中央部に位置し、開口部径 3.5ｍ×3.2ｍ、平面形ほぼ円形、検出面からの深さ下限で 2.7ｍを越える。壁の立上がりは一様でなく、北東部は直に近いが、西から南へ至るにしたがい複雑である。本ピットは、埋土が新しく、Ｂ５ｑ14炭焼窯の至近にあり、窯打ちの際の土取り跡と推定される。

Ｂ５ｒ14ピットは、Ｂ５ｑ14炭焼窯直下で検出されている。検出面径2.4ｍ×2.4ｍ、平面形円形、検出面からの深さは約 1.2ｍである。埋土には、腐蝕していない木葉、炭化材片が含まれていたが、時期は不明である。

Ｃ６ｇ02ピットは、調査区南東端で検出された。開口部径2.3ｍ×2.3ｍ、検出面からの深さ約 0.8ｍの平面形は円形である。埋土から縄文時代早・前期の土器片が数片出土しているが流込みの可能性が強く、時期は不明である。

〈炭焼窯〉

１基検出され、調査区西端中央部に位置している。Ｂ５ｒ13ピットと隣接、Ｂ５ｒ14ピットとは重複関係にある。主体部と焚口部に分かれ、主体部の平面形は馬蹄形を呈し、焚口部は浅く掘込んでいる。規模は、長軸（主軸方向)5.6ｍ×短軸 3.1ｍを測る。主体部の壁は、厚さ20㎝、幅35㎝、長さ20㎝～80㎝のブロック状に粘土を貼付けている。底面は地山を基盤にしているが北西部寄りがピットになっている。これは、底面直下にＢ５ｒ14ピットがあり、その埋土が沈下したもので、本来の底面は、平坦であったと考える。

なお、主体部頭部には、壁を礫で囲った煙出しが、横の両壁にも円形の煙出しが付設してある。

〈出土遺物〉

縄文時代早・前期に該当する土器、石器が多量に出土した。しかし、土器はすべて細片で、かつ、復元可能なものはない。器種は深鉢である。早期のものは、尖底で、竹管、貝殻等の刺突、貝殻の条痕、箆状工具等による沈線文様がみられる。また、口縁部付近に穿孔のあるものもある。前期のものは繊維を含んでいる。

石器は、石匙、石鏃、石錘、磨製石斧、磨石、〝円盤状打製石器〟等があり、特に、〝円盤状打製石器〟の多いことが注目される。

3　まとめ

調査の概要の項でもふれたように、今回の発掘調査は、一昨年の試掘調査の結果を踏まえ、竪穴住居址が検出された地区を避けて調査を行なったものであり、調査結果においても竪穴住居址の検出はなかった。

一方、遺物は、多量に出土している。しかし、

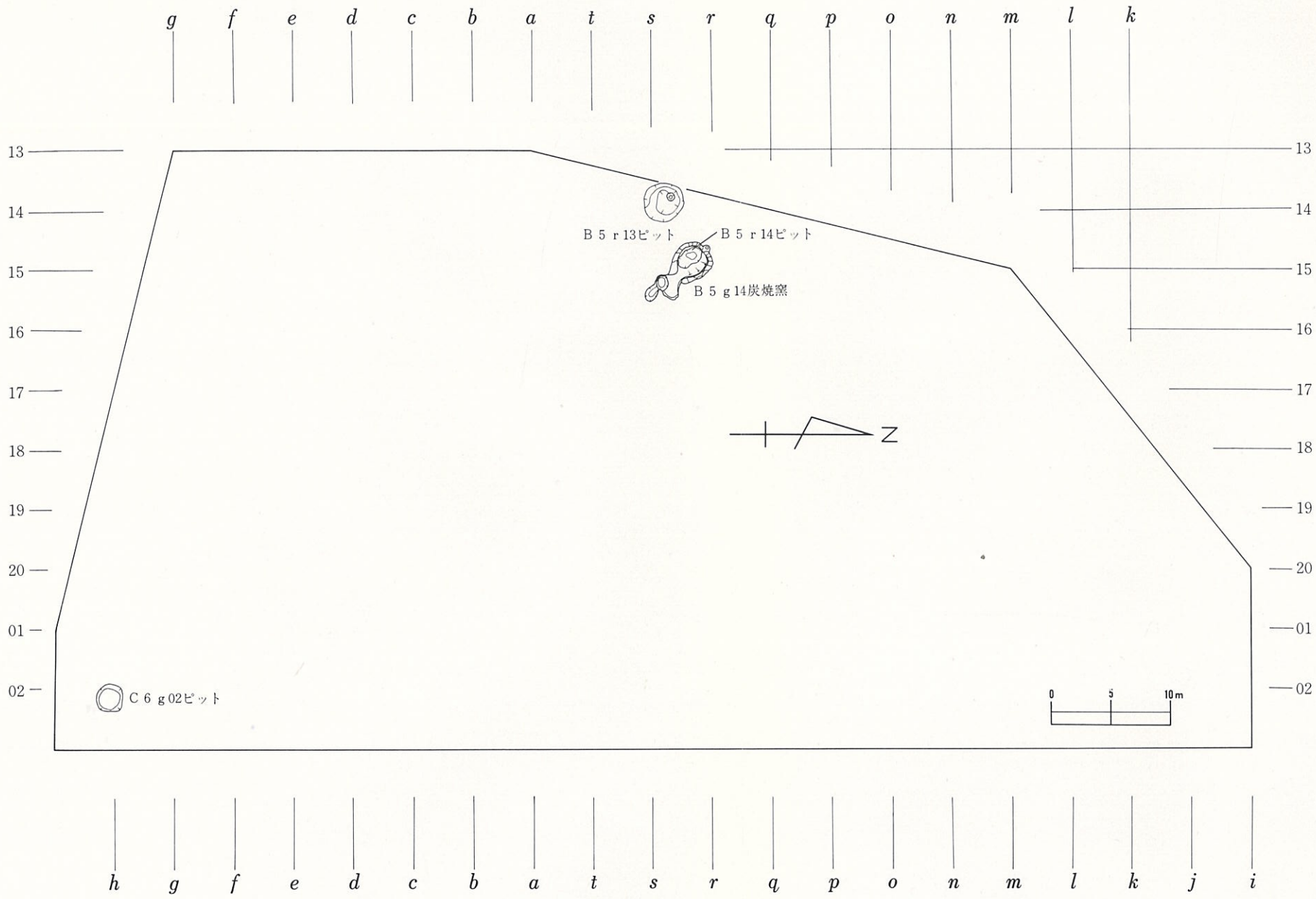
イ．土器、石器とも調査区全域にわたって、しかも、散乱した状態で出土している。

ロ．土器については、完形品は、1個体もなくすべて細片である。

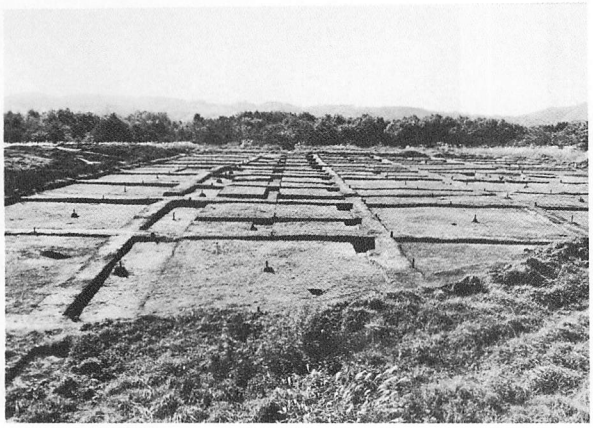
ハ．これらは、縄文時代早・前期の二時期にわたっているが、層位的区分がみられない。

等の不自然な出土状況を呈している。さらに、地元民の話しによれば、調査対象地は、戦後の開墾とその後行なわれた採草地造成により、かなりの土量の移動が行なわれたということである。

それにしても、細片のみではあるが、沿岸地区から縄文時代早・前期の土器が多量に出土したこと、また、石器では、特に〝円盤状打製石器〟の出土が多いことは注目されるところである。

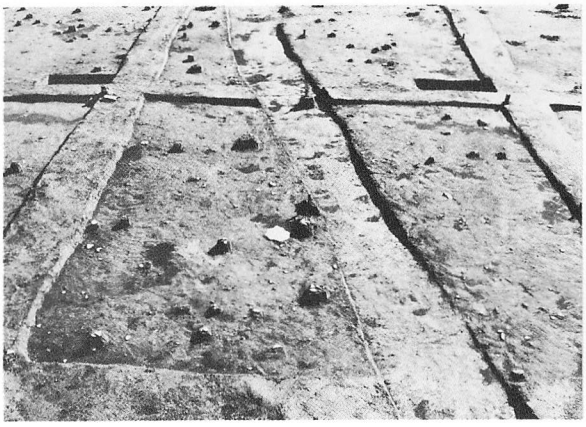


小掘内Ⅰ遺跡遺構配置図



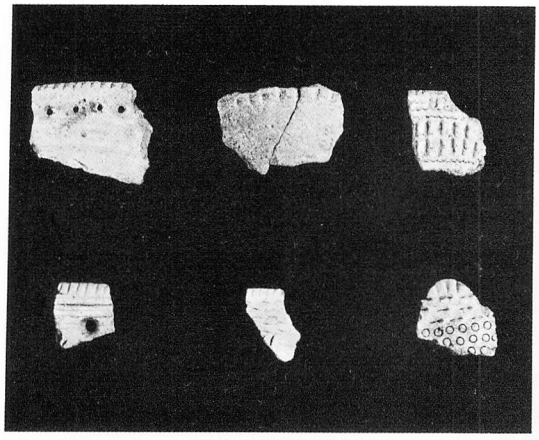
遺 跡 全 景
（北方より）

遺物出土状況

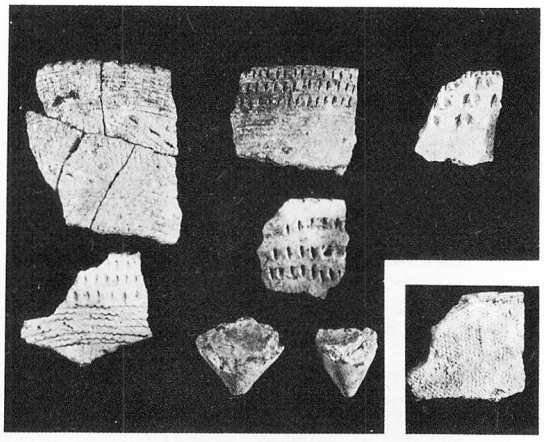


Ｃ６ｇ02ピット全景

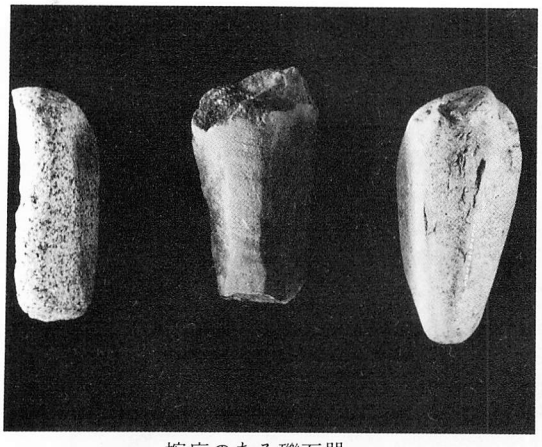
小堀内Ⅰ遺跡



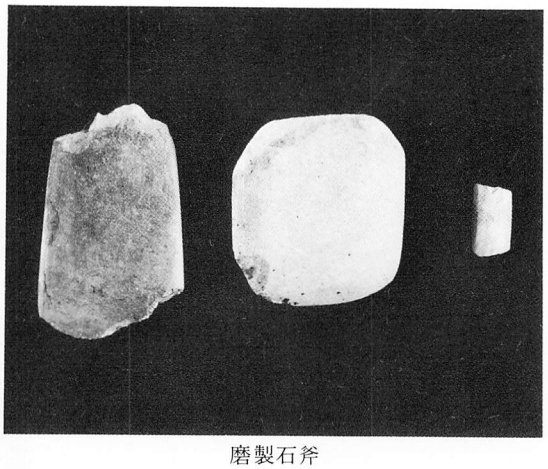
縄文土器(早期)



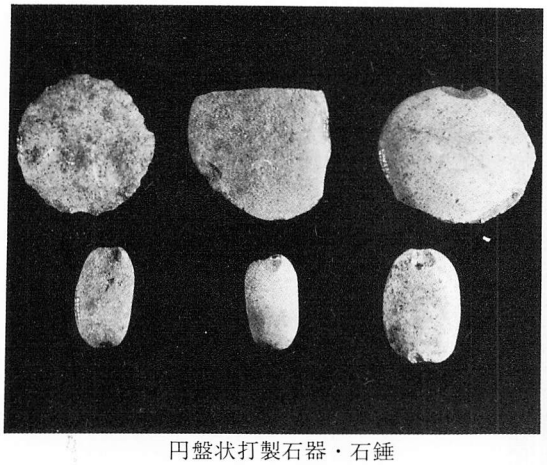
縄文土器(早・前期)



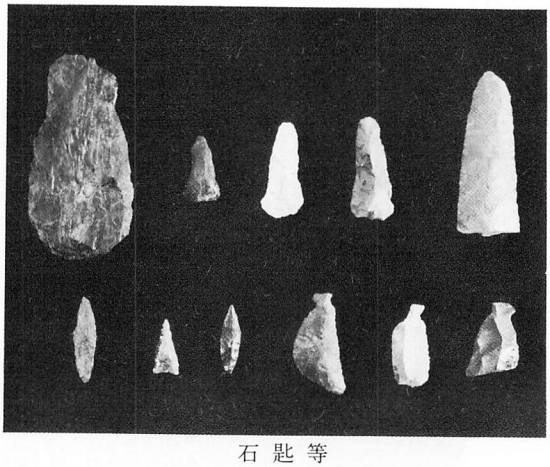
擦痕のある礫石器



磨製石斧



円盤状打製石器・石錘

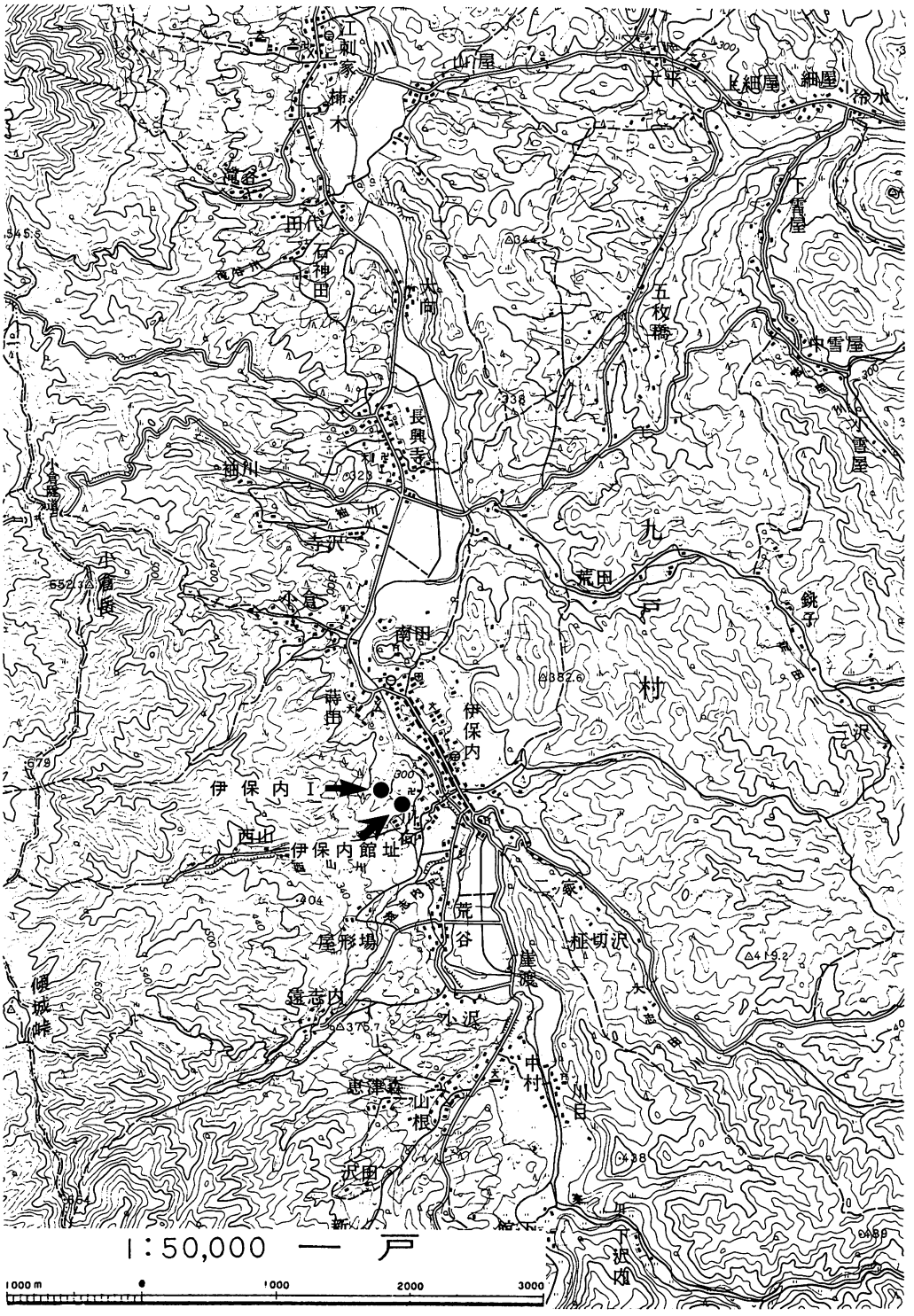


石 匙 等

小堀内Ⅰ遺跡出土遺物（縄文早・前期）

(5) 伊保内Ⅰ遺跡
伊保内館址

遺跡所在地	九戸郡九戸村伊保内22地割
事業主体	岩手県農政部二戸土地改良事業所
調査期間	昭和56年6月10日～7月28日
調査対象面積	1,232m²
発掘面積	1,232m²
遺跡記号	ＩＢＮＩ－18、ＩＢＮＤ－81
調査担当者	専門調査員　三浦謙一
	文化財専門員　渡辺洋一（県立埋文センター）
協力機関	九戸村役場、九戸村教育委員会


伊保内Ⅰ
伊保内館址
西山
荒谷
崖滝
小泥
中村
川目
恵津森
山根
沢田
荒田
五枚橋
長興寺
蒔田
南田
伊保内
1:50,000
1000m
1000
2000
3000

遺跡位置図

1　遺跡の立地

本遺跡は、九戸郡九戸村伊保内に所在する。この地域には低平な丘陵が広範囲に分布し、その前面に小規模な河岸段丘が付着している。本遺跡はその段丘面に立地する。

周辺遺跡としては、屋形場、遠志内、そして昨年度調査された川向Ⅲ遺跡などがある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、二戸土地改良事業所が実施する県営畑地総合土地改良事業（九戸村）に関連して、同事業区内における切り土工法を実施する部分のみの緊急発掘調査である。調査は全面に粗掘りをかけて遺構検出し、精査した。以下調査の概要である。

伊保内Ⅰ遺跡

〈竪穴住居址〉　3棟を検出している。1棟は縄文時代晩期前葉に所属すると推定され、中央部に地床炉をもつ。他の2棟は所属時期がはっきりしないが、いずれも大形のフラスコ形ピットが埋没したあとを再利用したもので、埋土の上部を壁や床面としており、壁際に地床炉をもつ。

〈ピット〉　15基を検出している。大部分がフラスコ形ピットであり、2基あるいは3基が切りあうもの、陥し穴状遺構と重複するものがある。

〈陥し穴状遺構〉　フラスコ形ピットと重複して1基を検出している。

〈出土遺物〉　縄文時代後期・晩期の土器が小量出土している。完形品に近いものは、遺構内から壺1点、ミニチュア土器1点が出土し、遺構外からミニチュア土器1点が出土するのみであり、他は細片状態で出土する。その他に、石べら1点、石製装飾品1点が出土している。

伊保内館址

〈陥し穴状遺構〉　細長い溝状を呈する1基を検出している。

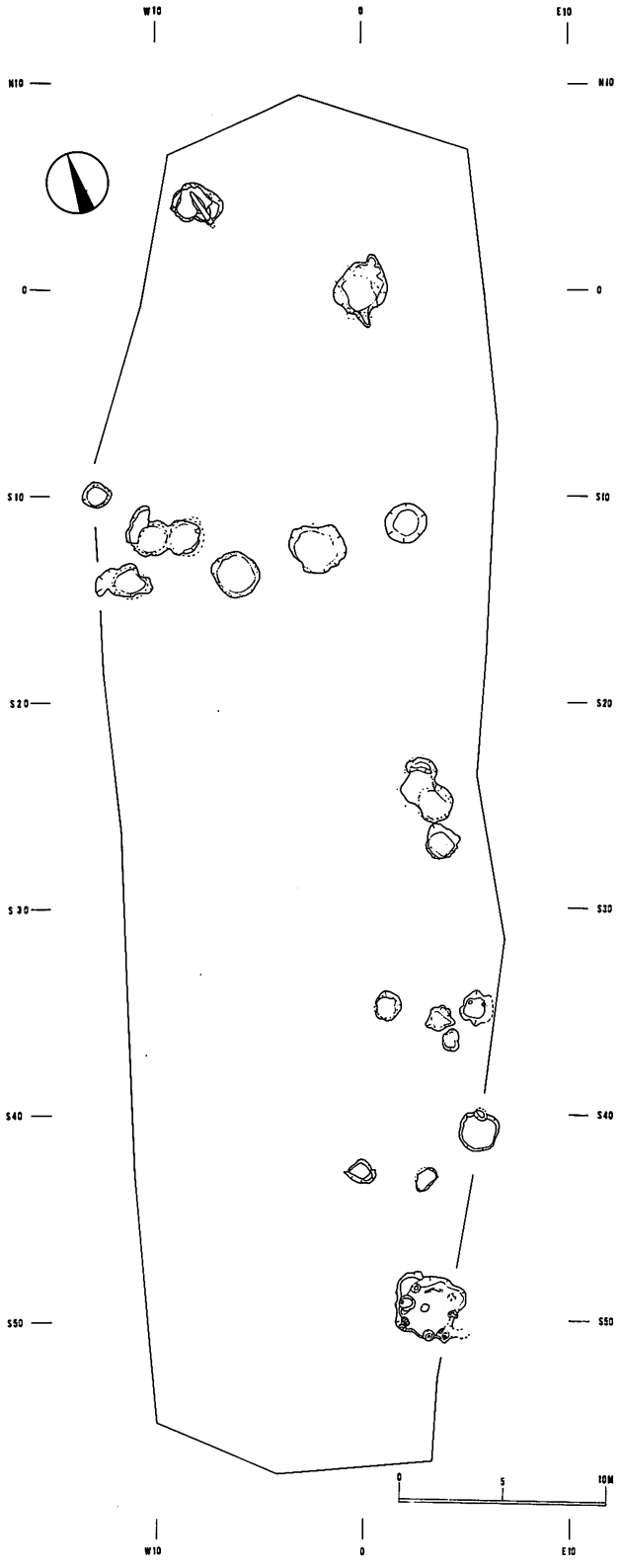
〈堀〉　幅9.30m±・深さ2.40m±の薬研堀の形態を呈するもの1条を検出している。

〈竪穴住居址〉　方形の住居址の一部と考えられる部分を検出しているが、大部分が調査区域外であり、詳細はわからない。遺物も伴出しない。

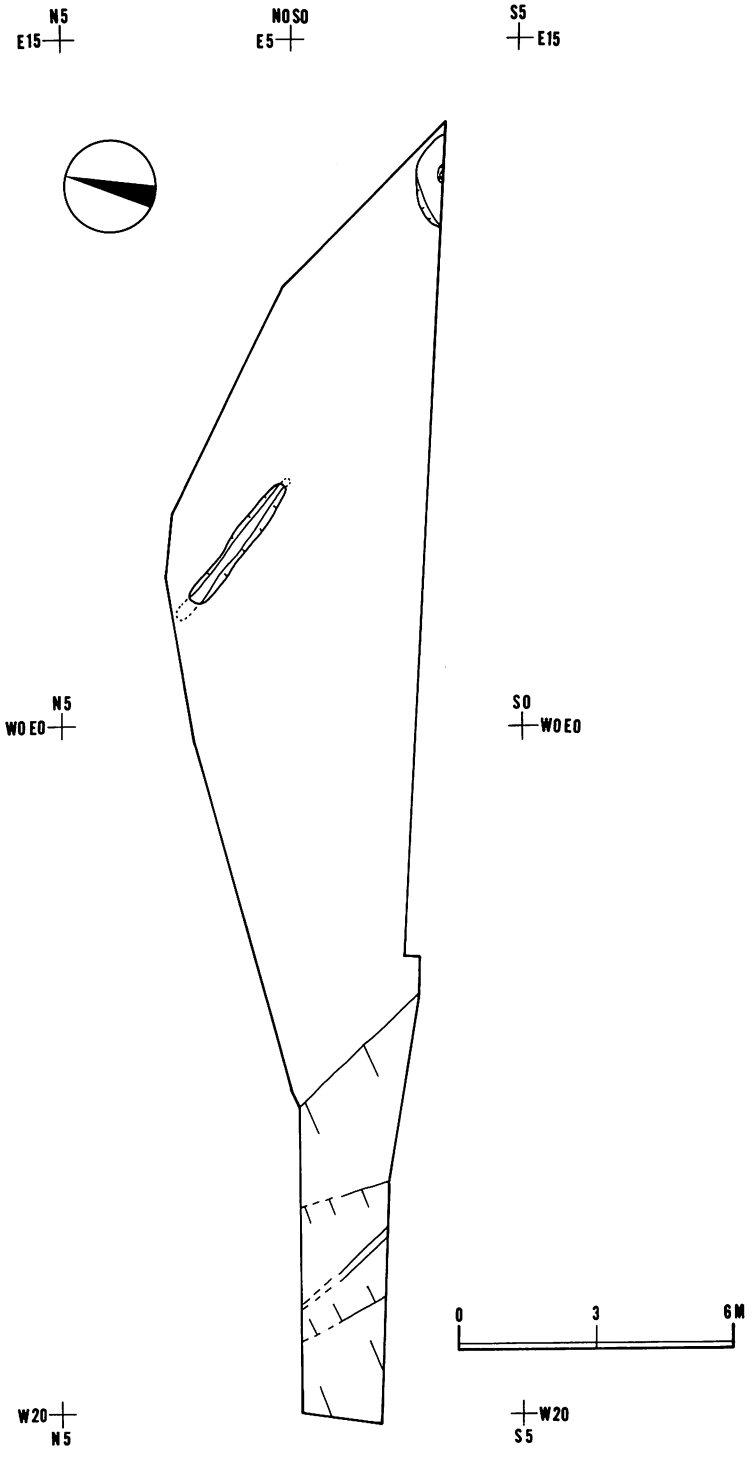
〈出土遺物〉　堀の埋土から土師器の細片数点が出土している。

3　まとめ

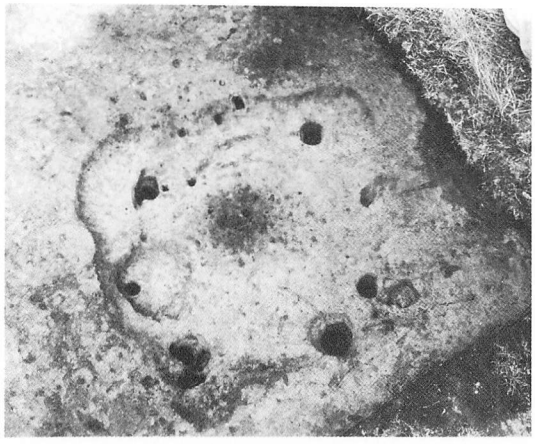
伊保内Ⅰ遺跡では、遺構や遺物から縄文時代の活動の痕跡が知り得た。また伊保内館址からは、館に伴うと思われる堀を検出できたことが成果としてあげられよう。



伊保内Ⅰ遺跡遺構配置図

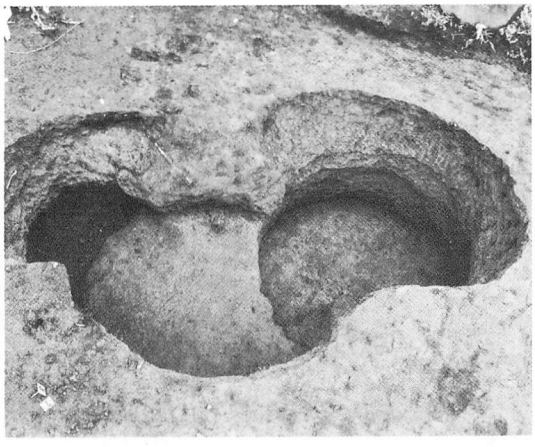


伊保内館址遺構配置図

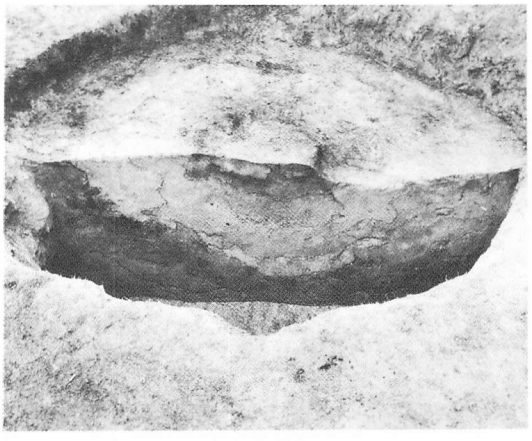


ＣＩ－１住居址（縄文時代）

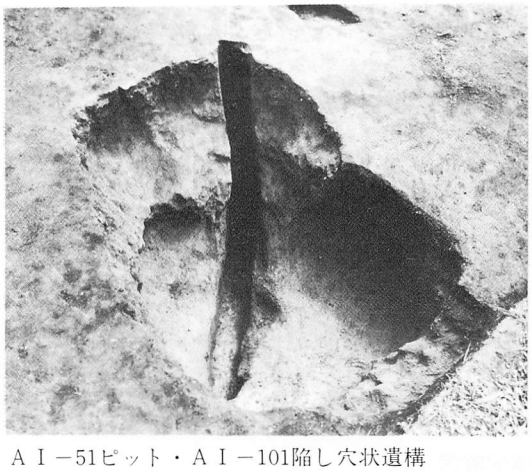
ＢＩ－１住居址（縄文時代）



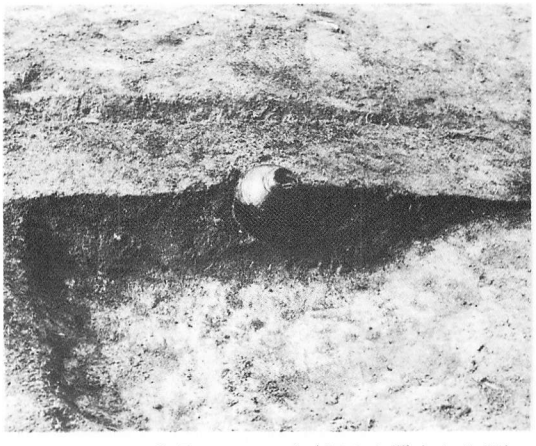
ＢＩ－54・56・57ピット（縄文時代）



ＢＩ－１住居址　断面
ＢＩ－52ピット　（縄文時代）

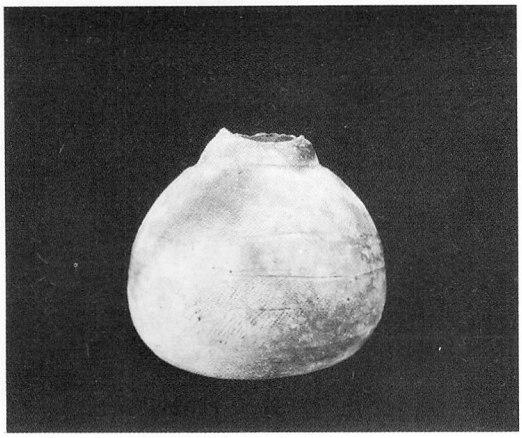


ＡＩ－51ピット・ＡＩ－101陥し穴状遺構



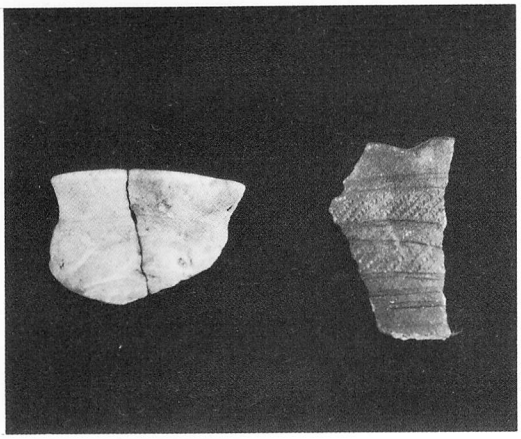
ＣＩ－55ピット（縄文土器出土状況）

伊保内Ｉ遺跡

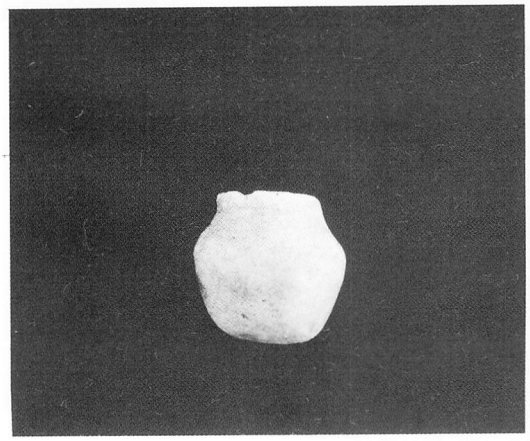


縄文土器　ＣＩ－55ピット

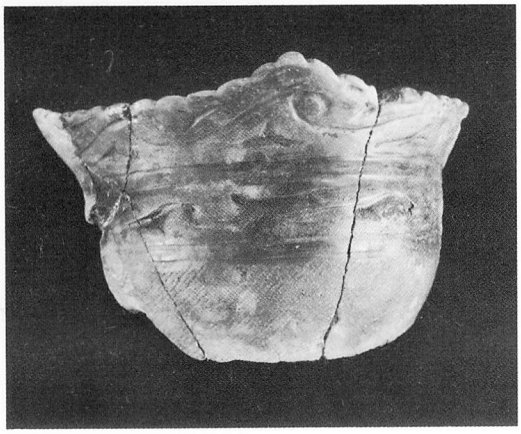
縄文土器　ＣＩ－54ピット



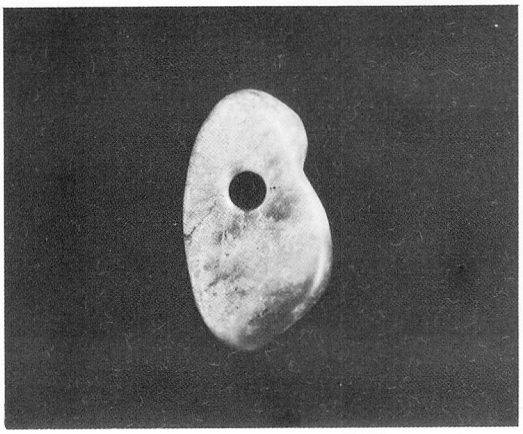
縄文土器　ＣＩ－１住居址



縄文土器　ＣＩｄ６　０層



縄文土器



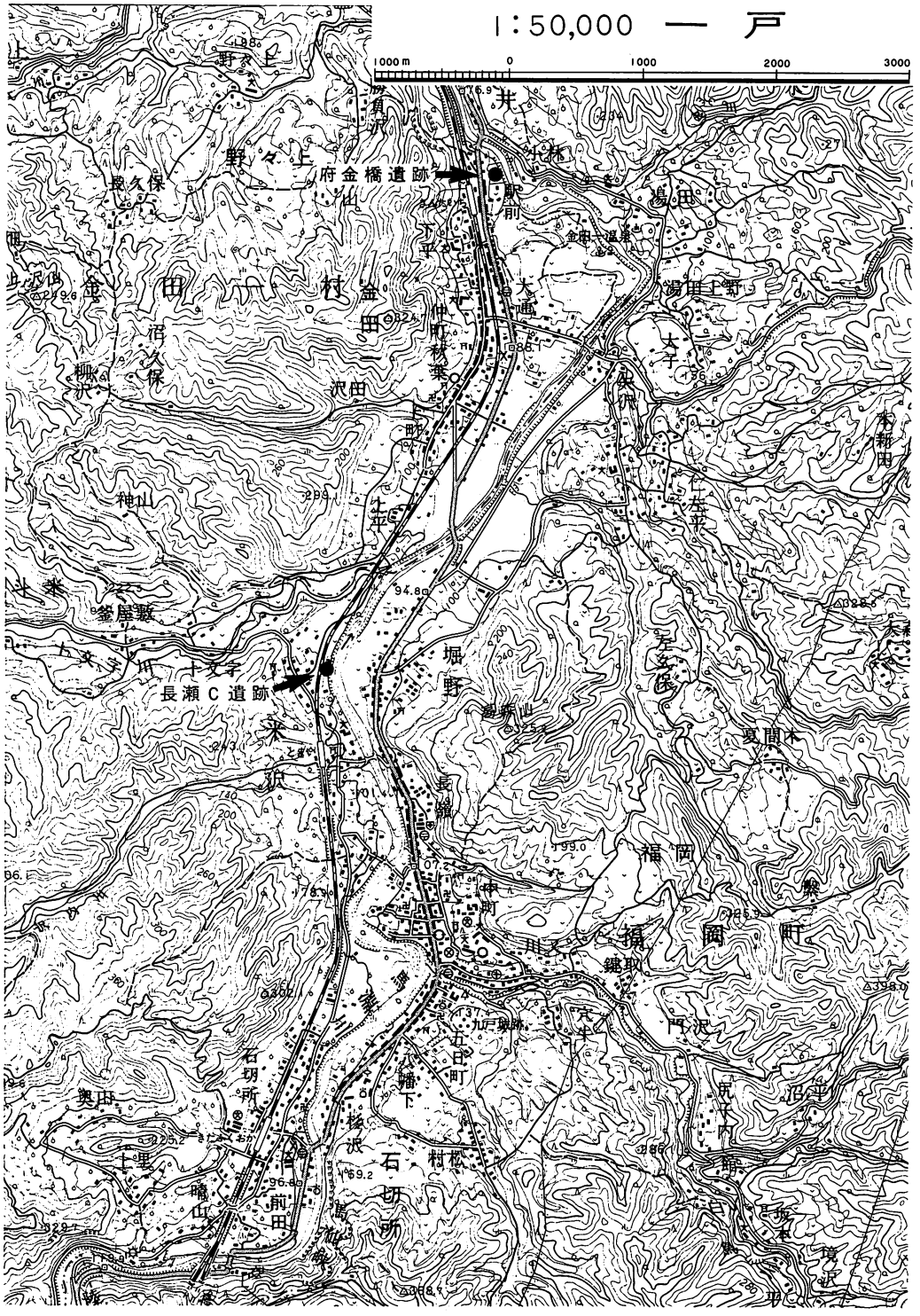
石製装飾品

伊保内Ｉ遺跡出土遺物

II 建設省関係

(1) 長瀬（ながせ）C 遺跡

遺跡所在地	二戸市米沢字長瀬
事業主体	建設省岩手工事事務所
調査期間	昭和56年4月13日～6月20日、8月1日～9月12日
調査対象面積	1,700m²
発掘面積	1,700m²
遺跡略号	NSC81
調査担当者	専門調査員　光井文行　　専門調査員　酒井宗孝
協力機関	二戸市教育委員会



長瀬C遺跡・府金橋遺跡位置図

〈立地〉

長瀬C遺跡は、二戸市斗米駅（東北本線）の北約 0.6kmの所にある。遺跡は、沖積古期面である米沢段丘（標高 100m前後）の段丘縁（馬淵川との比高25m前後）に立地する。

周辺の遺跡としては、同じ段丘面に載る長瀬A・B・D遺跡・上田面遺跡・対岸の堀野段丘に載る堀野遺跡などがある。

〈調査の概要〉

長瀬C遺跡の発掘は、二戸バイパス建設に伴う緊急事前調査である。調査は、用地取得の関係で未調査となっていた 1,700m²を対象に行なわれた。これにより、昭和49年度から始まったバイパス路線内の発掘調査は終了した。

今回の調査では、竪穴住居址7棟・陥し穴状遺構1基・堀1条が検出された。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址は、7棟のうち6棟が奈良時代、1棟が中世のものである。

奈良時代の住居址は隅丸方形を呈している。カマドをもつものは全て煙道部がトンネル式のもので、西壁中央部に設けられている。床は南部浮石と黒色土によって貼り床が施されており、この下から工具痕と思われる穴が検出されたものが4棟ある。カマドをもつ住居址の規模には、一辺6m前後のものと一辺4m前後のものがある。前者は対角線上に4本の柱穴をもち、埋土中位にレンズ状に堆積する十和田a降下火山灰層がみられる。後者には、柱穴状のピットはあるものの全て浅く柱穴の有無はあまりはっきりしない。十和田a降下火山灰層は埋土の最上部にみられる。このほかにカマド・柱穴をもたない住居址が1棟検出されている。規模は一辺3.5m前後と他に比べてやや小型である。床面の中央部が硬くしまっていることや、床面直上から磨石が出土していることなどからの途中で廃棄されたものではなく、何らの目的に使用されていたと考えられる。

中世の住居址は、東西 3.6m±、南北 3.9m±の規模をもち長方形の形状を呈している。南壁の延長上には、1m±× 1.2m±の規模を計り、緩やかなスロープ状の出入口施設をもっている。床の中央部に径40cm±の皿状の炉が検出されてる。炉の使用面は、火熱による赤色変化を受けているが、全体に軟らかく長期にわたって使用されたものとは考えられない。柱穴は、壁に沿って南北に5本、東西に4本それぞれ対をなす形で配置されている。出入口施設にも4本対をなす柱穴が検出されている。

〈陥し穴状遺構〉

中掫浮石層上面に於いて単独で検出されている。平面形は細長い溝状で、断面形は「U」字状を呈している。規模は、長軸 310cm±、短軸37cm±、深さ85cm±を計る。出土遺物はなく時

期は不明である。

〈堀跡〉

箱薬研堀の形態を示すものである。調査区域のほぼ中央部を東西に走り両端は区域外に延びている。西側で奈良時代の住居址を切っている。規模は平均で、上幅 360cm±、下幅37cm±、深さ 126cm±を計る。遺構に伴う出土遺物はなく時期は不明である。なお52年度の調査に於いて規模は小さいながら同じ形態のものが中世の住居址に切られて検出されている。

〈出土遺物〉

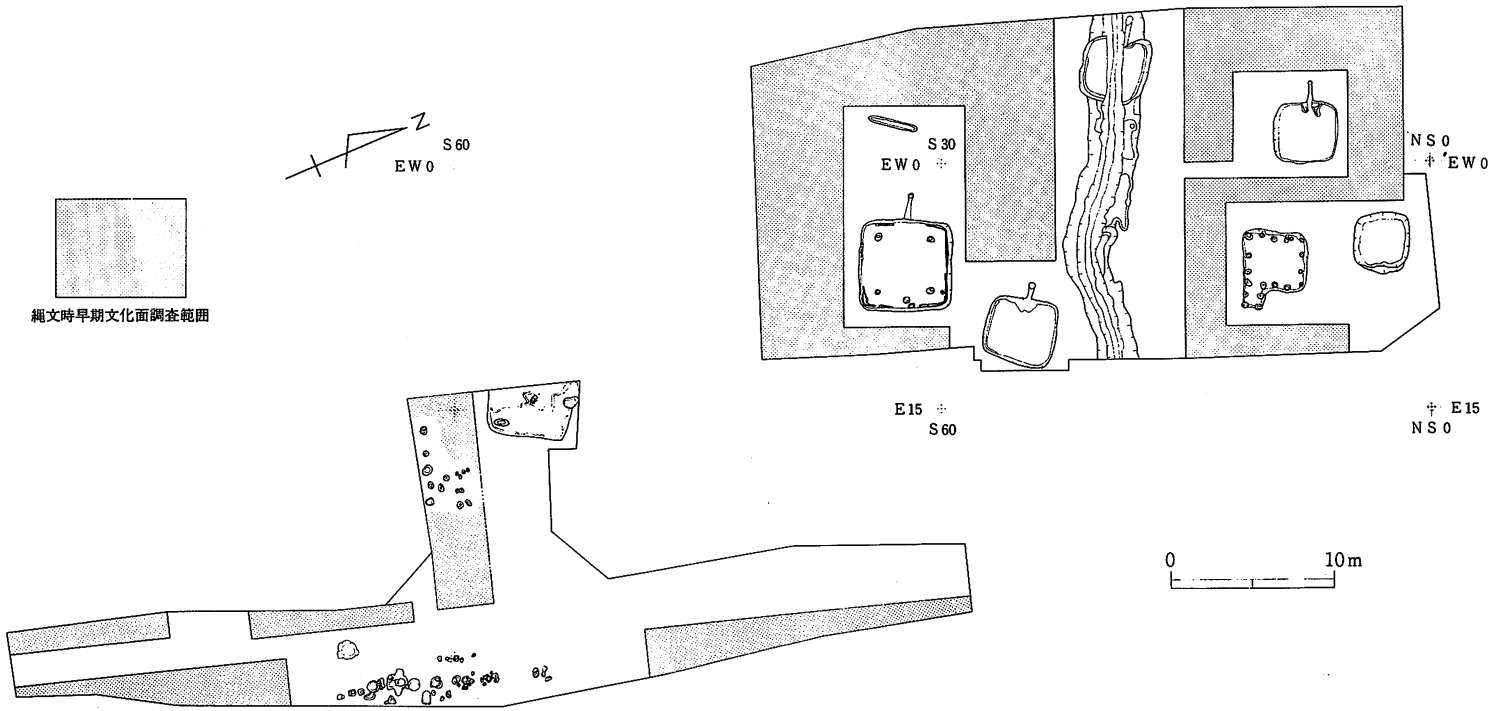
出土した遺物は、奈良時代のものが中心である。土師器は全てロクロ未使用で器種としては、坏・高台付坏・甕・甑などがある。その他に須恵器片・土玉・鈴形土製品・土製紡錘車・ガラス玉が出土している。須恵器片・鈴形土製品は長瀬C遺跡では初めての出土である。中世の住居址からは、柱穴（掘り方）から黄瀬戸（陶器）の皿が出土している。また遺構の埋土や遺構外から、少量ではあるが縄文土器片が出土している。

〈まとめ〉

検出された遺構の時期は、大半が昭和52年度に調査されたものと一致し、今回さらに多くの資料を追加することができた。遺構の廃棄時期は、埋土下部からの須恵器片の出土、住居址埋土中の十和田a降下火山灰の堆積状況からみて、須恵器の使用、及びロクロ技術の伝播直前と考えられる。

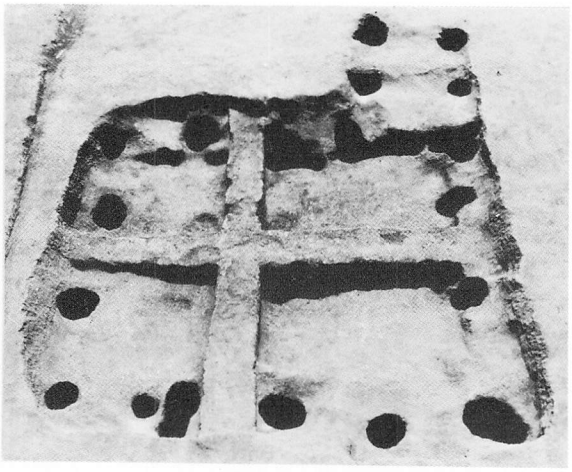
遺跡の範囲は、今まで南北に長い調査区域（路線）の東西に拡がるものと漠然に考えられていたが、今回の調査で、遺構は東側には連続してつながらないことがわかった。遺構は、前回の調査区域の東側10m前後で途切れ、これから段丘崖に至る30mには空白部が一部存在することがわかった。

同地域には、奈良時代の遺跡が数多くある。今回調査された遺構・遺物は、今後これらの遺跡の比較検討がなされ、遺跡群の相対年代、土器の編年、住居構造の移り変りなどを明らかにするための資料となろう。

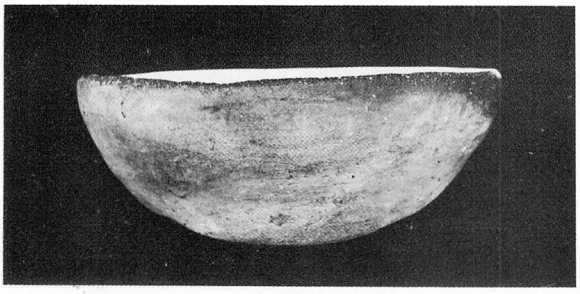


長瀬C遺跡遺構配置図

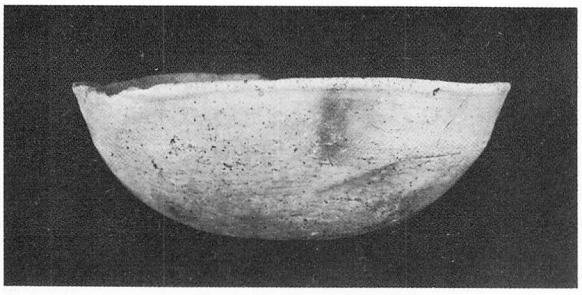
奈良時代住居址（B－1住居址）



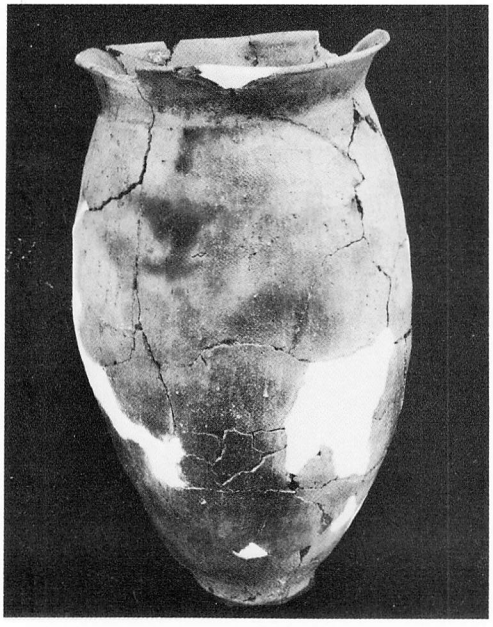
中世住居址（A－4住居址）



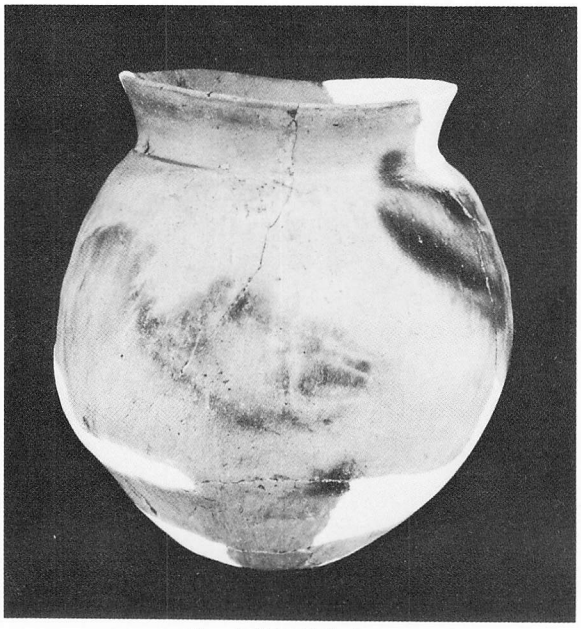
A－3住居址出土



B－2住居址出土



B－1住居址出土



B－1住居址出土

長瀬C遺跡

(2) 府金橋遺跡

遺跡所在地	二戸市金田一字駒焼場
事業主体	建設省岩手工事事務所
調査期間	昭和56年6月22日～7月31日
調査対象面積	2,850m²
発掘面積	2,850m²
遺跡記号	FB81
調査担当者	専門調査員　光井文行　　専門調査員　酒井宗孝
協力機関	二戸市教育委員会

〈立地〉

府金橋遺跡は、国鉄金田一駅（東北本線）の北東約 0.2kmの所にある。遺跡は、馬淵川の沖積丘段（川床からの比高６ｍ前後）の縁辺部に立地する。

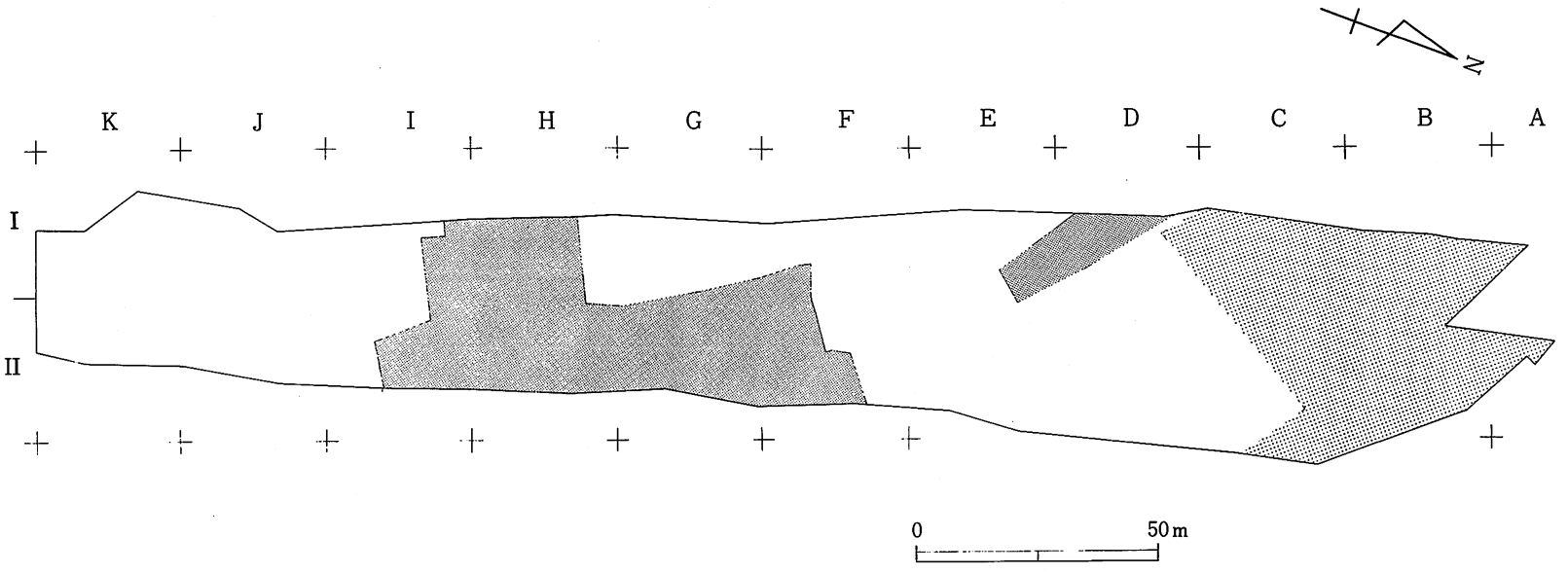
周辺の遺跡としては、上田面遺跡（奈良・平安時代)、雨滝遺跡（縄文時代晩期）などがある。

〈調査概要〉

本遺跡の調査は、府金橋架橋工事に伴う緊急事前調査である。調査は、幅３ｍ、長さ10～30ｍのトレンチを15本設定して遺構の検出を行ったが、表土下50cm±は旧河川底であり遺構は検出されなかった。表土から、土師器・須恵器・縄文土器の破片が数点出土している。出土した遺物は、段丘上部からの流れ込みと考えられ、調査区域の西側の一段高い面に遺構があるものと考えられる。

また事業者の依頼により、Ａ～Ｃ区に幅３ｍ、長さ15～40ｍのトレンチを４本入れたが、遺構・遺物とも検出されなかった。

遺構があると思われる面を含む未調査区域については昭和57年度に調査する予定である。



府金橋遺跡調査区域図

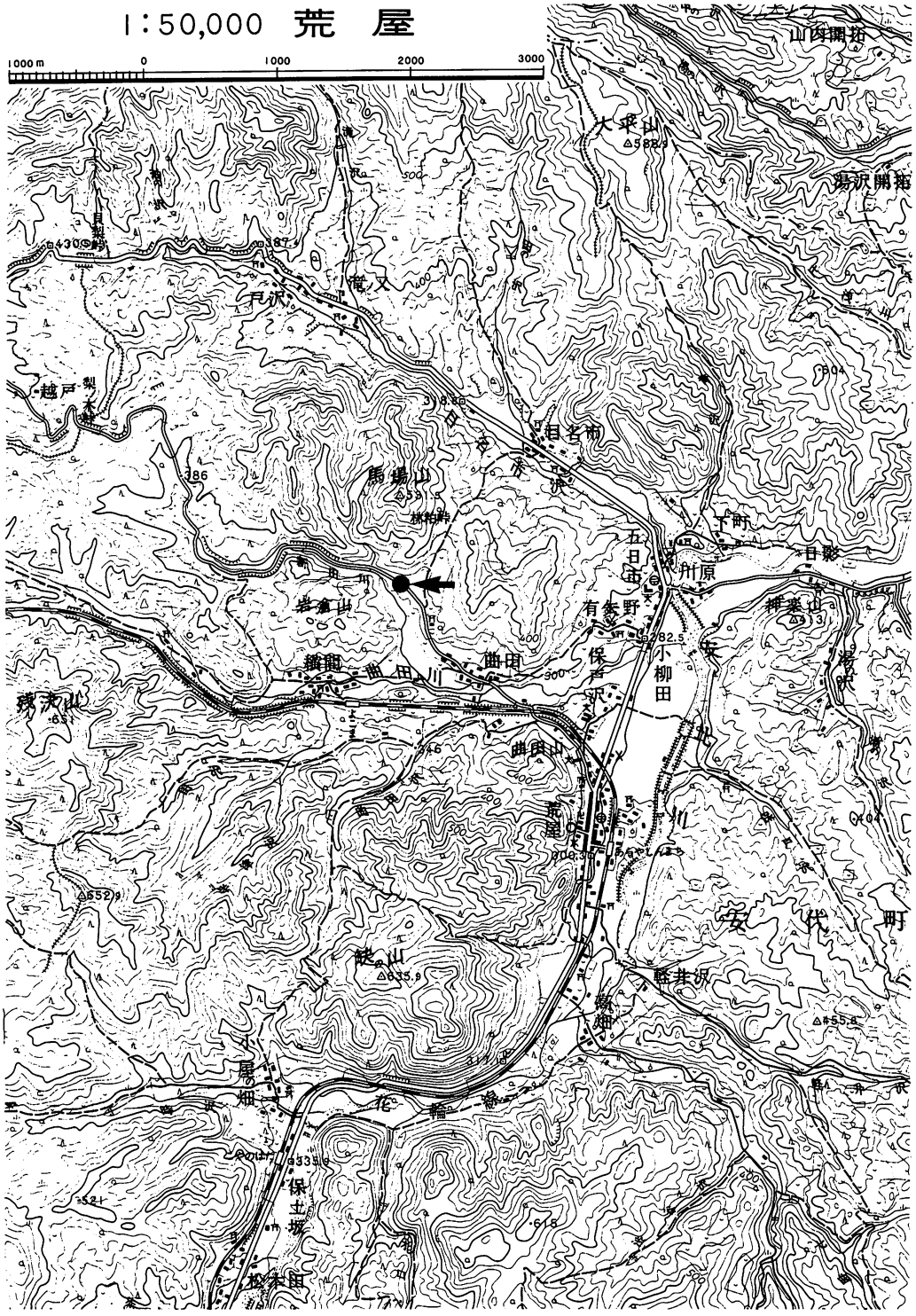
調　査　状　況

府金橋遺跡

III　日本道路公団関係

(1) 曲田（まがた）Ⅰ遺跡

遺跡所在地	二戸郡安代町字曲田および上の山
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年4月6日～7月15日
調査対象面積	約 5,000m²
発掘面積	約 5,000m²
遺跡記号	ＭＴＩ81（ＵＹⅪ）
調査担当者	専門調査員　平井　進　　専門調査員　鈴木隆英
協力機関	安代町教育委員会


1:50,000 荒屋
1000 m
0
1000
2000
3000
山内開拓
大平山
場沢開拓
戸沢
越戸
馬場山
五日市
下町
日影
有矢野
小柳田
押巻山
湯沢
岩倉山
曲田
曲田山
荒屋
安代町
鍛山
軽井沢
小屋畑
花輪
保土坂
松本田

曲田Ⅰ遺跡位置図

1　遺跡の立地

本遺跡は国鉄花輪線荒屋新町駅の北西約 2.5km地点付近に位置している。周辺には馬場山、上の山、岩倉山などの低い山並みが連なっている。すぐ南側には安比川の支流曲田川に注ぐ新田川が西方の梨木峠方面から南東に向かって流れている。遺跡は上の山と馬場山に挟まれた小規模な崖錐性扇状地の北西扇端部に立地している。遺跡付近の高度は海抜325～340mで、周辺部には有矢野、上の山Ⅰ～Ⅹ、曲田Ⅱ・Ⅲ、保土沢などの遺跡が散在している。

2　調査の概要

本遺跡は東北縦貫自動車道の建設工事に伴なって、昨年度より緊急発掘調査されているが、本年度はその第２回目である。今次の調査では、昨年度の調査区に隣接する自動車道建設予定地約 5,000m²の範囲を対象に、主として縄文時代の住居址からなる遺構群の探索を行なった。その結果、縄文時代の竪穴住居址46、柱穴状ピット約 700、墓拡状ピット５、集石遺構２、それに時期不明の道跡跡３、近代以降の炭窯跡１などが発見された。以下、発見遺構と遺物の概略を述べる。

〈竪穴住居址〉

46棟の竪穴住居址は新田川に面する崖沿いに多く分布している。開田工事や道路工事によって、その多くは破壊を受けている。時期的には、縄文時代中期末１、後期末２を除いて、ほとんど晩期前葉に属する。平面形はいずれも円形に近いが、晩期前葉の住居址では楕円形の例も見られる。住居址全体の規模は最大12m×12m内外（晩期）と最小2.5m×2.5m内外（中期末、晩期）と大小の違いは見られるが、５m×５m内外と３m×３m内外の規模の例が多い。時期の違いによる規模の大小は特に認められない。炉は中期末、晩期の小型住居址に一方の壁寄りに設けられている例があるが、多くの場合、床の中央部に設けられている。形態としては中期末、後期末、晩期前葉を通じて石囲い炉が多い。この他、晩期前葉の場合には地床炉や石囲いした埋甕炉、土器片囲い炉の形態も見られる。上屋を支える柱跡は、確認された例では４本１組で長方形ないし正方形に配置されるのが一般的である。これらの住居址は占地場所が限られてるせいか、重複する事が多く、ほぼ同一場所に３～5期の重複の認められる例も知られる。その他、特異な例としては晩期の住居址と思われる１住居址で、炉のそばに板状の立石の伴なっている例がある。また、12m×12m内外の晩期の大型住居址のように、規模が他の住居址よりすば抜けて大きい上、床面に巨礫が露出し凸凹が著るしく、一般住居址というよりは何らかの特殊施設跡と考えられる例もある。

〈柱穴状ピット群〉

住居址周辺から昨年度と同様、多数発見されている。各ピットの大きさはいろいろであるが、直径20～30cm、深さ20～50cm大のものが多い。その多くは住居址の場合と同様、縄文時代の建

物跡の一部と考えられるが詳細は不明である。

〈墓拡状ピット〉

墓拡状ピットは最大径１ｍ内外の平面楕円形のもの４と、それよりやや規模の小さい円形のもの１の２種が発見されている。前者は伴出遺物が無いので詳細な時期は不明であるが、後者は縄文時代後期前葉に属すると思われ、そのすぐそばからは後述する集石遺構が発見されている。

〈集石遺構〉

縄文時代晩期の最大住居址と重複して１、先述の墓拡状ピットのそばに１、それぞれ発見されている。前者の場合、廃棄された住居址の内側に円ないし環形の集石が認められた。石はほとんど付近の山地に見られる直径15～30cm大の石英安山岩の亜角礫で、一部は火熱を受けて赤化している。後者の場合には長さ３ｍ、巾１ｍ内外の範囲に前者と同じくらいの大きさの礫が積まれている。その中には前者と同じ亜角礫も少し含まれているが、大部分は付近の川原や礫層中に見られる丸味のある礫である。

〈道路跡〉

道路とそれに伴なう側溝と思われる遺構が３条発見されている。これらの遺構は既に昨年度その一部が発見されており、本年度の調査ではその延長部が検出された。詳細な時期は不明であるが縄文時代の遺構を破壊しており、それよりも明らかに時代の下がる、新期の遺構である。

〈炭窯跡〉

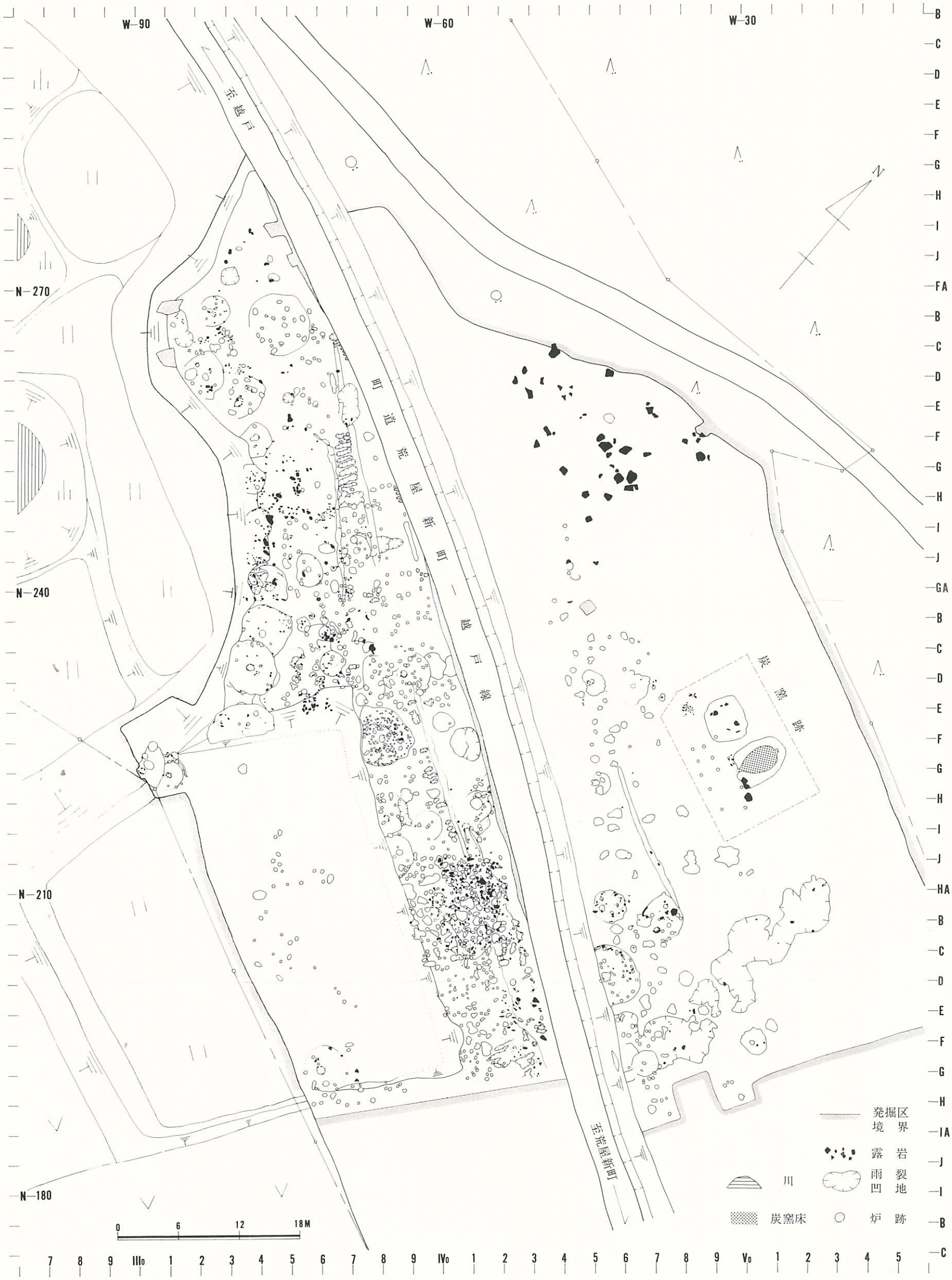
調査区北半部の山麓緩斜地で土取り穴や小屋（タズドと呼ぶ）跡を伴なって発見された。窯体は傾斜地を掘り込み、粘土で構築されており、平面は南北に長い卵円形で、南側に焚口、北側に煙突がそれぞれ着けられている。全体的な形状から昭和初期の炭窯跡と思われる。

〈出土遺物〉

今次の調査で発見された遺物の総数は２～３万点に及ぶ。その大部分は縄文時代晩期前葉の土器・石器・フレーク等である。これらは主として住居址の埋土や周辺の遺物包含層から出土している。その他に遺物としては縄文時代中期末葉、後期前葉、弥生時代中期、近現代のものが少数ながら出土している。晩期前葉の土器類の中には文様構成上、従来の大洞Ｂ、Ｂ－Ｃ式の型式区分に入り切らない一群もある。

3　まとめ

今次の調査によって、曲田Ｉ遺跡付近に縄文時代晩期前葉に、山間地としてはかなり規模の大きい集落の営まれた事実が明らかになった。そればかりでなく、発見された同期の住居址の中に特異な形態例が知られ、遺物にも、独特の文様構成を有する一群が知られた。これらの事実は、今後、縄文時代晩期前葉はもちろん、広く、原始、古代に於ける当地域一帯の文化の変遷をたどるための貴重な手掛りとなるであろう。



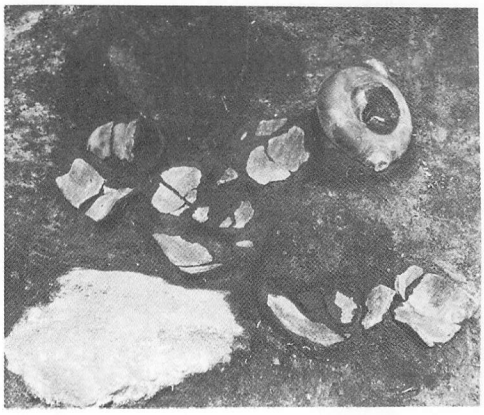
曲田Ⅰ（上の山Ⅺ）遺跡1981年度調査遺構配置図

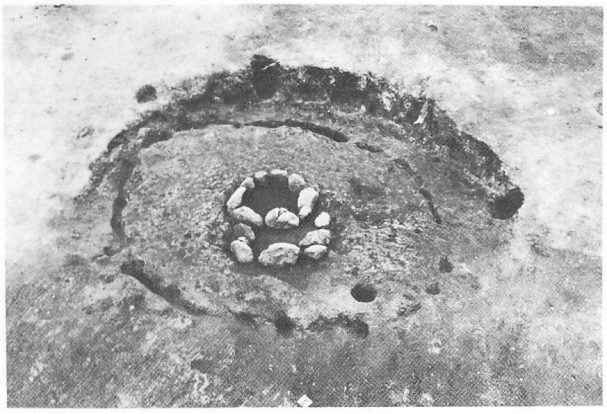
1

1：81年度調査区全景（上方は北東）

2

3



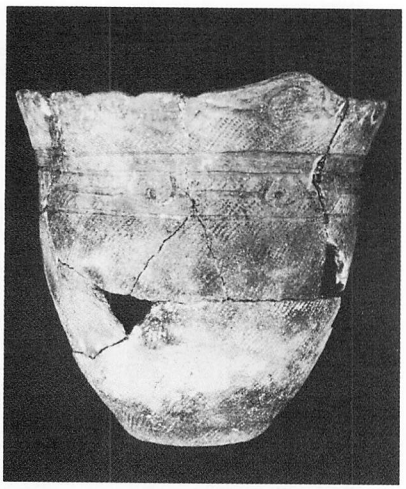


4

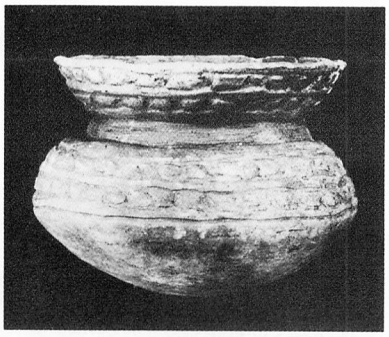
2：GⅢ－015住居址
全景（北西より）
3：GⅣ－017住居址
遺物出土状況（南より）
4：FⅣ－011住居址(1)、(2)
全景（南西より）

曲田Ⅰ遺跡

3

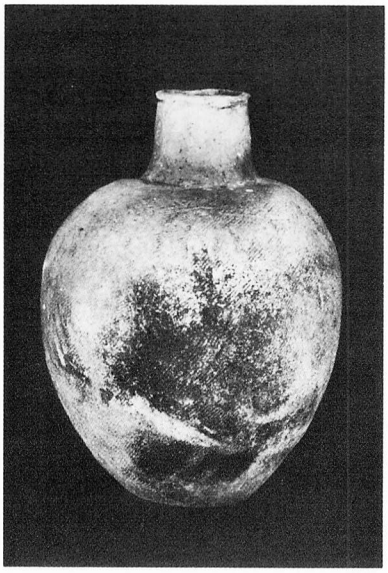


4

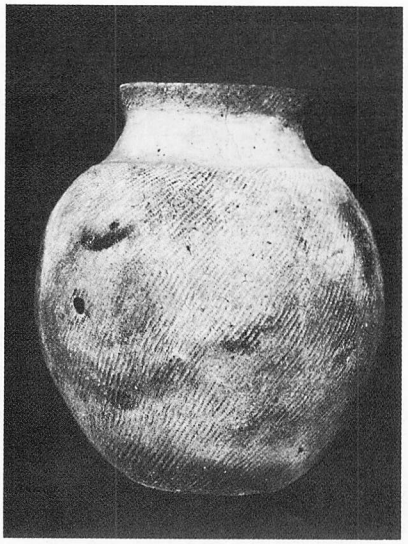


2

5



1



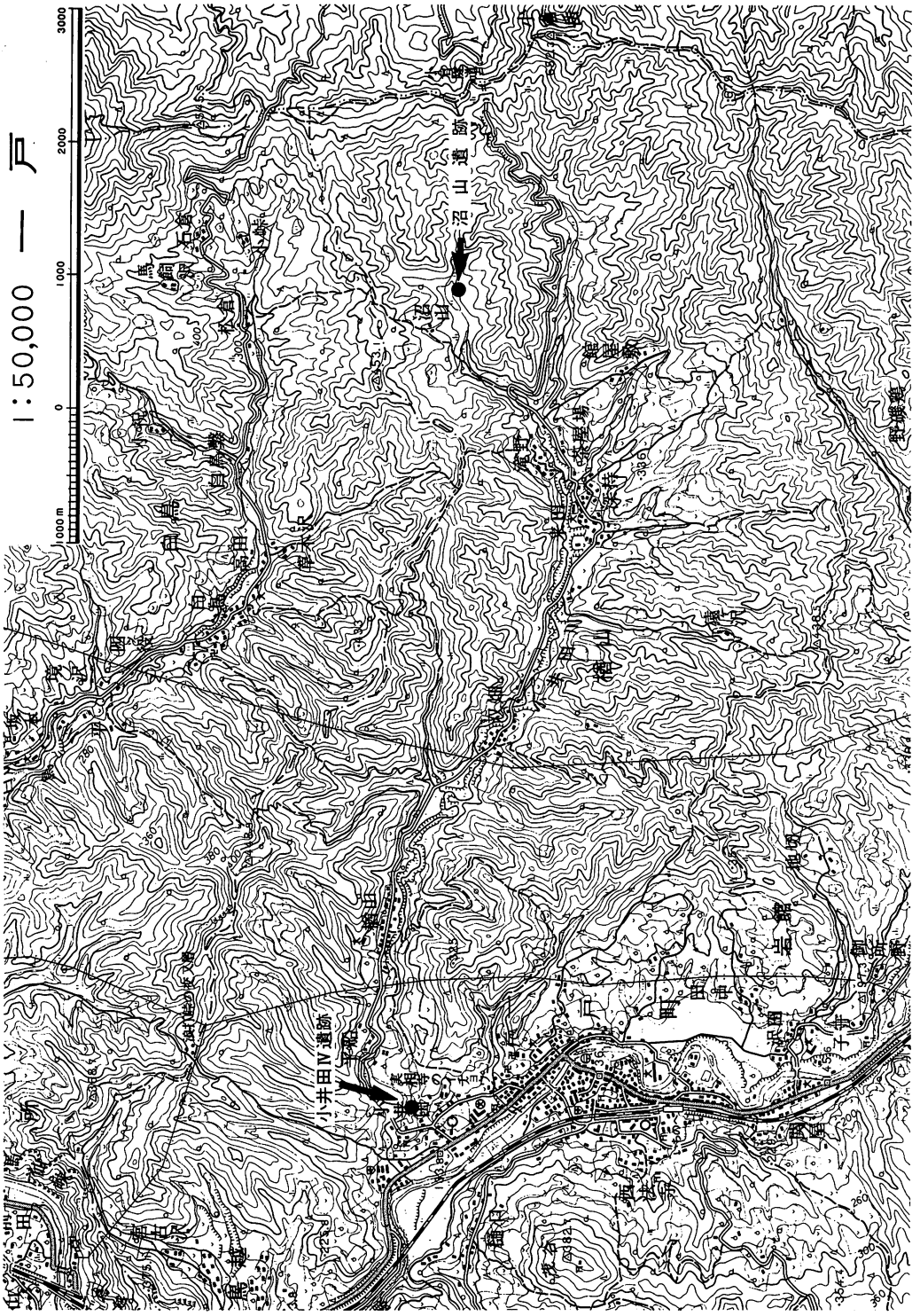
6

1～6：各遺構出土土器（約1/3）

曲田Ⅰ遺跡出土遺物

(2) 小井田(こいだ)Ⅳ遺跡

遺跡所在地	二戸郡一戸町楢山字平船向
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年4月13日～9月4日
調査対象面積	7,240m²
調査面積	5,340m²
遺跡記号	KⅠⅣ81
調査担当者	専門調査員　小平忠孝　　専門調査員　栃沢満郎
協力機関	一戸町教育委員会



東北縦貫自動車道関係遺跡位置図（一戸町）

1　遺跡の立地

本遺跡は、東北本線一戸駅より北約２㎞に位置する。遺跡は、小倉岳山腹に源を発し西流する馬渕川支流の小井田川によって形成された左岸の沖積段丘面に載っている。

調査区域には、南東より北西方向へ小さい谷が刻まれている。谷は崖錐性の堆積物に覆われている。谷部には伏流があり、数ケ所に小さい湧水がみられる。

周辺の遺跡としては、蒔前台遺跡・小井田Ⅲ遺跡・北舘遺跡などがある。

2　調査の概要

本調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。発掘対象面積は 7,240㎡であるが、調査区域内の用地問題が解決しないため本年度は 5,340㎡の発掘調査を行った。未調査区域については、昭和57年度に発掘調査を行う予定である。

調査は、未買収地を除く対象区域全域を粗掘し遺構検出を行い精査した。発掘作業中に谷部分の各所に湧水がみられ作業は困難を窮めたが、膨大な量の土器片・石器類の出土をみた。

検出された遺構は、住居址４棟、ピット９基、焼土遺構５ケ所、遺物包含層１ケ所、堤防状遺構１ケ所である。

〈竪穴住居址〉

縄文時代竪穴住居址は、４棟検出された。ＢⅢ１住居址は、調査区東側の一段高い段丘緩斜面より検出された。住居址の西側約½が削剝を受けており平面形・規模は不明であるが、残存部の平面形は半円形を呈している。壁高は、東壁で約40㎝を測る。床面は、東より西へごくわずか傾斜しており、床の残存部西側に地床炉が設けられている。東壁際の床面より炭化物塊が検出された。床面より５ケの小ピットが検出されている。埋土より土器片が数片出土している。

ＤⅡ１住居址・ＤⅡ２住居址・ＤⅡ３住居址の３棟は、谷口底部の砂質堆積土上面より検出された。ＤⅡ１住居址の平面形は円形で、規模は径 3.5ｍを測る。床面は平坦で、一部に貼床がみられる。床面より５ケの小ピット検出された。炉及び焼土は検出されない。

ＤⅡ２住居址は、伏流による削剝を受けており、平面形・規模は不明である。床面中央よりやや北寄りと推定される位置に石囲炉が設けられている。石囲炉の周囲には、炉石をとりまく形で径５㎝～30㎝の数十個の礫が配されている。ピットとの重複関係が認められる。

ＤⅡ３住居址は、ＤⅡ２住居址の西に隣接して検出された。本住居址の時期は、縄文時代後期末葉である。平面形は円形で、規模は径 3.5ｍを測る。床面は平坦で、ほぼ中央部に石囲炉が設けられている。床面より、貼瘤文の台付鉢形土器・注口土器及び深鉢・土器片が出土した。

〈ピット〉

検出された９基のピットのすべてが、谷部分に堆積された砂質土より検出された。形状別にみると、円形６基、楕円形１基、不整形円形乃至不整形楕円形２基である。最大規模は、長軸

2.2m、短軸1.5mを測る楕円形皿形ピットである。最小規模は、径80cmを測る円形ピットで、いずれも小規模なものである。

〈焼土遺構〉

焼土遺構は、調査区域の谷筋に沿って5ケ所検出された。焼土は、いずれも現地性のものである。遺物が共伴せず時期は不明である。

〈遺物包含層〉

この包含層は、調査区の南東から北西にのびる谷の谷口部に分布している。この地域は、崖錐性の堆積物によって谷が埋められており、その中に包含層が形成されている。

遺物包含層には、土器・石器のほかに礫も含まれている。出土遺物は膨大な量である。土器は、ごくわずか完形に近いものも出土したが、大部分は摩耗した土器片である。出土土器の時期は、縄文時代後期から縄文時代晩期末葉にかけてのものであり、同一層より混在して出土する。石器は、磨石・凹石が多く、剝片石器の出土は少ない。

遺物包含層の下位に層厚約20cmの黒褐色層が存在するが、この層からの遺物の出土はみられない。さらにこの下位に砂質土の厚い堆積がみられ、砂質土上面より縄文時代後期末葉の竪穴住居址やピットが検出されている。こうした状況からみて、遺物包含層より出土した遺物の多くは、他より土石と共に運ばれ谷口部に堆積したものと推定される。

〈堤防状遺構〉

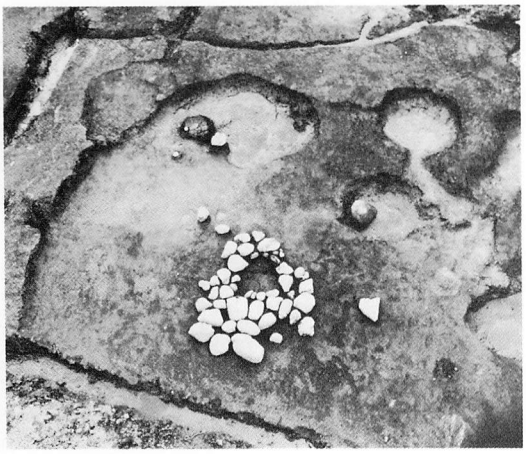
本遺構は、谷口中央部に位置し、南東より北西へ傾斜しながらほぼ直線的にのびる長さ約30m、幅1m～1.5mの畔状のものである。黒褐色土の堆積層を掘り込み、礫と砂により構成されている。時期、性格は不明である。

3　まとめ

現地表面下約1.2mの谷口底部の堆積砂質土上面より住居址が検出されたことは意外な結果であった。このことは、縄文時代後期における遺跡の環境と居住地の占地を知るうえで貴重な資料である。住居址検出面の上位に載る遺物包含層は、崖錐性の堆積物により形成されたものと考えられ、出土遺物の多くは2次以上の移動を受けていると推定される。これにかかわる遺構は、今回の発掘調査で検出できなかった。次年度は、谷筋の中域よりやや下方付近を発掘調査する予定であり、なんらかの手懸かりを得たいと考える。

小井田Ⅳ遺跡遺構配置図

D II－1住居址



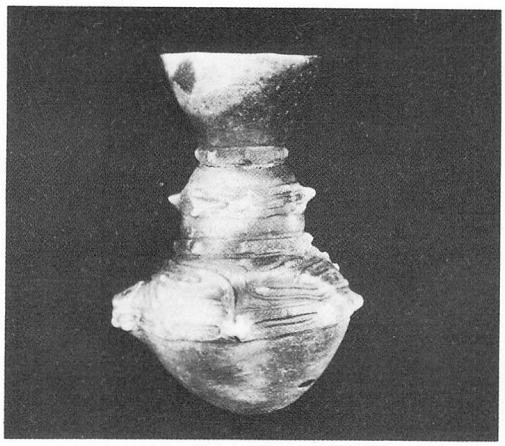
D II－2住居址

D II－3住居址

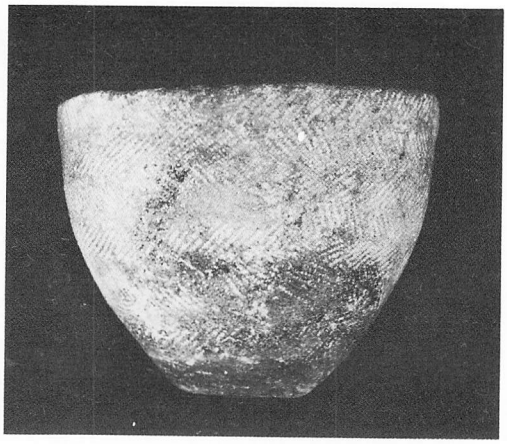
B III－1住居址

D II－56·Pit

小井田Ⅳ遺跡

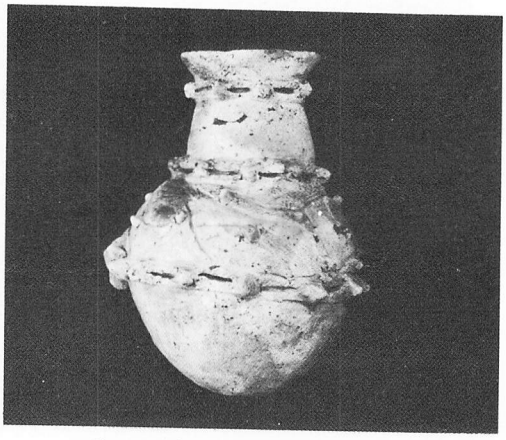


注口土器　　D II 区遺物包含層



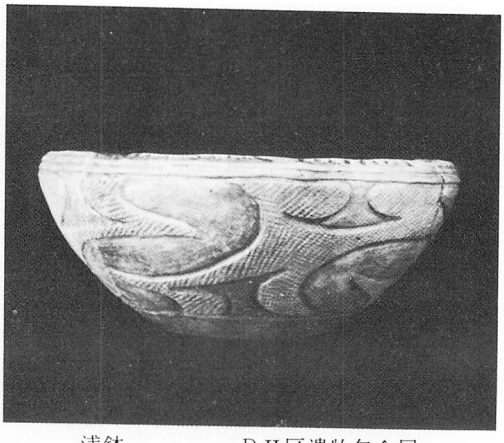
深鉢　　D II 区遺物包含層

台付深鉢土器　D II 3 住居址



注口土器　　D II 3 住居址

土製品　　D II 区遺物包含層



浅鉢　　D II 区遺物包含層

小井田Ⅳ遺跡出土遺物

(3) 沼山（ぬまやま）遺跡

遺跡所在地	二戸郡一戸町楢山字沼山
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年8月28日～9月12日
調査対象面積	100m²
発掘面積	100m²
遺跡記号	NY81
調査担当者	専門調査員　小平忠孝　　専門調査員　栃沢満郎
協力機関	一戸町教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は、東北本線一戸駅より東北東約 6.5kmに位置する。周辺には、折爪岳・小倉岳・傾城峠が高原状をなしながら連り、ほぼ南北に主分水嶺が伸びている。遺跡は、馬渕川支流の小井田川によって形成された谷底平野に面する小倉岳山麓緩斜面末端に位置している。遺跡の標高は、220m～221mである。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線折爪トンネル西工事用道路取り付けのための林道拡幅に伴う緊急発掘調査である。調査区域は、林道南側に沿って幅３m長さ35mの約 100m²の小範囲に限られている。調査は全域に粗掘をかけて遺構検出を行い精査した。この結果、調査区域西端に住居址の壁及び床面の一部が検出されたため、西側に約３m調査区を拡張し精査した。調査によって検出された遺構は、縄文時代竪穴住居址１棟、炉址１基、ピット５基である。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址は、調査区西端より１棟検出された。本住居址は、北側約$\frac{1}{3}$が林道による削平を受けている。遺構の遺存が悪く、規模・平面形は明確でないが、壁の残存部から推定すると形状は東西に長軸をもつ楕円形で、規模はおよそ3.9m×3.0mと考えられる。壁は南東側は明確に遺存し、壁高約20cmを測るが全体的にやや不明瞭な輪郭を呈している。床面は木根の攪乱と礫層によってゆるい凹凸のある面となっているが傾斜はしていない。住居址のほぼ中央部に６ケの川原石よりなる六角形石囲炉が設けられ、燃焼部に皿状の掘り込みが施されている。

〈炉址〉

炉址は調査区中央よりやや西側寄りに１基検出された。本遺構は東西からの緩い落ち込みのほぼ中央部に位置し、全体が北傾斜地となっているため削剝がはげしく形状は不明である。３ケの川原石が配され、その内側に径約70cm、深さ25cmの歪円形丸底の掘り込みがみられる。

〈ピット〉

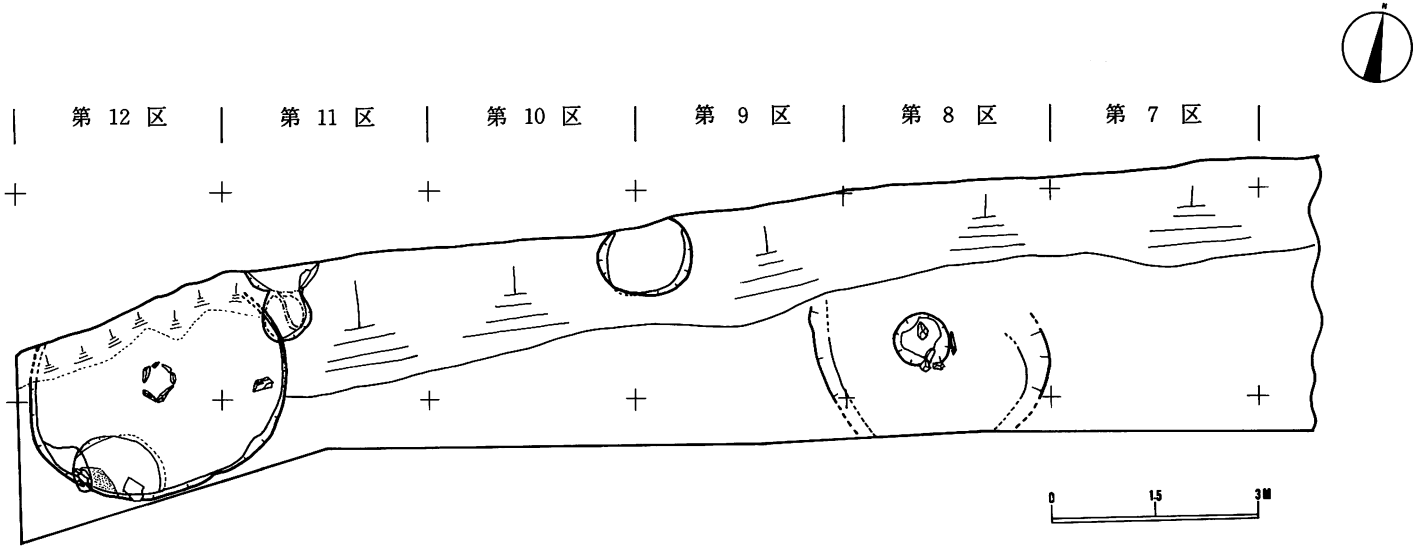
ピットは三角フラスコ形ピット、丸底フラスコ形ピット等、小規模なものが５基検出された。全てのピットが、木根の攪乱・林道による削平を受けており遺存がきわめて悪い。

〈出土遺物〉

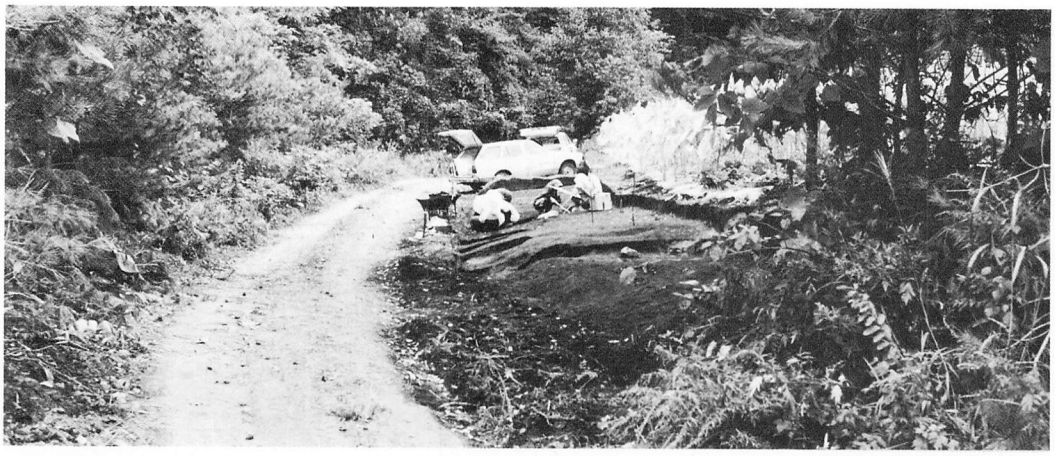
出土遺物は、住居址床面よりミニチュア土器１ケ、埋土より縄文前期前葉・後期前葉・後期中葉・晩期末葉の土器小片が少量ずつ出土している。石器はピットの埋土より凹み石・磨石が各１ケ出土している。

3　まとめ

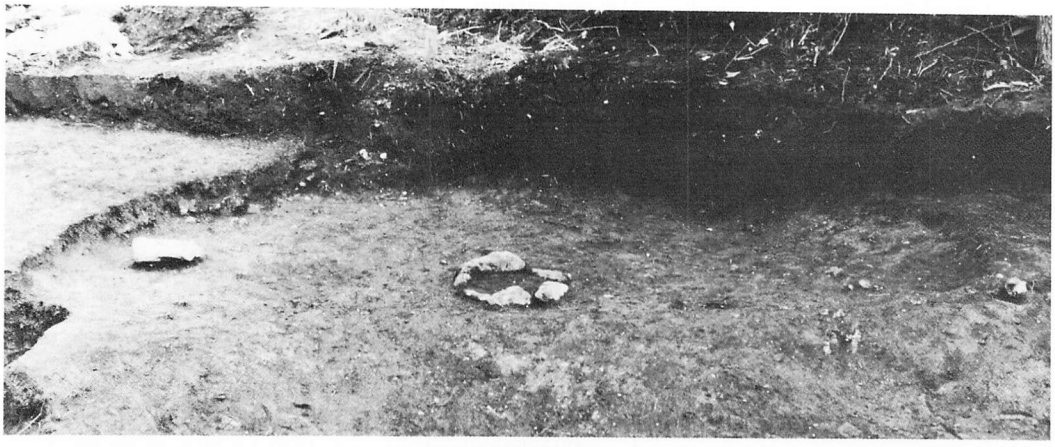
調査区が小範囲で、さらに調査面積の約$\frac{1}{2}$が林道法面に位置しているなかで、いくつかの遺構が検出された。このことにより、調査区南側に隣接する畑地に遺構が存すると推定される。



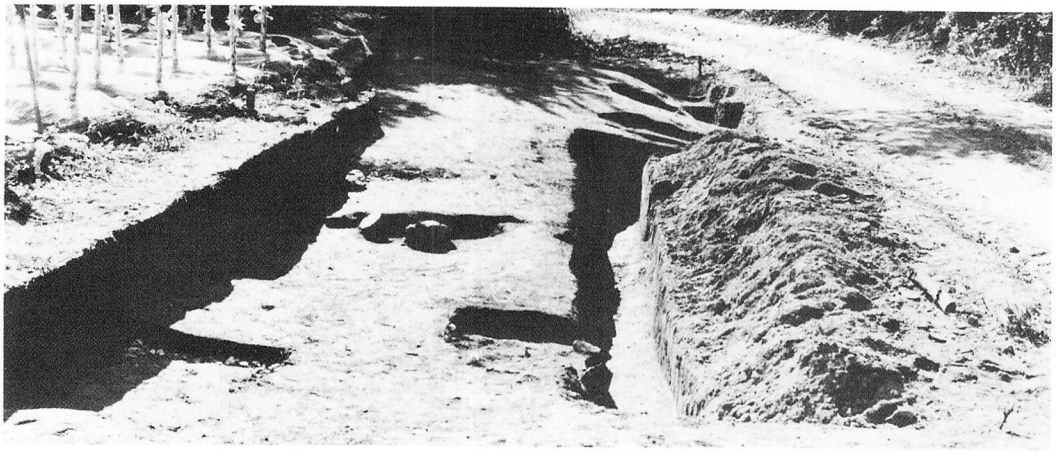
沼山遺跡遺構配置図



発掘作業風景

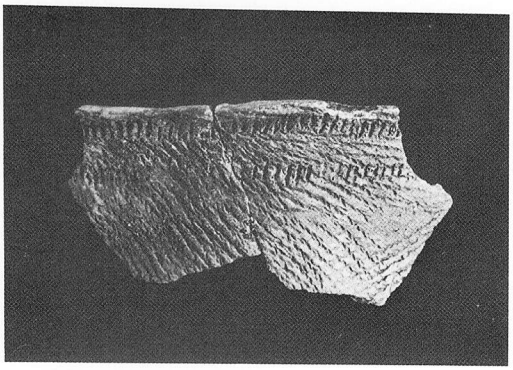


第12区住居址

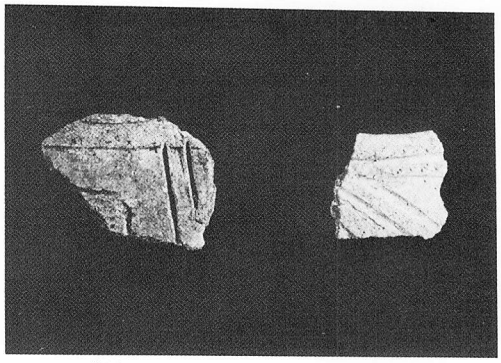


調査区全景(東→西)

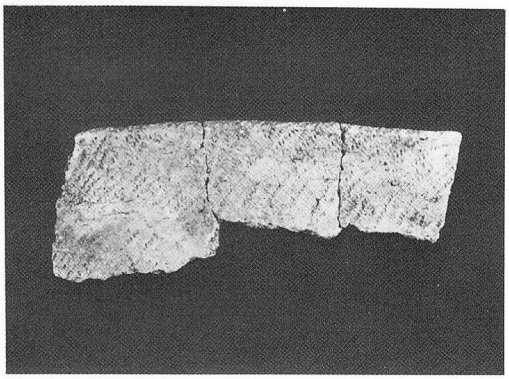
沼　山　遺　跡



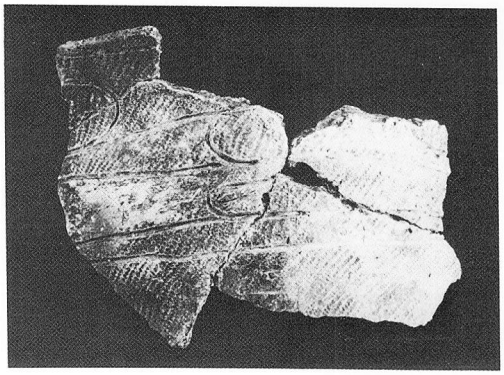
縄文前期土器片　第10区



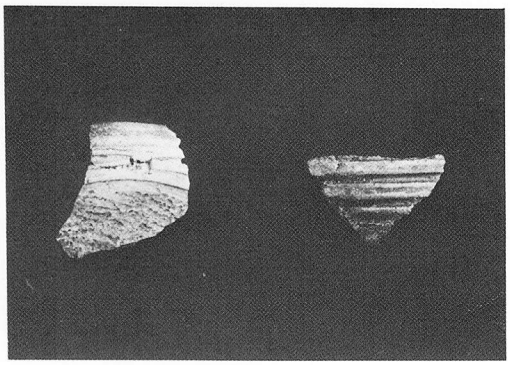
縄文後期土器片　第９区・第７区



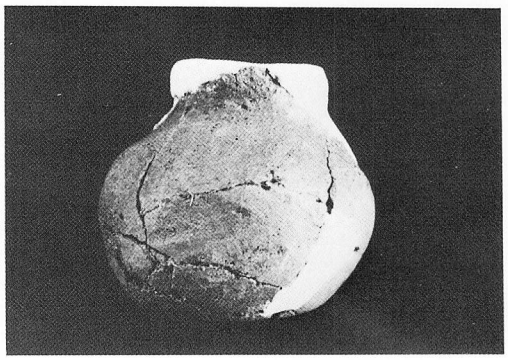
縄文後期土器片　第９区



縄文後期土器片　第９区



縄文晩期土器片　第11区

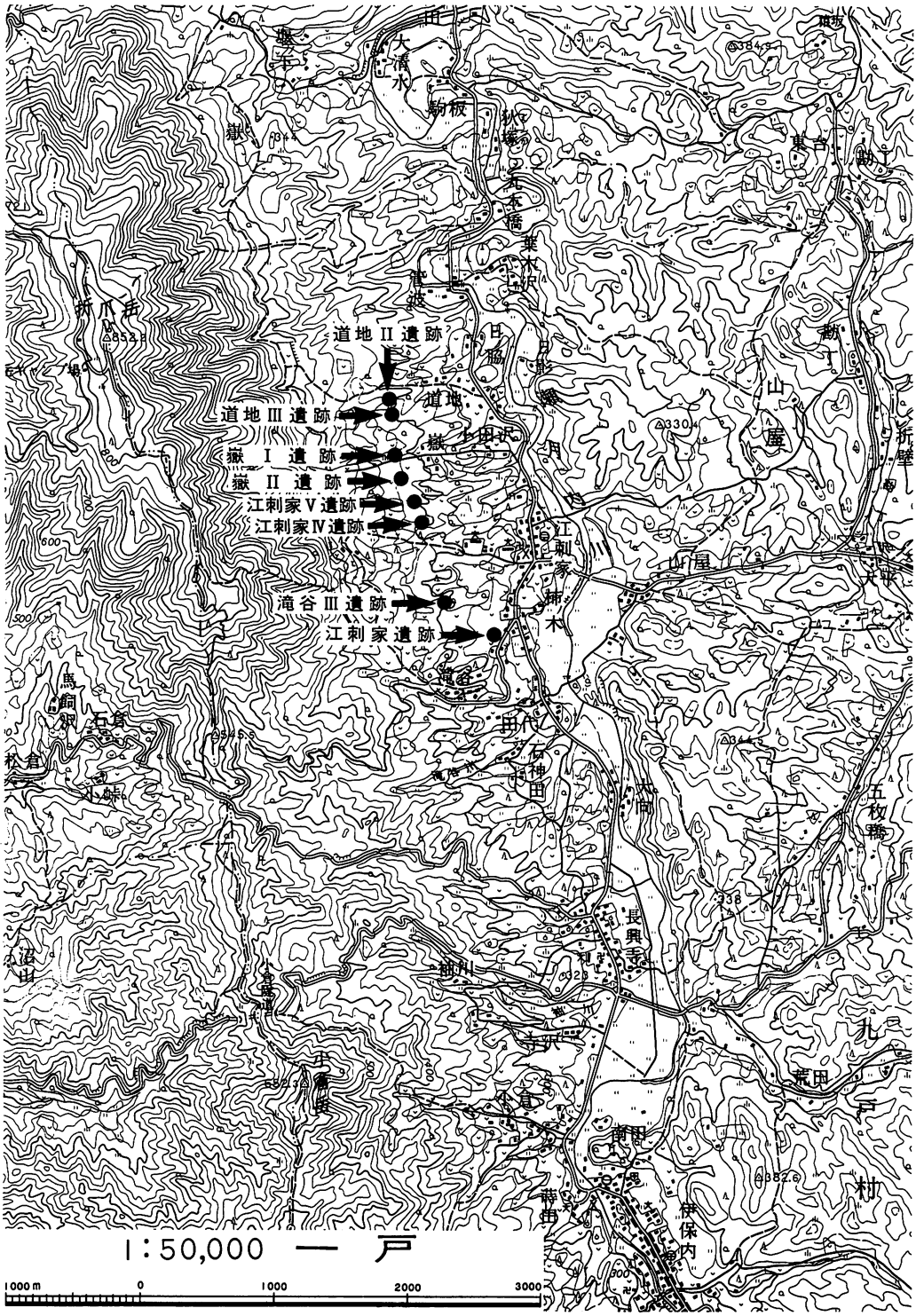


ミニチュア土器　第12区住居址

沼山遺跡出土遺物

(4) 滝谷(たきや) III 遺跡

遺跡所在地	九戸郡九戸村大字江刺家第6地割字間木内
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年7月6日～10月2日
調査対象面積	4,450m²
発掘面積	4,450m²
遺跡記号	TYIII81
調査担当者	主任専門調査員　国生　尚　　専門調査員　佐々木清文
協力機関	九戸村教育委員会



東北縦貫自動車道関係遺跡位置図（九戸村）

1　遺跡の立地

本遺跡は国道 340号線沿に広がる江刺家・柿ノ木部落の西方 700m余の所に位置している。遺跡の西側には折爪岳（標高 852.2m）がある。折爪岳山麓から東に向かって扇状地が広がり、さらに東には起伏量 100m未満の丘陵地が細長くのび、丘陵の下位には谷底平野や砂礫段丘がある。砂礫段丘の下位は瀬月内川の氾濫平野となっている。本遺跡はこの扇状地の扇端付近から丘陵地にかけて広がっており、西から東に向かって緩く傾斜している。遺跡の標高は 300～320mで、沢との比高は7～8mである。

2　調査の概要

本遺跡の調査は東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査範囲は本線と交差する農道の拡幅部分であり、遺跡内を西から東に向かって細長い三角形状に区画した範囲である。そのため調査区域は当遺跡の全域は含まれていない。検出された遺構は平安時代住居址2棟、縄文時代住居址14棟、ピット43基、陥し穴状遺構5基、焼土遺構4ケ所、炭窯1基である。このうち縄文時代住所址3棟とピット2基は調査区域外に遺構の大半が続いている。

〈竪穴住居址〉

平安時代の竪穴住居址は2棟検出されている。2棟ともほぼ方形の平面形を呈し、北壁の東寄りにカマドが構築されている。規模は1辺 3.5m、壁高30～60cmのものと1辺 4.5m、壁高25～50cmのものがある。カマドの作りも共通しており、礫を芯としシルトを貼り付けて作った袖と掘り貫き式の煙道を持つ。煙道は1m位の長さで緩い上り勾配を示すが、わずかに西側に弧を描いている。

出土遺物はロクロ使用の坏や甕等の土師器や鉄滓等が得られている。

縄文時代住居址は14棟検出されており、このなかの1棟は同一場所で重複している。住居址のほとんどが竪穴住居址であるが、石囲炉のみ検出され、壁や柱穴の確認されないものも2棟ある。竪穴住居址は縄文時代中期末葉と思われるものが大半で、楕円形状の平面形を呈する。炉は複式炉の系統をひくと思われるものや、石囲炉、地床炉がある。複式炉の系統をひくと思われるものは、住居址の壁寄りに炉が位置し、石囲部がなく、代わりに浅く掘り込まれ、前庭部は壁際ほど幅広く掘り込まれている。柱穴は明瞭に検出できるものが少なかった。規模は長径3～4m、壁高40～50cmのものが多い。石囲炉のみ検出された住居址は縄文時代晩期の埋甕を伴なっているものがある。

出土遺物としては炉の埋甕に使用された縄文式土器や縄文式土器片、石皿、片面に自然面の残る打製石斧と思われる石器等が得られている。石器類の数量は少ない。

〈ピット〉

ピットは43基検出されている。形状は袋状ないしはフラスコ状を呈している。規模は開口部

径 1.1m、底部径 1.2m、深さ1m位のものが多い。なかには少数ではあるが、開口部径 1.5m以上のものや深さ2m近いものもある。

出土遺物は一般に少なかったが、縄文晩期の完形土器が倒立して安置されたような形状で検出されたものもある。そのうちの1つには貝殻と小型土器が入子になっていた。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は5基検出されている。いずれも同形態、同規模である。規模は底部で長さ2.5m、幅40cm、深さ 1.5m位である。長軸方向はほぼ南北を指しているが、配置は不規則である。検出面から埋土上位にかけて十和田a降下火山灰が弓状に落ち込んで堆積している。またフラスコ状ピットを切って構築されているものが2基あった。

出土遺物としては縄文式土器片が数点得られている。

〈焼土遺構〉

焼土遺構は4ケ所で検出されている。いずれも住居址やピットの近くに位置している。住居址の地床炉としての可能性も考えられるが柱穴や壁等は検出されていない。また、焼土の周囲も含めて遺物の出土は少ない。

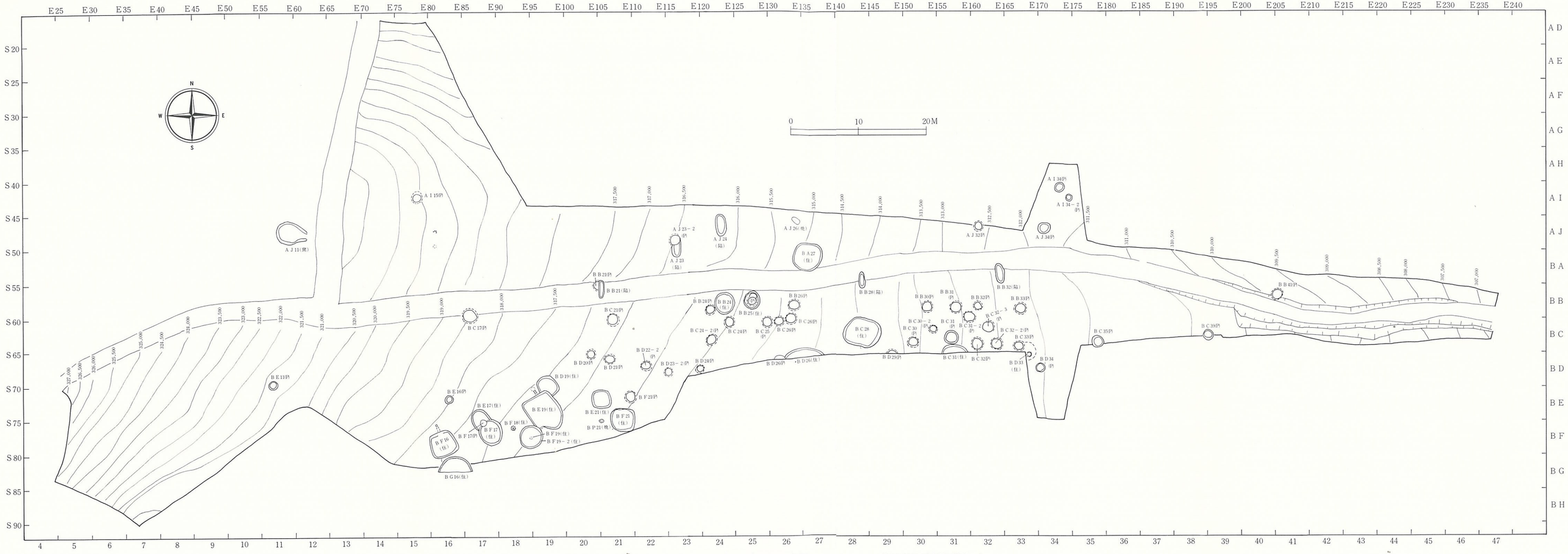
〈炭窯〉

炭窯は遺跡の西側に1基検出されている。楕円形状を呈し、東側に焚き口、西側に煙出しがある。規模は長径3m、短径 2.5m位である。昭和30年頃に使用されたとのことである。

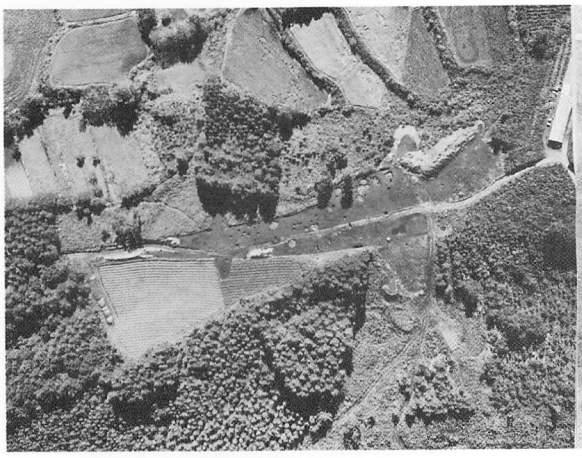
1　まとめ

以上のように滝谷Ⅲ遺跡からは縄文時代中期末葉と晩期初頭、平安時代を中心とした遺構と遺物が検出されている。縄文時代の遺構は馬の背状の細長い丘陵上に営なまれた集落の一部と思われる。平安時代の遺構は少なく、2棟が近接して検出されたのみで集落かどうか不明である。陥し穴状遺構はフラスコ状ピットを切って構築されており、また十和田a降下火山灰が埋土に厚く堆積している。形状も幅広で長さが短かい。

同時期の遺構や遺物の検出されている周辺の遺跡としては江刺家遺跡、嶽ⅠⅡ遺跡、道地遺跡等がある。



滝谷Ⅲ遺跡遺構配置図　　（等高線は標高値 単位m）

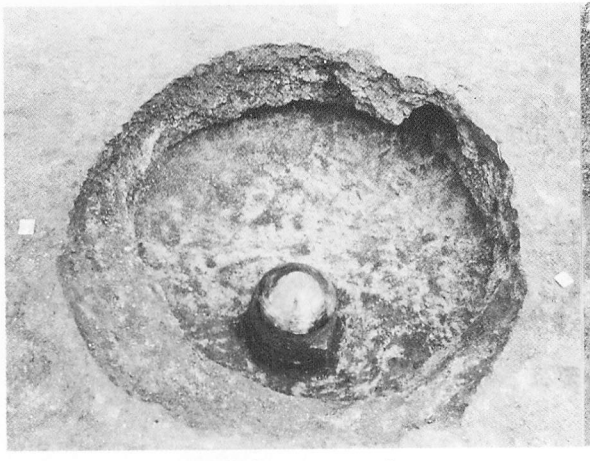


遺跡全景(空中写真)

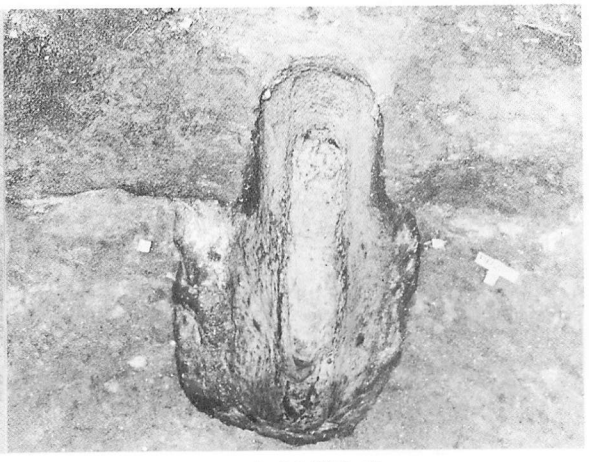
ＢＡ27住居址

ＢＦ16住居址

ＢＦ19住居址



ＢＣ32－３ピット



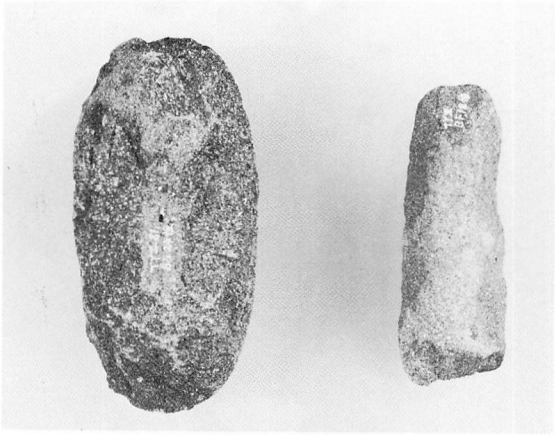
ＡＪ24陥し穴

滝谷Ⅲ遺跡

ＢＣ32－３ピット

ＢＥ16ピット

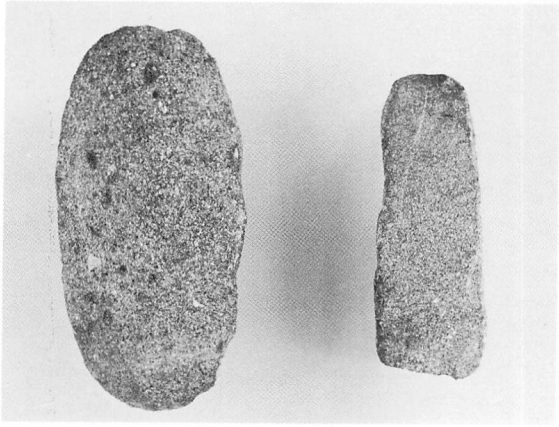
ＢＣ30ピット



（表）

ＢＤ24住居址　　ＢＦ26住居址

ＢＣ30ピット



（裏）

ＢＤ26住居址

滝谷Ⅲ遺跡出土遺物

(5) 江刺家遺跡

遺跡所在地	九戸郡九戸村大字江刺家第6地割字間木内
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年4月13日～11月17日
調査対象面積	10,060m²
発掘面積	10,060m²
遺跡記号	ＥＳ81
調査担当者	専門調査員　田鎖寿夫　　専門調査員　高橋義介
協力機関	九戸村教育委員会、二戸市教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は、九戸村の中心部伊保内から国道 340号線沿いに約５㎞北上した国道西側に位置する。遺跡は折爪岳の東方に広がる扇状地形の標高約270ｍ～278ｍの緩斜面に載る。東方には瀬月内川が流れる。周辺の遺跡としては、田代遺跡のほか、道地II・III、獄Ⅰ・II、江刺家Ⅳ・Ⅴ、滝谷IIIなどの遺跡がある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査は対象区域を２ケ所に分け、粗掘り及び精査を行なった。遺構は調査区全域にわたり分布するが、特に遺構が集中する箇所は、調査区中央部西側にあたる沢寄りと、調査区中央部東側の国道寄りの２箇所に分けられる。この２箇所には、いずれも縄文時代住居址、平安時代住居址、中世住居址掘立柱建物跡等が複合して構築されている。検出遺構は縄文時代住居址16棟、平安時代住居址33棟、中世住居址３棟、掘立柱建物跡４棟、住居址状遺構３棟、陥し穴状遺構４基、ピット57基、焼土遺構４基、溝３条である。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

縄文時代住居址16棟を時期別に見ると、中期後半のもの８棟、後期前半のもの３棟、後期後半のもの２棟、不明のもの３棟となる。中期後半に位置づけられる住居址の平面形は円形を呈し、規模は径約４ｍ～６ｍであり、石囲い炉又は複式炉を伴う。この炉は中央部よりいずれかの壁際に寄る。柱穴は３本から６本で構成される。後期前半に位置づけられる住居址の平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸約８ｍであり、３棟分の建て変えを有する住居址である。炉は中央部東寄りに複式炉を伴い、７本及び８本の柱穴で構成される。後期後半に位置づけられる住居址の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸約５ｍである。炉はほぼ中央部と中央部東寄りに石囲い炉を伴う。柱穴は不明である。

平安時代の住居址33棟は遺跡の中央部付近と東端部に位置し、内焼失家屋は４棟である。平面形は方形、隅丸方形、隅丸長方形等があり、規模は一辺３～４ｍ、５ｍ、５ｍ以上の３種類に大別される。３～４ｍ前後の住居址が大半を占める。カマドの位置は東壁、西壁、南壁、北壁にあり、壁の中央部よりいずれかに寄るのが大部分である。遺跡の中央部付近では東壁、東端部は北壁が多い。また複数のカマドを持つ住居址は５棟あり、ⅠII－２住居址は４回の造り変えを行なっている。カマド袖部は角礫を芯材に据えるもの、土師器の破片を補強材として用いるもの等があり、いずれもその上部を褐色シルト或いは灰黄褐色シルトで被覆している。煙道部はくりぬき式が主であり、また煙道を持たないものもある。柱穴は遺構の中央部より壁際に寄るのが多く主に４本柱である。東端部側の住居址はないものが多い。遺物は土師器が多く、坏は内黒でないもの、内黒のもの、内外黒等があり、底部の切り離しは回転糸切りのものが主

である。甕はヘラケズリ調整、ハケメ調整を施している。須恵器の出土が少ないのが特徴的である。その他の遺物としては鉄製の紡錘車、鋤先、刃子、釘、鉄鏃、土製（土師器）の支脚、土玉等が出土した。

掘立柱建物跡は4棟検出され、内1棟は近世（江戸末）である。規模は桁行6間（11.5m）×梁行4間（7.8m）、北東面に庇を持つ北東～南西棟建物である。北東部に規模2.8×4.3mの不整長方形状の土間がある。掘り方は径60～80cm大の円形状を呈し、柱あたり（柱痕）を持つのが大部分である。掘り方埋土より寛永通宝、銅製の簪、鉄製の釘、鉄鏃、漆器の破片、蕎麦猪口形の陶器が出土した。

中世住居址3棟のうち1棟は方形を呈し、一辺が約 3.5mの規模をもつ。中央部南東寄りに径約70cmの焼土を伴う。柱穴は壁沿いに回り、ほとんどの柱穴が掘り方をもつ。その他2棟は長方形を呈し、そのうちの1棟は2つの張り出しを伴い、柱穴配置から見て建て変えを有する住居址である。この住居址の床面からは、永楽通宝、鐚銭が出土している。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は4基検出されており、いずれも中央部東側の緩斜面に位置する。規模は開口部横断面約3.6～4.0m、短軸約 0.7mで、いずれも開口部がやゝ開き気味のU字状である。

〈ピット〉

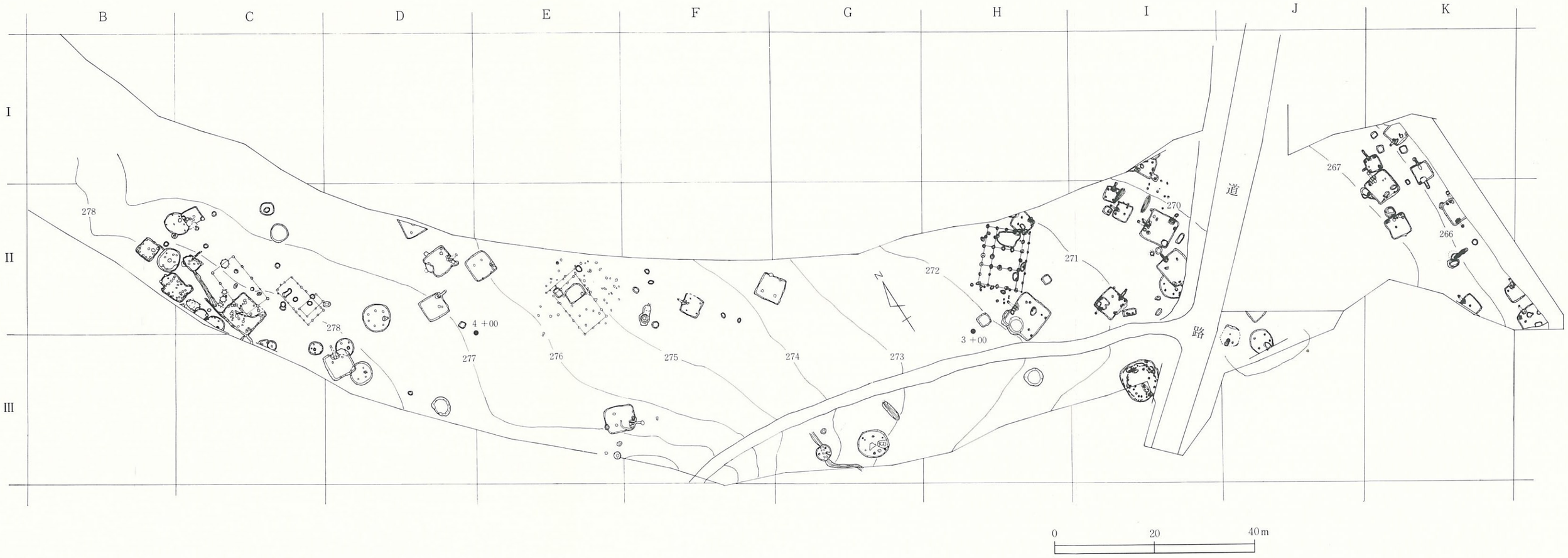
ピットは57基検出されているが、これを断面形によって大別すると、フラスコ形ピット、ビーカー形ピット、皿形ピットとなる。出土遺物はほとんど得られていない。

〈出土遺物〉

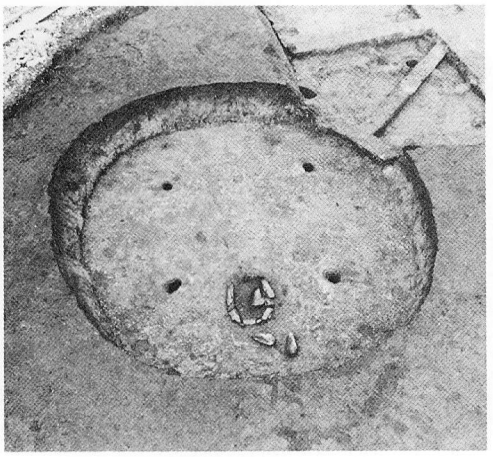
遺構外の出土遺物としては、縄文時代早期の土器片数片、中期、後期、晩期の土器片及び土師器、須恵器の破片が出土しているが、いずれも数量的には多くない。土器以外には、石斧、石鏃、寛永通宝、鐚銭等が出土している。又、粗掘り段階で石帯が出土している。この石は径約4.0×2.6cm、厚さ約 0.7cmの半円形を呈し、表面が研磨された黒色の石である。裏面には2孔1対の潜り孔を三方に有する。

3　まとめ

九戸村における本格的な調査は昨年度より実施されている。今年度の調査の結果、本遺跡が縄文時代、平安時代、中世の集落跡を中心とした複合遺跡であることが解り、昨年度の調査資料に加え、県北部における貴重な資料を数多く得ることができた。さらに、遺構に伴わなかったが、石帯が出土したことにより、律令制の地域にかかわる政治的背景等を知る上にもこの成果は大きい。


B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
I
II
III
278
278
277
276
275
274
273
272
271
270
267
266
4 +00
3 +00
N
道
路
0
20
40m

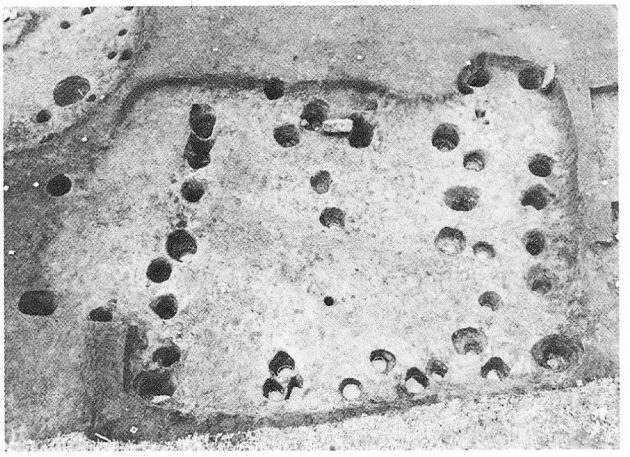
江刺家遺跡遺構配置図



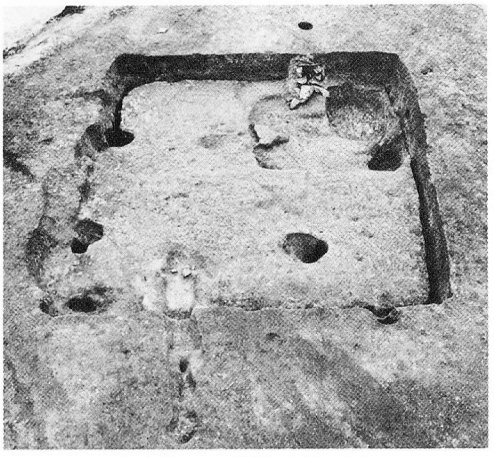
ＤＩ－３住居址(縄文中期)

ＩＩ－１住居址(縄文後期)

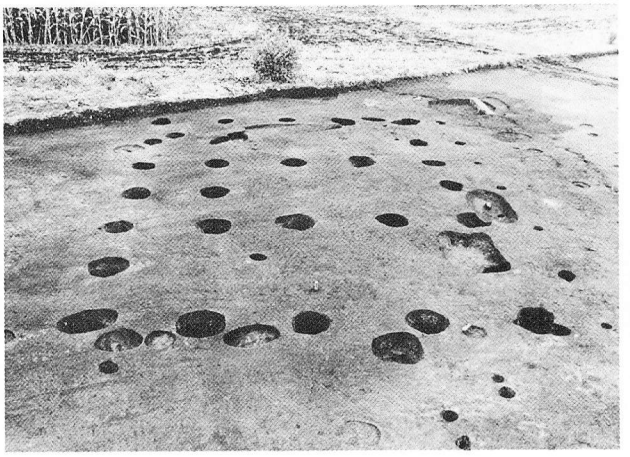
ＧＩ－１住居址(縄文中期)



ＢII－３住居址(中世)

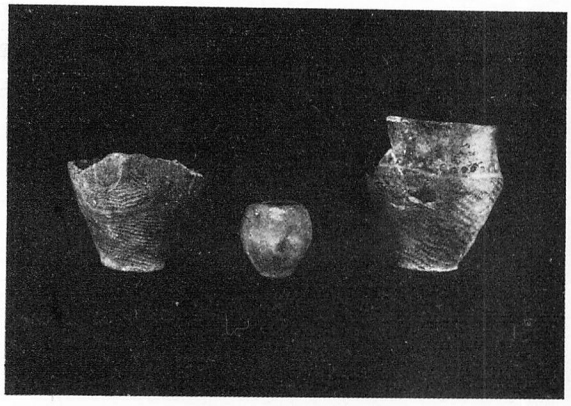


ＩII－６住居址(平安)



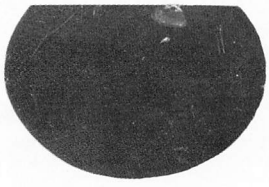
ＨII－２掘立柱建物跡(江戸末)

江刺家遺跡

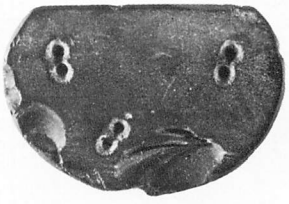


ＧＩ－住居址（中期）

ＤII－５住居址（平安）

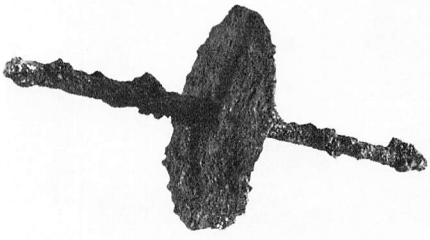


石　帯（表）



（裏）

鋤先　ＩII－６住居址（平安）



鉄製紡錘車　ＤII－３住居址（平安）

江刺家遺跡出土遺物

(6) 江刺家Ⅳ遺跡

遺跡所在地	二戸郡九戸村大字江刺家第13地割字鍋倉
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年4月13日～7月4日
調査対象面積	4,950m²
発掘面積	4,950m²
遺跡記号	ＥＳⅣ81
調査担当者	主任専門調査員　国生　尚　　専門調査員　佐々木清文
協力機関	九戸村教育委員会

1　遺跡の立地

位置　伊保内から国道34号線を約 5.5km北上すると江刺家の集落があり、円子方面への分岐点に至る。この分岐点より直線で東北東方向に約１kmのところに遺跡がある。折爪岳（標高 852.2m）からは南東方向え約 2.7kmの位置である。

地形　折爪岳の東側の裾には扇状地が発達している。この扇状地は折爪岳を源流とする多くの小さな沢によって開析され、沢と尾根が小さな起伏となって連続している。遺跡はこうした小さな尾根の標高 305m前後の南側緩斜面に立地している。

基本土層　遺跡内における基本土層は次のとおりであった。

第Ⅰ層は黒褐色土層で耕作土である。第Ⅰ層と第Ⅱ層の間に十和田ａ降下火山灰が認められるが層になっていない。第Ⅱ層は黒～黒褐色土層で遺物を包含している。この層は全面にはなく、一部に限られている。第Ⅲ層は褐色～暗褐色土層である。普通この層の上面で遺構が検出される。第Ⅳ層は南部浮石層である。第Ⅴ層は八戸火山灰層である。第Ⅵ層は砂礫層である。扇状地堆積物と思われる。

2　調査の概要

調査は、第Ⅰ層をバック・ホーで除去し、遺構検出と第Ⅱ層の発掘を人力でおこなった。

精査の結果、縄文時代竪穴住居址７棟、焼土３ヶ所、ピット22基を確認した。

以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

縄文時代竪穴住居址は７棟検出された。ＤＡ10－１住居址は3.7～3.4ｍの円形で、床面まで0.2～0.3ｍあり、４本柱である。炉は石囲炉である。土器が３個体分出土している。焼失家屋と思われる。ＤＡ11－１住居址は4.2～4.1ｍの円形で、床面まで0.2～0.4ｍあり、４本柱である。炉は地床炉である。土器片が少量出土した。ＣＧ13－１住居址は3.6～3.2ｍの円形で、床面まで0.1～0.4ｍあり、４本柱である。炉は石囲炉である。土器片が少量出土している。ＣＧ13－２ピットと重複している。ＣＪ11－１住居址は2.4～2.2ｍの円形で、床面まで0.2～0.4ｍあり、柱は検出されなかった。炉は地床炉である。入子の土器が出土した。ＣＪ13－１住居址は2.6～2.4ｍの円形で、床面まで０～0.2 ｍあり、柱穴は検出されなかった。炉は地床炉である。土器片が少量出土した。ＤＣ16－１住居址は5.2～4.6ｍの円形で、床面まで0.3～0.7ｍあり、柱は４本である。炉は複式炉である。土器２個体とミニチュア土器、石器は磨石と石斧が出土した。本調査中最大の住居址である。焼失家屋と思われる。ＤＣ22－１住居址は 2.7ｍの円形で床面まで0.2～0.5ｍあり、柱は検出されなかった。炉は地床炉である。遺物は出土しなかった。

〈焼土〉

焼土は３ヶ所で検出されている。ＣＧ14－１焼土は0.9～0.8ｍの範囲に検出された。焼土は最大 0.1ｍほどの厚さがあり、周囲から土器片が少量出土した。ＣＨ15－１焼土は0.9～0.8ｍの範囲に検出された。焼土はきわめて薄い。周囲から土器片が少量出土した。ＣＩ14－１焼土は0.7～0.5ｍの範囲に検出され、焼土はきわめて薄い。周囲から土器片が少量出土した。

〈ピット〉

ピットは22基検出されている。このうち、平面形がほぼ円形で、断面の形状がフラスコ形になるもの16基、ビーカー形になるもの１基、丸底形になるもの４基である。この他に、平面形が方形で、断面の形状も箱形であるものが１基ある。

以下にいくつかを紹介する。

ＣＩ17－１ピットは検出面での形状は1.8～1.4ｍの円形で底面まで0.5～0.7ｍのフラスコ形ピットである。底面は平担で、８個の偏平な川原石が出土した。石の一部には火熱を受けた痕跡のあるものがある。ＤＢ14－１ピットは、検出面での形状が 1.4ｍの円形で、底面まで0.5～ 0.6ｍのフラスコ形ピットである。このピットの埋土下位から鉢型の縄文式土器が完形のまま横位置で出土した。ＤＣ13－１ピットは検出面での形状が一辺 1.5ｍの方形で、底面まで0.7～0.8ｍの箱形の断面をしている。埋土の上層には十和田ａ降下火山灰が認められた。

〈出土遺物〉

出土遺物は遺構にともなうものとして、まづ、深鉢形の縄文式土器があるが、いづれも地文だけの粗製土器であった。石器は磨石と石斧がある。

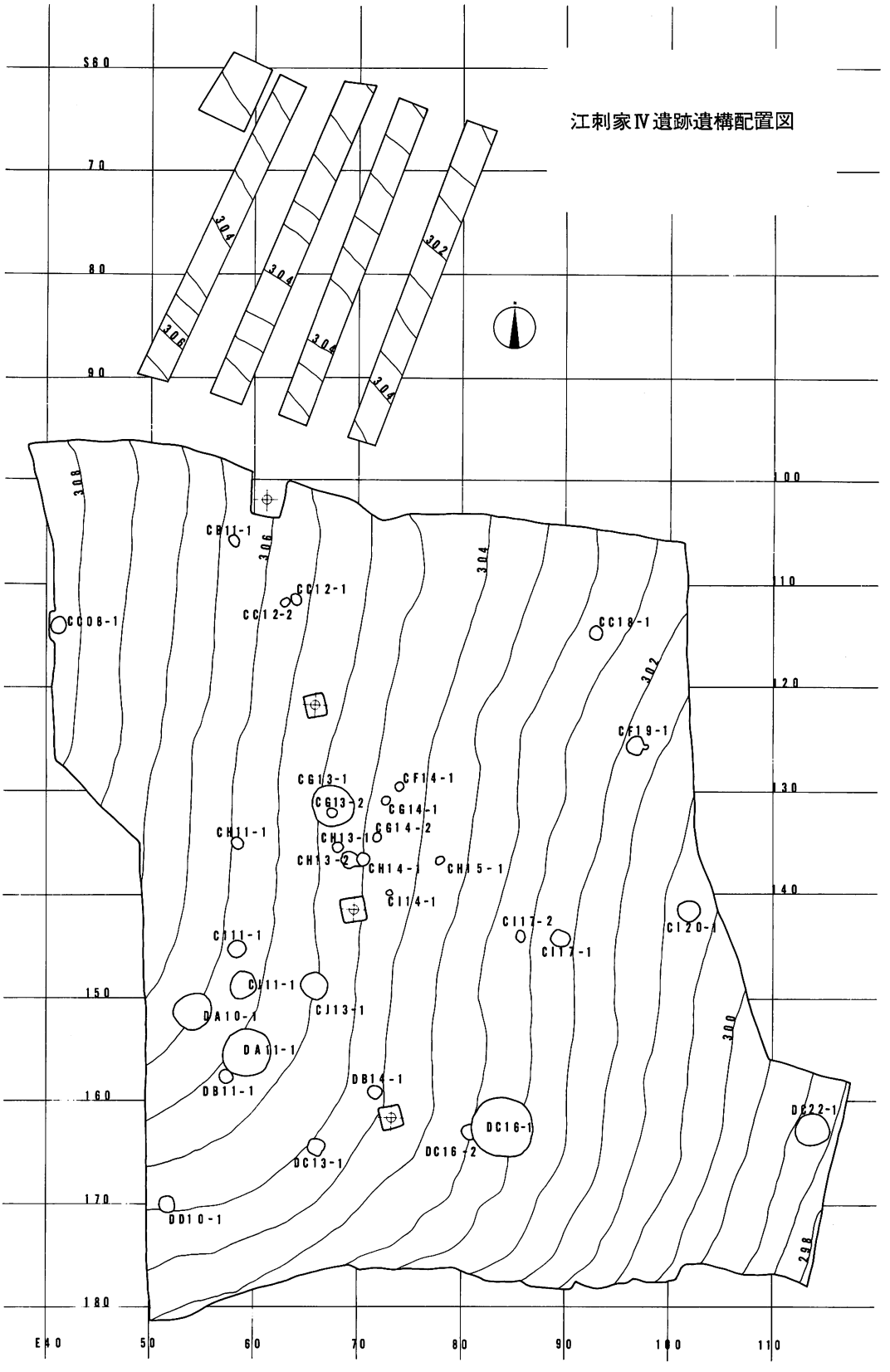
遺構外は包含層から、縄文時代早期の土器の底部破片や縄文時代晩期の皿形土器が各々１点出土していて注目されるが、遺物の量は多くない。

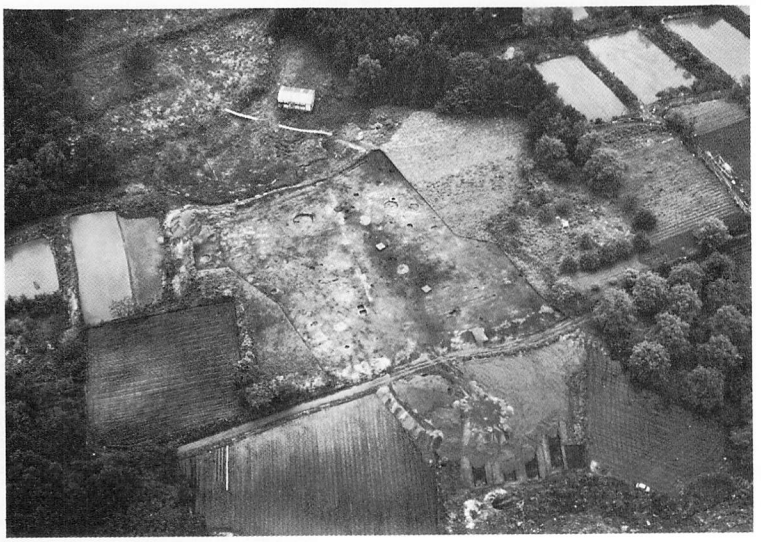
3　まとめ

遺構は尾根の南斜面でのみ検出された。このように南斜面で遺構の検出される傾向は周囲の遺跡においても見られる。本遺跡の範囲はさらに西側（尾根の上方）につづくものと思われる。

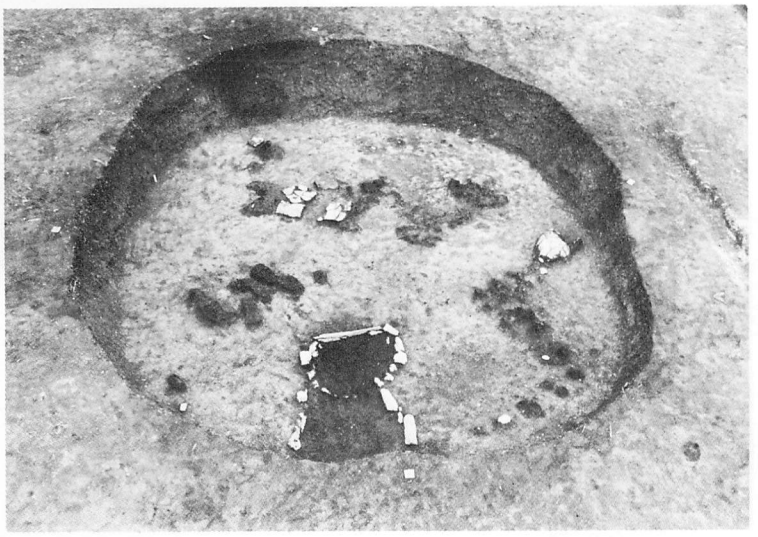
検出された遺構の重複は本調査においては２例しかなく、遺構の密度は高いとはいえないので、遺構の時間巾は大きくないと思われるため、住居址とピットとの関係をとらえられる可能性がある。

本遺跡の年代は、遺構の形態や土器の器形などから推定して、縄文時代中期末～後期初頭と思われる。


江刺家Ⅳ遺跡遺構配置図
S60
70
80
90
100
110
120
130
140
150
160
170
180
E40
50
60
70
80
90
100
110
308
306
304
302
300
298
CB11-1
CC12-1
CC12-2
CC08-1
CC18-1
CF19-1
CG13-1
CF14-1
CG13-2
CG14-1
CG14-2
CH11-1
CH13-1
CH13-2
CH14-1
CH15-1
CI14-1
CI17-2
CI17-1
CI20-1
CI11-1
CJ11-1
CJ13-1
DA10-1
DA11-1
DB11-1
DB14-1
DC16-1
DC16-2
DC13-1
DC22-1
DD10-1



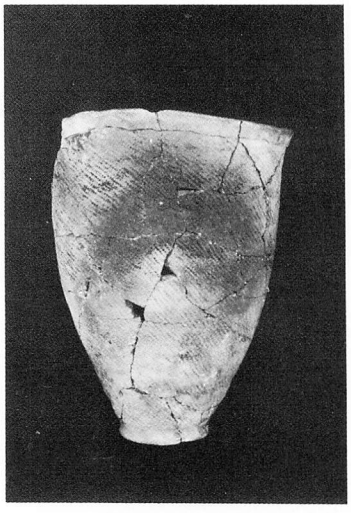
江刺家Ⅳ遺跡
全景

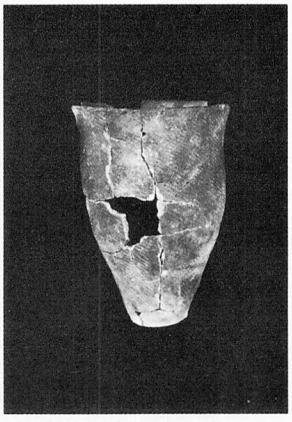


ＤＣ16－１住居址

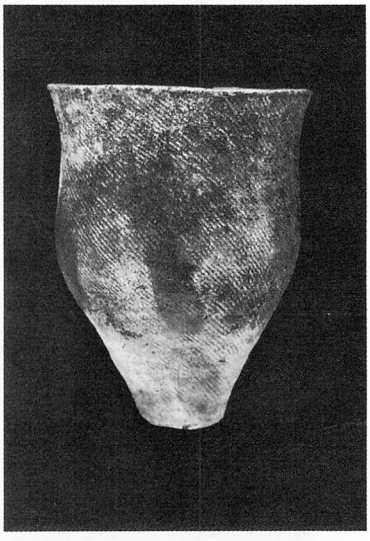
ＣⅠ17－１ピット

江刺家Ⅳ遺跡

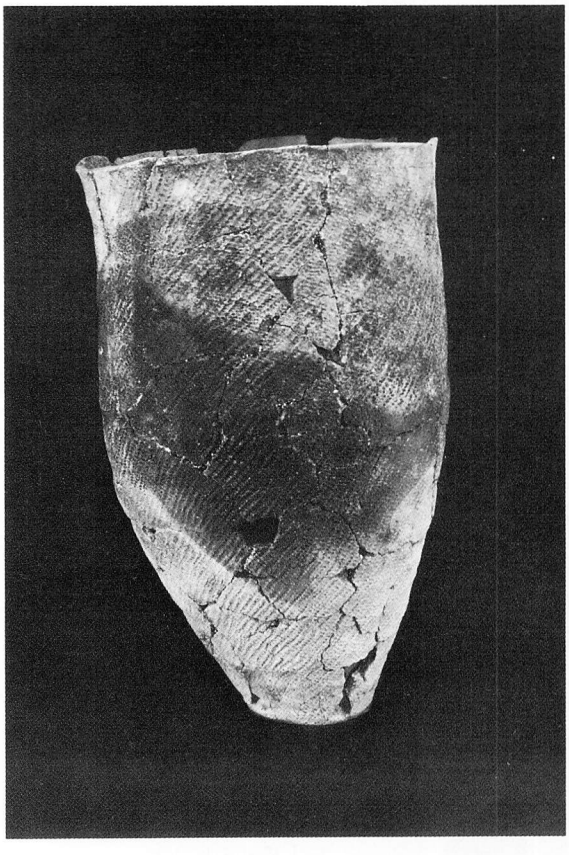




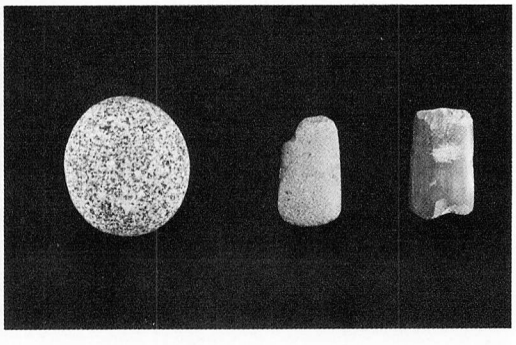
ＤＡ10－１住居址
出土土器



ＤＢ14－１ピット
出土土器



ＤＣ16－１住居址
出土土器・石器



江刺家Ⅳ遺跡出土遺物

(7) 江刺家（えさしか）V遺跡

遺跡所在地	二戸郡九戸村大字江刺家第13地割字鍋倉
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年10月5日～11月6日
調査対象面積	2,300m²
発掘面積	2,300m²
遺跡記号	ＥＳＶ81
調査担当者	主任専門調査員　国生　尚　　専門調査員　佐々木清文
協力機関	九戸村教育委員会

1　遺跡の立地

位置　伊保内から国道34号線を約 5.5km北上すると江刺家の集落があり、円子方面えの分岐点に至る。この分岐点より直線で東北東方向に約 1.1kmのところに遺跡がある。

折爪岳（標高 852.2m）から南東方向え約 2.7kmの位置である。本地点より南に約 100m前後で江刺家Ⅳ遺跡があり、北に約 100mほどで嶽Ⅱ遺跡がある。

地形　折爪岳の東側の裾には扇状地が発達している。この扇状地は折爪岳を源流とする多くの小さい沢によって開析され、沢と尾根が小さな起伏となって連続している。

遺跡はこうした小さな尾根の標高 305m前後の南側緩斜面に立地している。

基本土層　遺跡内における基本土層は次のとおりであった。

第Ⅰ層は黒褐色土層で耕作土である。第Ⅰ層と第Ⅱ層の間に十和田a降下火山灰が認められるが層となっていない。第Ⅱ層は黒～黒褐色土層で遺物を包含している。この層は全面にはなく、一部に限られている。第Ⅲ層は褐色～暗褐色土層である。普通この層の上面で遺構が検出される。第Ⅳ層は南部浮石層である。第Ⅴ層は八戸火山灰層である。第Ⅵ層は砂礫層である。扇状地堆積物と思われる。

2　調査の概要

調査は、第Ⅰ層と第Ⅱ層の除去、および遺構検出まで、すべて人力によっておこなった。

精査の結果、縄文時代竪穴住居址３棟、焼土２ヶ所、ピット６基を確認した。

以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

縄文時代竪穴住居址は３棟検出された。ＺＩ01－１住居址は4.2～3.7mの少し長い円形で、床面まで0.1～0.4mあり、４本柱である。炉は石囲炉である。土器１個体と磨石が出土した。ＡＡ05－１住居址は４ｍの円形で、床面まで0.2～0.3mあり、柱穴は検出されなかった。炉は石囲炉である。住居の北側の壁と床の境に傾めに穴を掘り底部のない土器が埋設されてあった。さらに土器の上には土器に覆いかぶさるように長さ0.38m、巾0.18m、厚さ0.05mの偏平な石が壁にやはり傾の穴を掘り、半分ほど埋められてあった。又、埋設土器のすぐ左側に、0.52×0.16×0.12mと0.39×0.14×0.13mの２本の石が並行に列べられてあった。ＡＢ06－１住居址は3.6～3.2mのほぼ円形で、床面まで0.2～0.5mあり、柱は３本である。炉は地床炉で、焼土面が周囲の床面より少し高くなっている。北西側に古い時期の攪乱をうけている。

〈焼土〉

焼土は２ヶ所で検出されている。ＡＡ06－１焼土は0.43mほどの高低差のある斜面に直径、3.5mほどの落ち込みが検出された。精査の結果、検出面が西から東に傾斜していることもあってか、東側法面は検出されなかった。底面はほぼ水平で、中央に焼土が検出された。この焼

土面は0.8～0.5ｍの範囲に検出され、周囲より少し高く、焼土層の厚さは最大で0.14ｍあるが、上面は攪乱をうけている。この攪乱層に深鉢形の縄文式土器１個体分が出土した。この落ち込み部分が住居址である可能性については、壁が通常の住居跡のように整っていないことや、底面は硬さがなく、よごれていない。又、柱穴が検出されないなどの理由で、住居跡ではないと考えている。ＡＢ05－１焼土は浅い落ち込みのほぼ中央で検出され、焼土は0.35～0.4 ｍのほぼ円形の範囲に、焼土の厚さは0.03ｍであった。落ち込みの埋土上層には深鉢形の縄文式土器１個体分の破片が出土した。

〈ピット〉

ピットは６基検出されている。このうち、平面形がほぼ円形で、断面形がビーカー状になるものが４基、平面形が長円ないし楕円形で、断面形が舟底状のものが２基ある。

〈遺物〉

遺構にともなう遺物の主体は深鉢形の縄文式土器で、やはり、地文だけのものがそのほとんどである。石器は磨石が２点出土しているだけである。

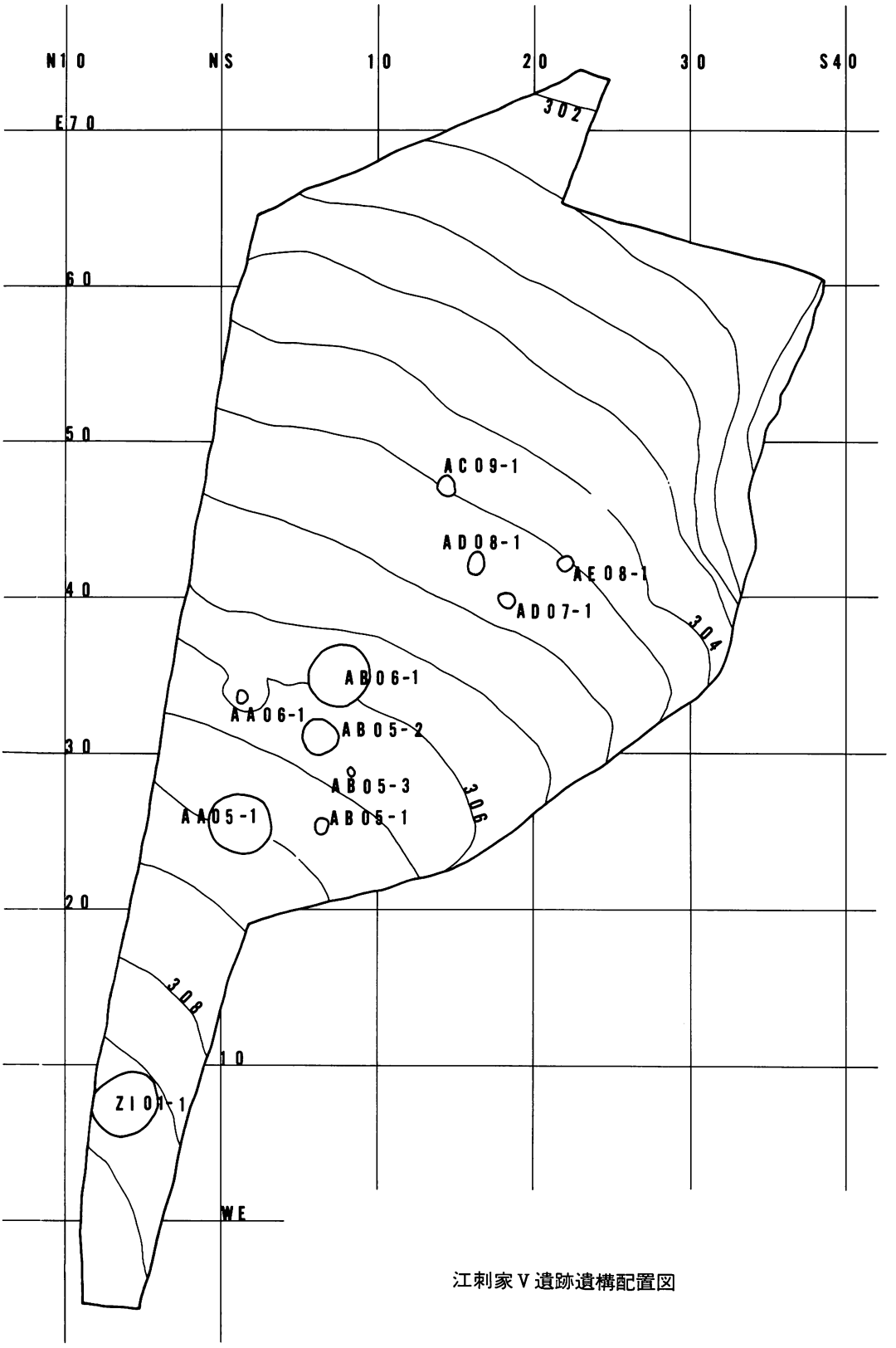
遺構外の遺物は、縄文式土器の破片がそのほとんどであるが、量は多くない。石器は直径、0.07ｍの石棒の一部が出土しただけである。

3　まとめ

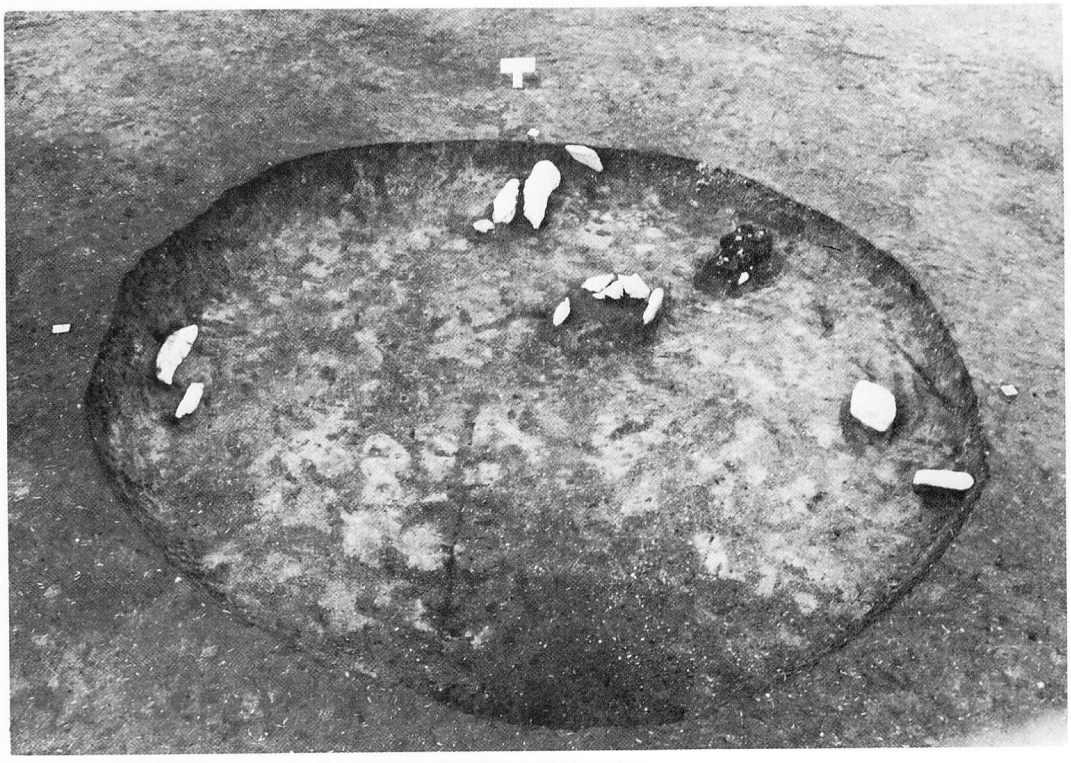
江刺家Ⅴ遺跡は江刺家Ⅳ遺跡の北方え沢一ツ隔てた尾根の南斜面の一部を調査対象範囲としている。

本遺跡の北方約 100ｍ離れたところに嶽Ⅱ遺跡があり、この間には小さな沢が１本入っているが、傾斜面は南向きに連続しているので、遺跡の範囲はさらに北方え続き、嶽Ⅱ遺跡と一体となることが考えられる。しかし、江刺家Ⅴ遺跡と嶽Ⅱ遺跡との間の路線内は開田のときの造成がおこなわれていたため、遺構の確認は不可能であろう。

本遺跡の年代は、遺構の形態や土器の器形などから推定して、縄文時代中期末から後期と思われる。



江刺家Ⅴ遺跡遺構配置図



Ｚ Ｉ 01－１ 住居址

江刺家Ｖ遺跡
全景

江刺家Ｖ遺跡

(8) 嶽（だけ） I 遺 跡

遺跡所在地	九戸郡九戸村大字江刺家第14地割字築場
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年9月1日～10月2日
調査対象面積	2,620m²
発掘面積	2,620m²
遺跡記号	DKI81
調査担当者	専門調査員　種市　進　　専門調査員　岩渕　久
協力機関	九戸村教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は、九戸村役場より北北西約 5.6kmのところにある。西方に折爪岳(852.2m)、東方に北流する瀬月内川があり、遺跡はその間の東に傾斜する緩やかな斜面となる扇状地上にある。そして、折爪岳を源とする小さな沢によって北側を開析された1つの尾根部分にあたる。本遺跡の南側は、小さな起伏をもつ丘陵状を呈し、嶽II遺跡へと連続していく。

周辺の遺跡としては、道地II・III遺跡、嶽II遺跡、江刺家IV・V遺跡、滝谷III遺跡、江刺家遺跡がある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査は、遺跡範囲の中央付近より東側部分にあたる路線内対象区域全域に粗掘をかけて、遺構検出・精査を行なった。遺構の検出は、所々層状に堆積している中掫浮石層、又は南部浮石層風化面上で行なった。所々に十和田a降下火山灰と黒褐色土とによる円形プランが認められたが、全て風倒木痕であった。調査の結果は、ピット9基、溝1条である。以下その調査の概要である。

〈ピット〉

ピットは9基である。そのうち、ビーカー状ピットが6基、フラスコ状ピットが1基である。フラスコ状ピットの規模は頸部径0.94m～1.0m、底部径1.08m～1.20m、深さ0.50m～0.66mである。ビーカー状ピットの平面プランはほぼ円形である。規模は最大径が開口部で2.60mのものがあるが、これは壁のくずれのため大きくなったものと思われる。これを例外として、他は0.96m～1.62m、底部で0.76m～1.22mである。深さは0.38m～0.90mである。遺物は出土せず、時期は不明である。

〈その他〉

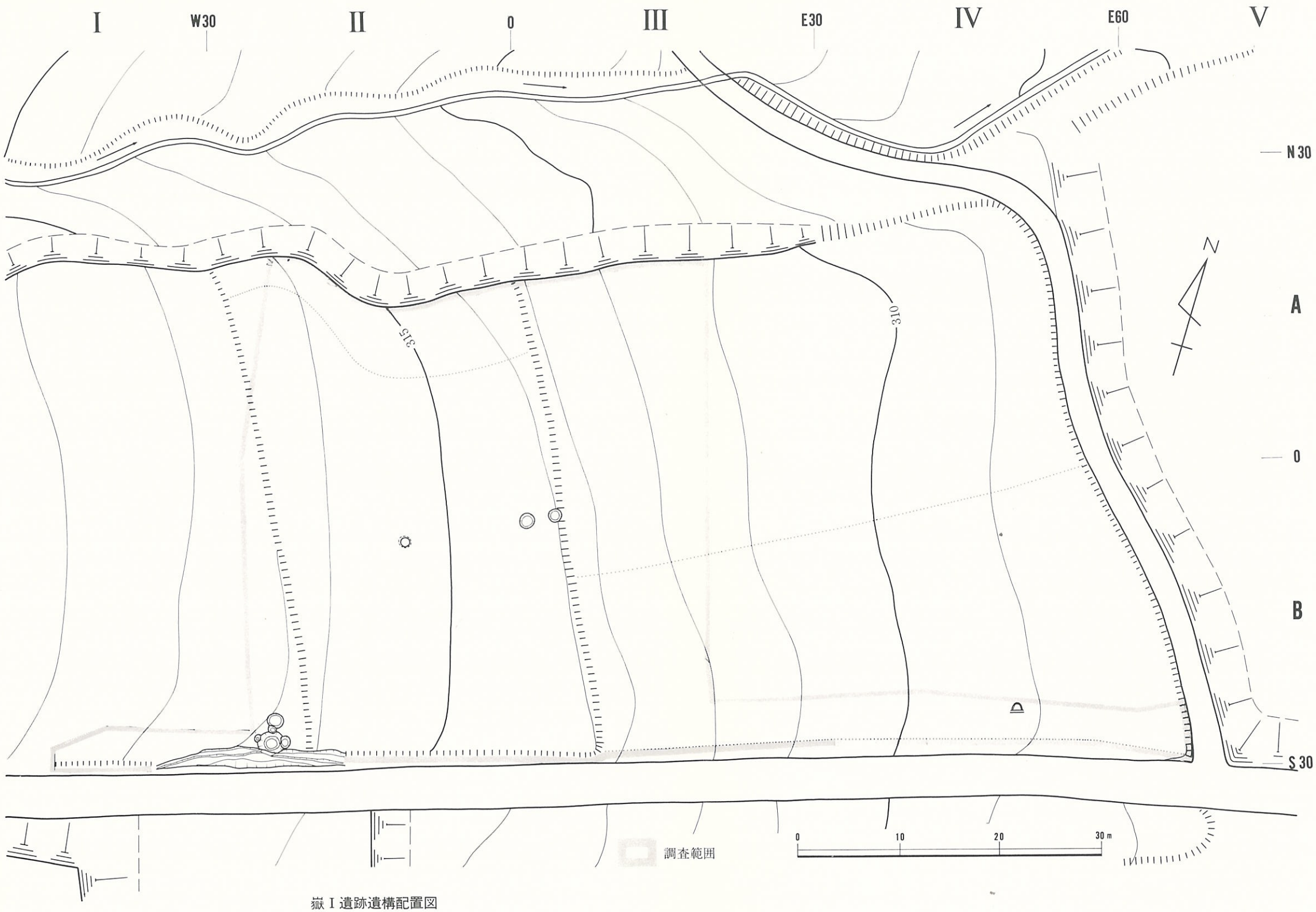
溝1条が検出されている。埋土状況から旧村道の側溝ではないかと思われる。

〈出土遺物〉

出土遺物は、縄文土器、土師器、石器、石製品である。縄文土器は、数量的に多くないが、時期としては晩期（大洞BC・C_1・C_2・A′式）のものがほとんどである。土師器は口縁部破片が1片出土している。石器・石製品としては、磨製石斧、スクレイパー、砥石、石球などである。

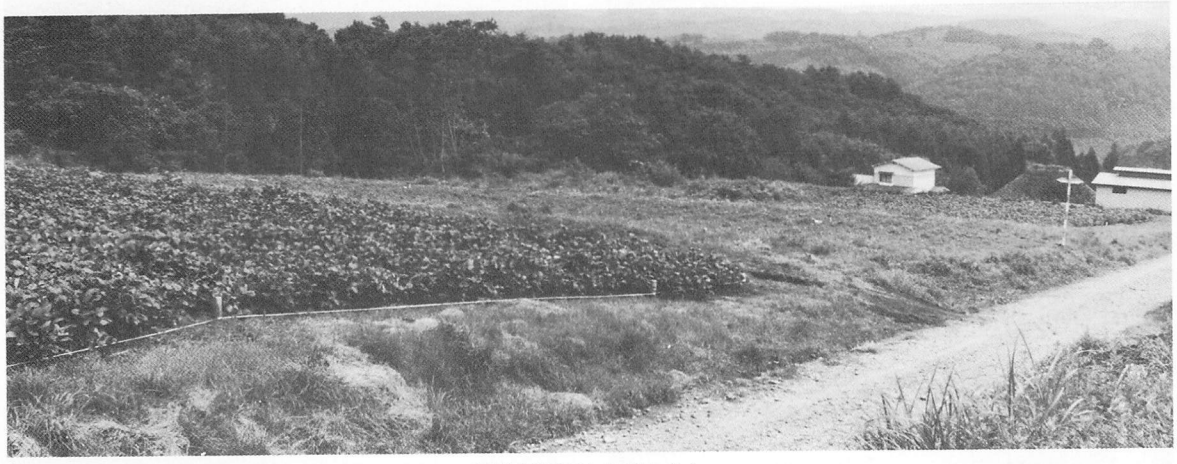
3　まとめ

遺構・遺物とも少なく、遺跡としては小規模なものと思われる。周辺遺跡の集落占地からすれば、本遺跡にも集落が存在しても不思議ではないはずである。もっとも調査区が路線内と限られているところから、集落占地部分が遺跡西側（斜面上方）であることが考えられる。立地面と出土遺物、他遺跡との関連をみて、今後の調査に資することができるようにしていきたい。

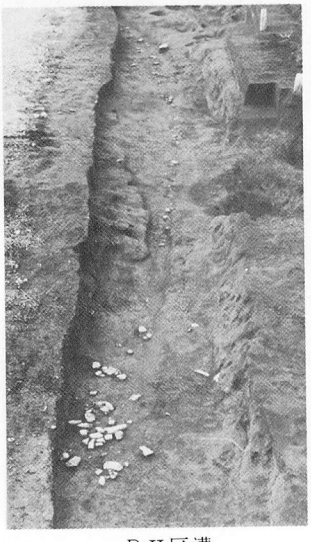


嶽Ⅰ遺跡遺構配置図

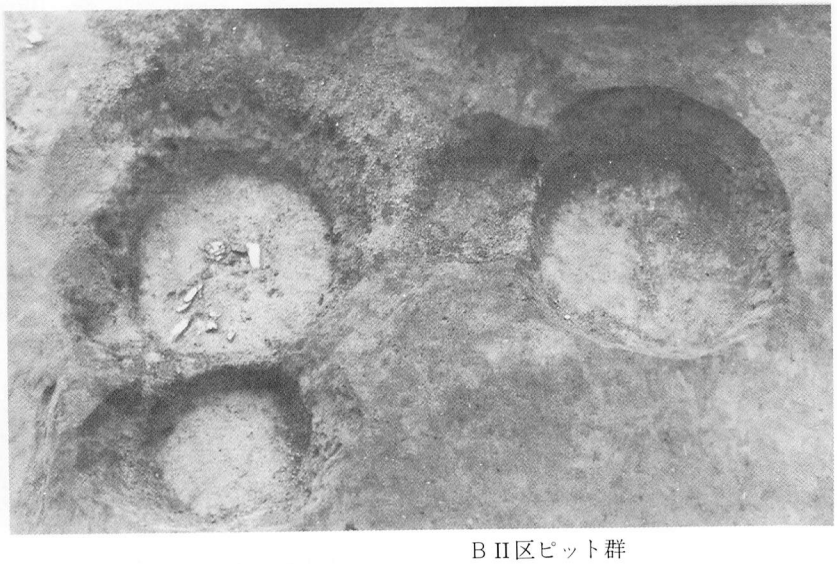
調査区遠景(北から)



調査区近景(南西から)

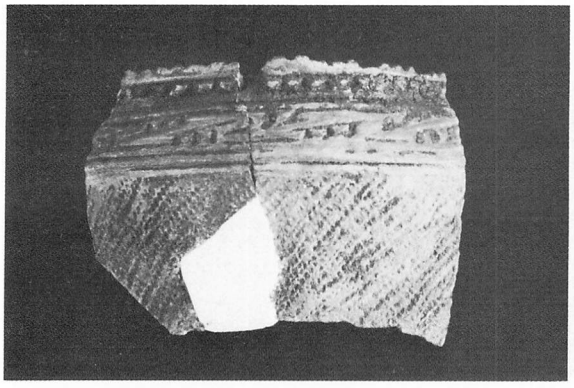
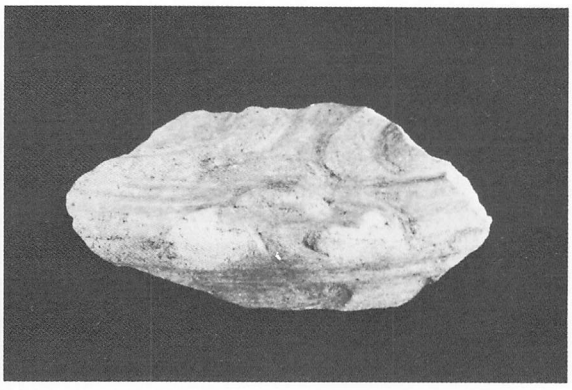
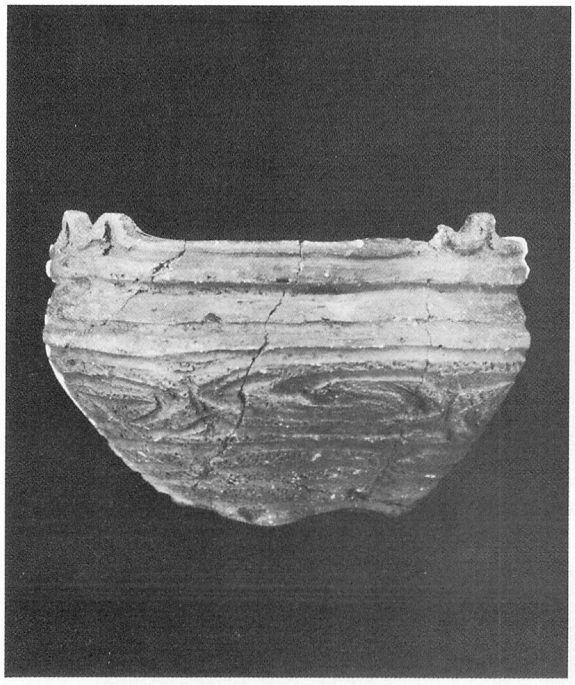
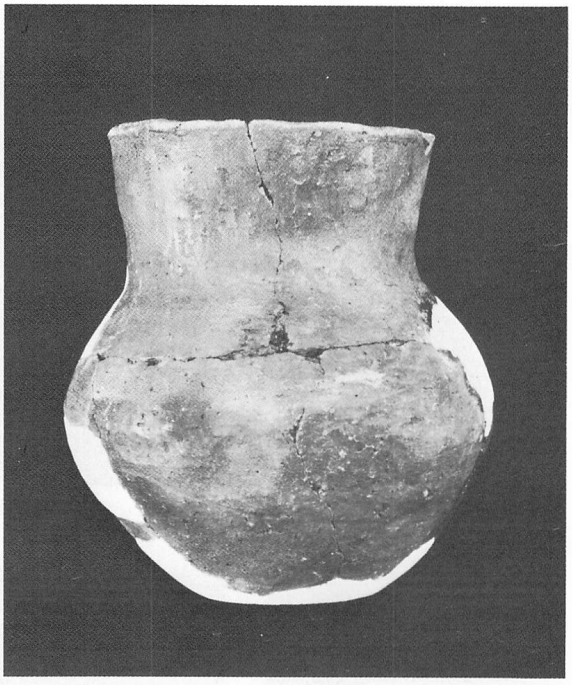
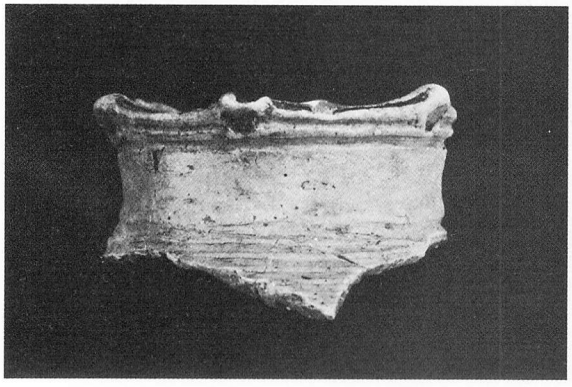
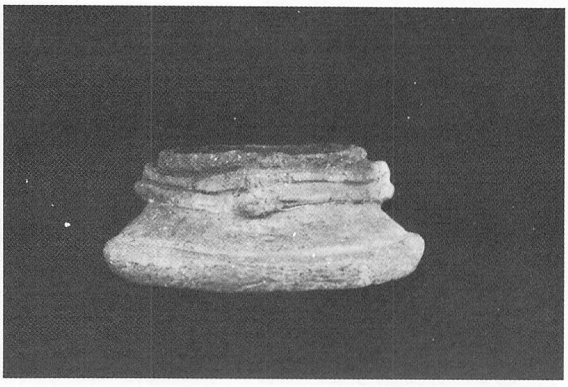


BⅡ区溝



BⅡ区ピット群

嶽 Ⅰ 遺 跡

嶽Ⅰ遺跡出土土器（縄文晩期）

(9) 嶽(だけ) II 遺 跡

遺跡所在地	九戸郡九戸村大字江刺家13地割字鍋倉98番地
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年7月23日～11月10日
調査対象面積	5,000m²
発掘面積	5,000m²
遺跡記号	DKII81
調査担当者	専門調査員　平井　進　　専門調査員　鈴木隆英
協力機関	九戸村教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は九戸村役場の北西約 5.5kmに位置する。西には標高 852.2kmの折爪岳が聳え、東には瀬月内川が南から北へ流れている。折爪岳の東麓には、瀬月内川に注ぐ多くの沢によって開析された複合扇状地が広がっている。本遺跡はその上に形成された集落の跡である。遺跡は標高310m～315mの沢を狭んでの縁辺に広がっており、扇状地の辺縁部に発達している現在の集落よりやや高い場所に位置している。

周辺の遺跡としては、嶽Ⅰ遺跡、道地Ⅲ、Ⅱ遺跡、江刺家Ⅴ、Ⅳ遺跡、滝谷Ⅲ遺跡、江刺家遺跡がある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は東北縦貫自動車道建設に伴う緊急発掘調査である。調査は7月下旬より3ヶ月間の予定で行われたが、予想をはるかに上まわる遺構が検出されたため、今年度は全遺構数の約半数を精査するにとどまった。残りは次年度引き続き調査する予定である。調査区全域に粗掘をかけ遺構検出を行った結果、竪穴住居址27棟、ピット 236基、焼土遺構5ヶ所を検出した。そのうち本年度は縄文時代竪穴住居址10棟、平安時代竪穴住居址1棟、中世の竪穴住居址1棟、ピット 133基、焼土遺構5ヶ所を調査した。以下精査結果の概要である。

〈竪穴住居址〉

縄文時代の竪穴住居址を時期別にみると中期4棟、後期1棟、晩期2棟、不明3棟である。平面プランは円形7棟、隅丸長方形2棟、小判形1棟である。円形の住居址の規模は直径6mを最大に 2.7mが最小である。柱穴はすべて4本である。隅丸長方形の住居址の規模は1棟が約11.2m×3.2mのいわゆるロングハウスタイプのもので、もう1棟は4.8m×3.4mである。ロングハウスタイプの住居址は5対10本の柱穴が確認されるが、斜面下方の壁は検出されなかった。時期は不明である。他の1棟は6本柱で時期は中期である。小判形の住居址は4.6m×3.6mの規模が5.7m×4.6mに拡幅されている。柱穴は4本である。炉は地床炉8基、石囲炉2基埋甕炉1基、石囲埋甕炉1基、不明1基である。1住居址内に炉跡が2ヶ所ある住居址は3棟あるが、明らかに炉を作り替たものが1棟で他は今後の検討課題である。炉の位置は住居址中央にあるのが1基だけで、他は中央より壁の方へ寄っている。しかし、その片寄りには方位的な規則性は認められない。これら縄文時代の住居址のうち、床のしまりも固く壁も明瞭な住居址は4棟で、他は掘り下げが浅く床や壁が削られたり調査区外にかかっていて完全な平面プランを得ることはできなかった。

平安時代の住居址はピット3基と縄文時代の住居址1棟と重複しており、その土層が分かりにくく壁を確認できたのは南側と北側の1部である。東側は調査区外に広がっているが、その境界線に煙出付きカマドの1部が出土している。規模及び形状は 4.8m程度の隅丸長方形と思

われる。基本的な柱穴は確認できなかった。

中世の住居址は4.3m×3.3mの隅丸長方形と思われるが、遺構の3分の1は調査区外であるため推定にとどまる。ほぼ中央と思われる所と西側寄りの2ヶ所に地床炉がある。確認された柱穴は4本で壁際にあるが、全体としては8本柱の住居址と思われる。

〈ピット〉

ピットは大部分、縄文時代中期～晩期のものである。形状からみればフラスコ形ピットとビーカー形ピットで全体の4分の3を占める。その他に皿状ピットや柱穴状ピットもある。平面プランは楕円形2基、不整形1基を除くとすべて円形である。規模は底部の直径が80cm～ 160cm、深さ40cm～70cmのピットで全体の4分の3となる。ピット内に遺物を包含していたものは6基である。また底部中央に柱穴状ピットを有するものが2基あった。これらのピット群は時期別にはまだ分類していないが、沢より北側では1住居址を中心に環状的な配置がみられる。

〈焼土遺構〉

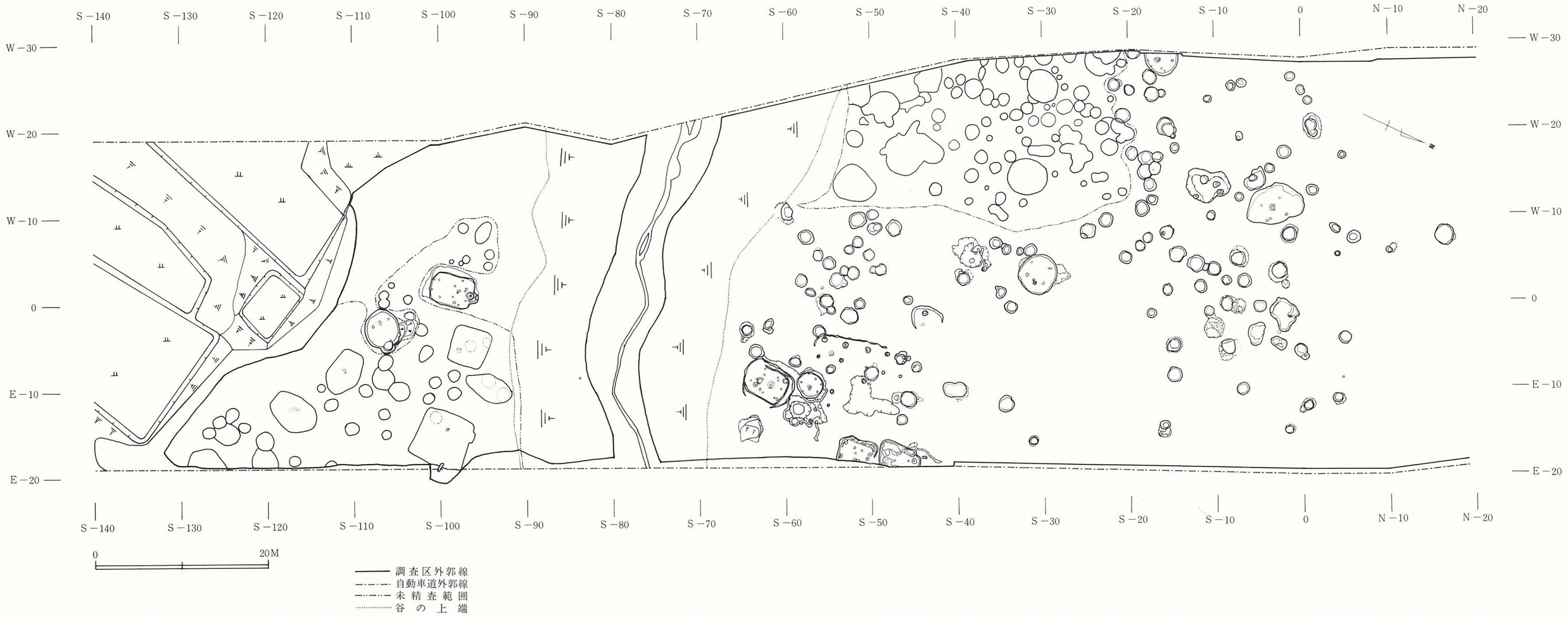
焼土遺構は最大直径50cm内外、厚さ1cm程度のものが多く大抵耕作等によって削剝をうけている。そのため住居址に伴うものかどうかは確認できなかった。

〈出土遺物〉

縄文時代の遺構群に伴う遺物の数量は全体として少ないが、時期的には多岐にわたる。そのほとんどは土器・石器類であるが、大半は縄文時代前期末～中期・晩期の土器類でほとんど破片である。その他にも調査区内からは縄文時代早期、後期、弥生時代、平安時代の遺物が少数ながら発見されている。なお石器としては石鏃、石匙、石皿、敲石、凹石、半円状扁平打製石器、磨石、石棒等の各種が出土しているが、その数は少ない。

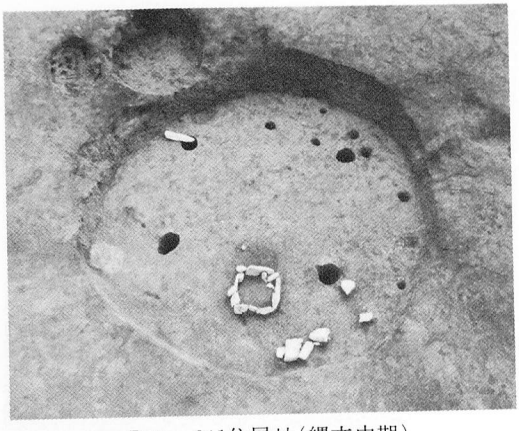
〈まとめ〉

出土遺物や遺構からみて、本遺跡は縄文時代中期・晩期の住居址やピット群を主とする複合遺跡である。今後残された遺構遺物の調査を進めるとともに周辺の遺跡との関連を検討してゆくことによって折爪岳東麓を舞台に展開された原始古代の歴史解明に大きく役立つものと考えられる。


S－140
S－130
S－120
S－110
S－100
S－90
S－80
S－70
S－60
S－50
S－40
S－30
S－20
S－10
0
N－10
N－20
W－30
W－20
W－10
0
E－10
E－20
0
20M
調査区外郭線
自動車道外郭線
未精査範囲
谷の上端

嶽Ⅱ遺跡遺構配置図

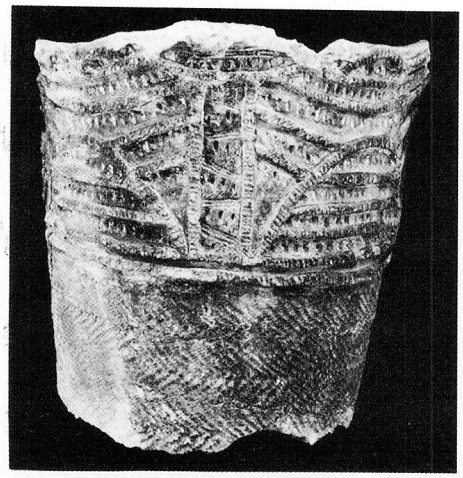
遺跡全景(東側上空より)



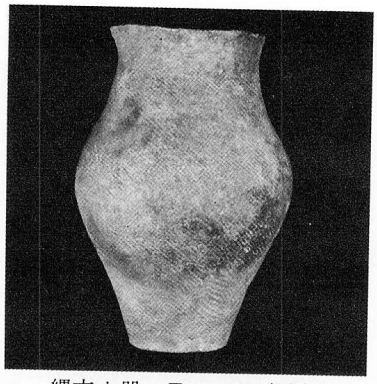
D V －011住居址(縄文中期)

D VI －0222ピット (縄文中期)

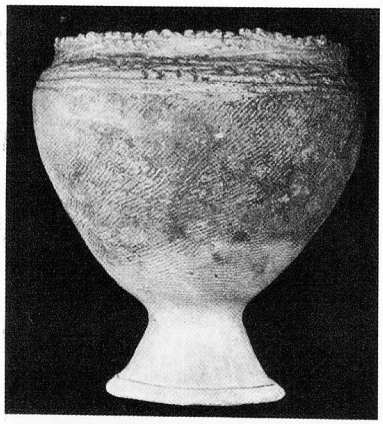
嶽 II 遺 跡



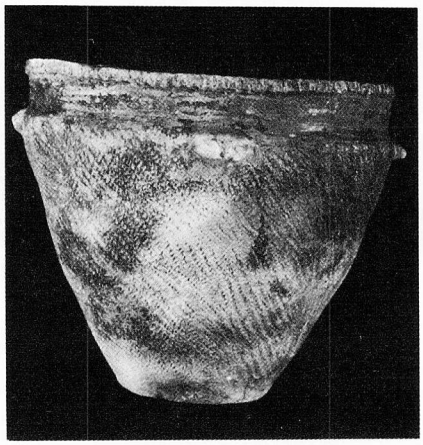
縄文土器　ＦＶ－011住居址



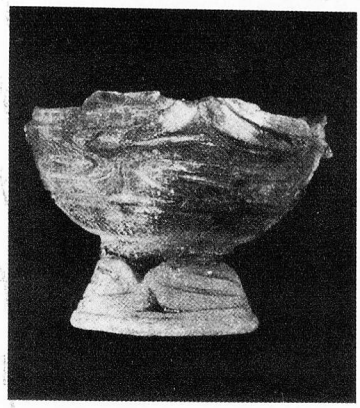
縄文土器　ＦⅥ－013住居址



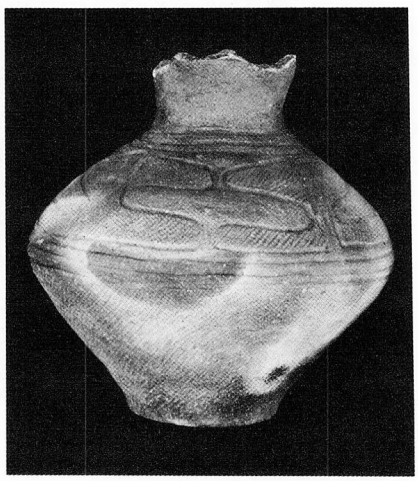
縄文土器　ＤＶ－0212ピット



縄文土器　ＣＶ－0247ピット



縄文土器　ＥⅥ－022ピット



弥生土器　ＥⅥ－024ピット

嶽Ⅱ遺跡出土遺物

(10) 道地(どうち) II 遺跡

遺跡所在地	九戸郡九戸村大字江刺家第14地割字築場
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年4月13日～5月30日
調査対象面積	3,000m²
調査面積	3,000m²
遺跡記号	DTII81
調査担当者	専門調査員　種市　進　　専門調査員　岩渕　久
協力機関	九戸村教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は、九戸村役場の北約６㎞に位置する。周辺には、西方に標高 852.2ｍの折爪岳がそびえ、東方に瀬月内川が北流している。この折爪岳と瀬月内川の間に大規模な山麓複合扇状地が発達している。扇状地は、東流する小さな沢によって開析され、沢と尾根の小規模な起伏の連なりを呈している。遺跡は、小尾根間の沢の発達していない凹地状の部分に位置している。標高300～310ｍの間の傾斜地である。遺跡の南には、水田を隔てて沢が東流する。周辺の遺跡として道地Ⅲ・嶽Ⅰ・嶽Ⅱ・江刺家Ⅴ・江刺家Ⅳ・滝谷Ⅲ・江刺家遺跡がある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫道八戸線建設による緊急発掘調査である。調査区は、遺跡範囲内縦貫道路線部分の面積 3,000㎡である。調査は、全域に粗掘をかけて遺構検出を行い精査した。この結果、ピット14基・道路跡１・遺物包含層が検出された。

以下調査の概要である。

〈ピット〉

検出されたピットは、それぞれの状態から大別すると(1)平面形が円形で断面形がフラスコ状のピット２基、(2)平面形が円形で断面形がビーカー状のピット９基、(3)平面形が円形で断面形が浅鉢状のピット２基、(4)平面形が楕円形で断面形が舟底状のピット１基となる。規模はそれぞれ異なり類別することはできない。数少ないピットの検出ではあるが、その半数は南端の低い尾根の頂部付近に集中している。

〈道路跡〉

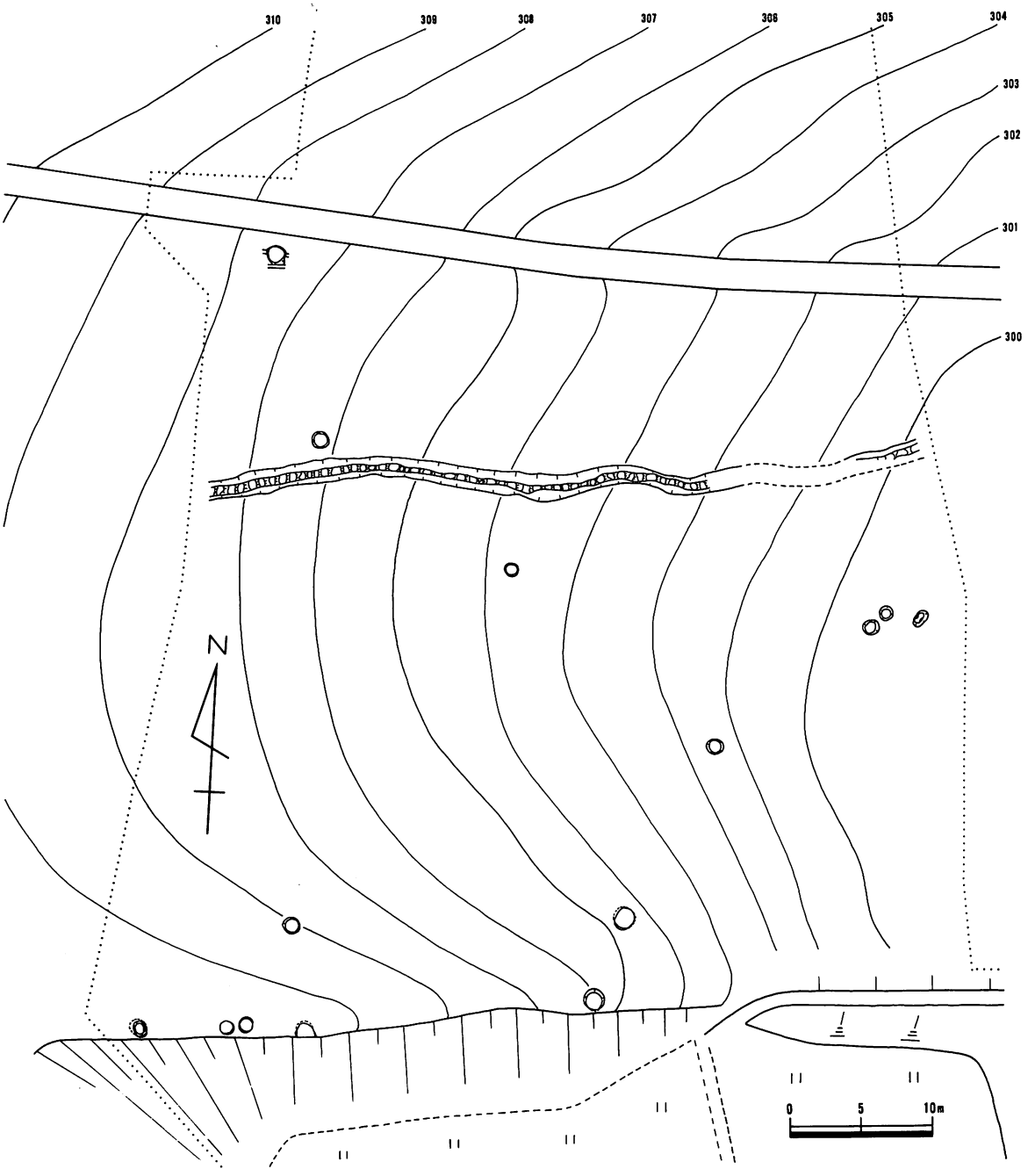
調査区の中央からやや北側に検出され、ほぼ東西に走っている。この道路は、箱薬研状に約30～40㎝掘り込まれており、上端幅は約150㎝、底部幅は約50㎝である。底面は、歩幅間隔で階段状に踏み固められてある。

〈遺物包含層〉

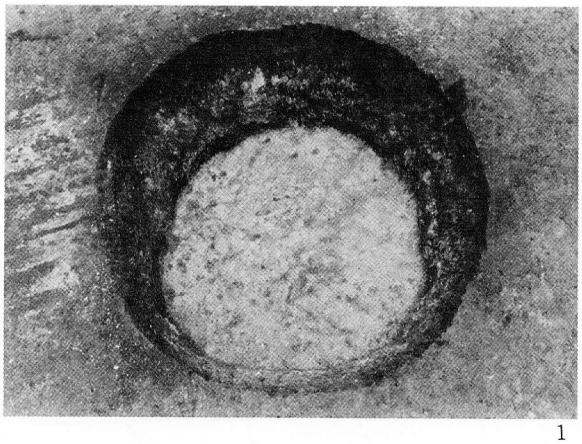
調査区の南端小尾根の頂部に遺物が集中して出土した。その多くは、貼瘤付の土器片である。この小尾根の頂部南半分は、開田のため約６ｍ掘り下げてあるため、包含層の大半は破壊されており、さらには検出された包含層も開田に伴ったと思われる攪乱を受けている。

3　まとめ

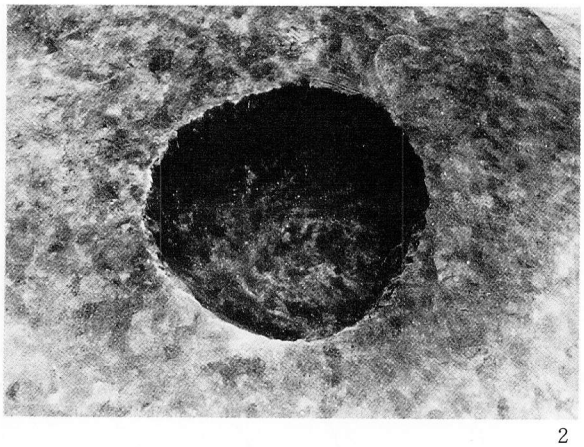
遺構及び遺物の集中している位置が、調査区南端の尾根の頂部であること、及びそこに接する水田の開田の際の遺物の出土（地元の人々の話し）から考え、遺跡の中心は、調査区南端の尾根頂部付近から南方の沢までの南斜面であったと推察される。今後、隣接する道地Ⅲ遺跡の資料とともに遺構の選地と時期関係など明らかにしていきたい。



道地II遺跡遺構配置図



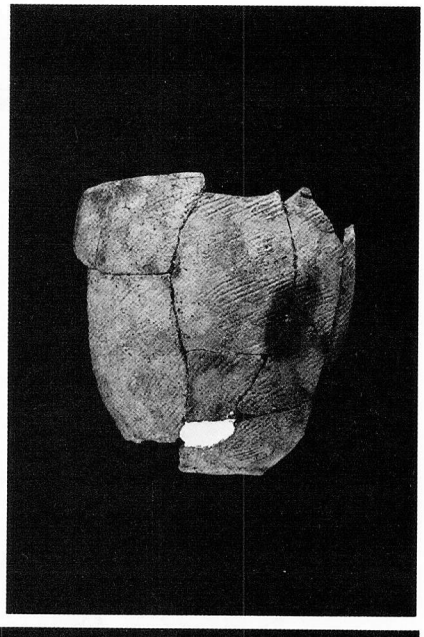
1



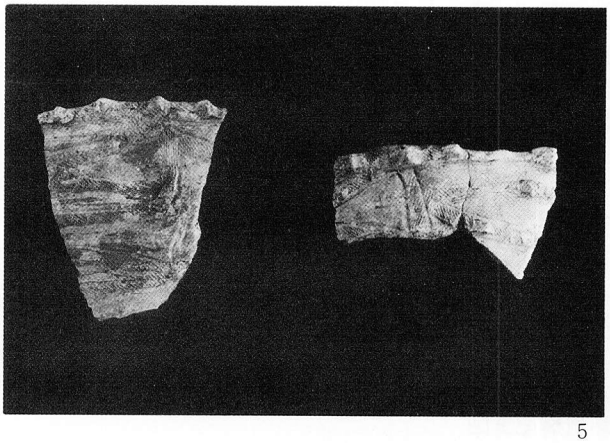
2

3

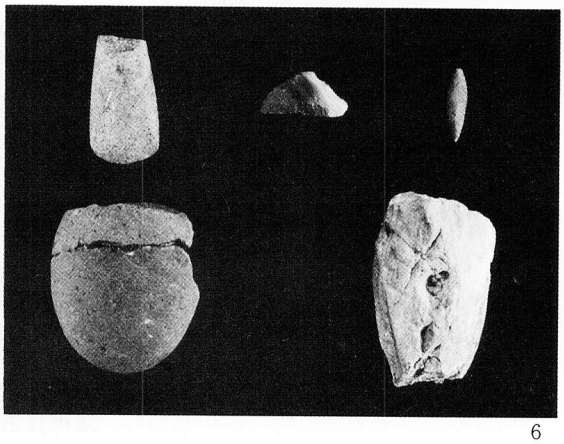
1．　ＢⅡ－52ピット
2．　ＡⅡ－52ピット
3．　道路跡
4～6　出土遺物



4



5



6

道 地 II 遺 跡

(11) 道地（どうち）III 遺跡

遺跡所在地	九戸郡九戸村大字江刺家第14地割字築場
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年6月1日～8月31日
調査対象面積	4,480m²
調査面積	4,480m²
遺跡記号	DTIII81
調査担当者	専門調査員　種市　進　　専門調査員　岩渕　久
協力機関	九戸村教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は、九戸村役場の北約６kmに位置する。周辺には、西方に標高 852.2ｍの折爪岳がそびえ、東方に瀬月内川が北流している。この折爪岳と瀬月内川の間に大規模な山麓複合扇状地が発達している。扇状地は、東流する小さな沢によって開析され、沢と尾根の小規模な起伏の連なりを呈している。遺跡の指定範囲は、南辺が東へのびる小尾根の北裾、北辺が東流する沢であり、この間の緩斜面である。遺跡周辺には、２箇所の湧水地がある。遺跡の標高は 298～310ｍである。周辺の遺跡として道地Ⅱ・嶽Ⅰ・嶽Ⅱ・江刺家Ⅴ・江刺家Ⅳ・滝谷Ⅲ・江刺家遺跡がある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫道八戸線建設による緊急発掘調査である。調査区は、遺跡範囲内縦貫道路線部分の面積 4,480㎡である。調査は、全域に粗掘をかけて遺構検出を行い精査した。この結果、竪穴住居址10棟・竪穴住居址状遺構３棟・ピット16基・配石遺構１・埋設土器遺構１及び遺物包含層が検出され、さらには、遺構の集中する位置が、遺跡中央部と調査区東端の湧水周辺の２箇所に分かれることが確認された。

以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

検出された住居址は、縄文時代中期に属するもの３棟、晩期に属するもの７棟である。

中期に属する住居址３棟は、湧水を囲む様に配置している。完掘された２棟の形状・規模はそれぞれ、円形・最大径4.55ｍ・深さ0.42ｍ、隅丸方形・最大径3.75ｍ・深さ0.25ｍである。ともに柱穴は４本、壁寄りに石囲炉と前庭部をもち、その脇に硬く踏み固められた部分がある。出土遺物は少ない。

晩期に属する住居址７棟は、遺跡の中央に集中し、その中の３棟は重複関係にある。地床炉をもつ住居址１棟、石囲炉をもつ住居址６棟（１棟は土器埋設を伴う）である。住居址の形状は全て円形であるが規模に差異がみられる。重複関係にある３棟は、最下位のものが最大径６ｍと大型で、その上位のものも６ｍ前後と推定される。他の単一に占地する４棟の規模は最大径３～４ｍである。大型の住居址は多くの完形土器を伴うなど、他住居址とは異質なものであろう。柱穴配置については、壁ぎわに細い柱穴が巡るもの１棟、４本のもの１棟、６本～８本のもの２棟であり、他の住居址では明確にし得ない。構築時期については、重複関係にあったものは、下位から晩期前葉～中葉に位置づけられ、他の住居址は、晩期前葉～中葉に位置づけられる。

〈竪穴住居址状遺構〉

検出された３棟のうち、１棟は晩期住居址との重複関係にあり、２棟は単一に占地している。

最大径３ｍ前後の規模で、いずれも炉・柱穴は検出されず、住居址に比較し深く掘り込まれている。この遺構は出土遺物から縄文時代晩期に属するものと思われる。

〈ピット〉

16基検出されているうち、２基は先の晩期住居址２棟の南東壁にそれぞれ張り出す様に検出されており、検出形態・埋土から考え住居址に伴うピットであろう。形状は楕円形で最大径はそれぞれ 230cmと260cmである。他14基のピットは、径１ｍ前後のものが多く、フラスコ状ピット１基、ビーカー状ピット11基、浅鉢状ピット２基である。５基のピットの埋土から土器片が出土している。

〈その他〉

その他の遺構として、配石遺構１、埋設土器遺構１が検出された。埋設土器は、縄文時代晩期の深鉢型土器である。

〈出土遺物〉

出土遺物は、縄文土器・石器である。縄文土器は、住居址及び遺物包含層から多く出土している。住居址からの出土土器は、特に重複関係にあった住居址の最下位と最上位の住居址に多く、完形土器が床面に残されていた。最下位の住居址には、大洞Ｂ式に比定される注口土器・台付鉢形土器・把手付台付浅鉢形土器・壺形土器・台付椀形土器などが出土し、最上位の住居址には、大洞C_2式に比定される壺形土器・鉢形土器・台付鉢形土器・浅鉢形土器 ・皿形土器など完形土器が時期毎にセット関係をもって出土した。遺物包含層からは、縄文時代前期末葉から晩期末葉までの土器片が出土しており、特に、晩期の土器片が多く、復元可能のものも多い。石器類は、土器片に比較し出土量は少なく、磨石・凹石・石鏃・スクレーパー・石皿などである。

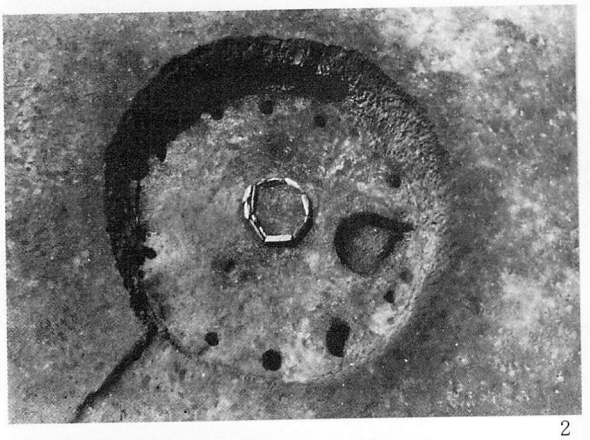
3　まとめ

縄文時代中期の住居址は、湧水を取り囲む様に位置しており、周辺からは縄文時代前期末葉の遺物も出土していることも考え合せ、湧水を利用しての居住地の選地と時期的関係について興味ある問題を提示している。又、縄文時代晩期の住居址からは、多くの出土遺物の時期毎のセット関係や住居址構築のあり方など、小遺跡ではあるが、密度の濃い資料を得られた。

道地III遺跡遺構配置図

1

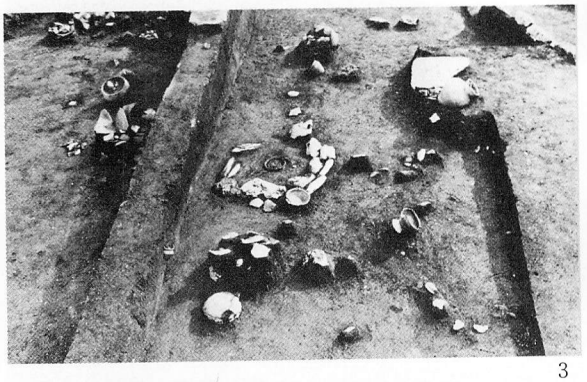
5



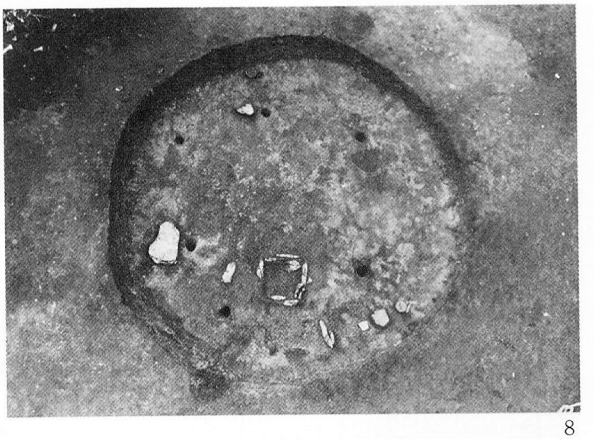
2

6

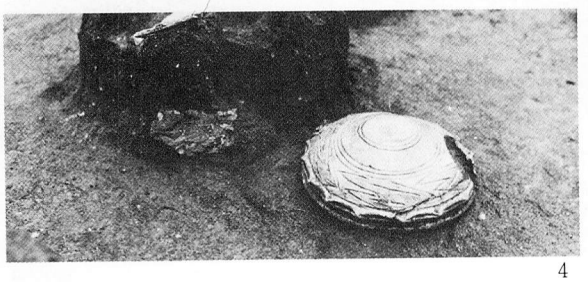
7



3



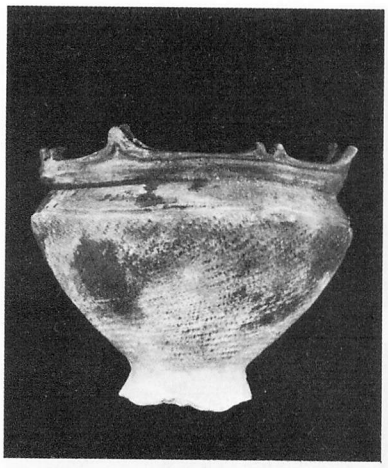
8



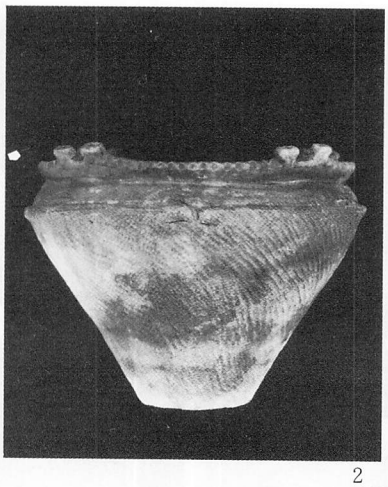
4

1．　晩期遺構群
2．　F II－2住居址
3～5．F II－6住居址
6～7．F II－9住居址
8．　E IV－2住居址

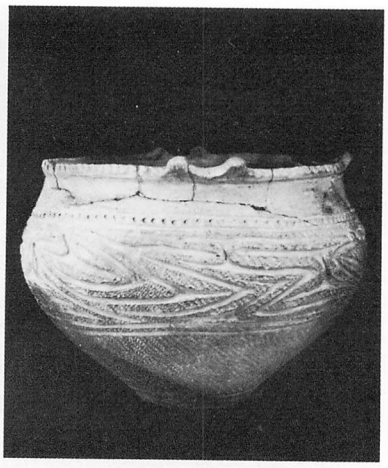
道 地 III 遺 跡



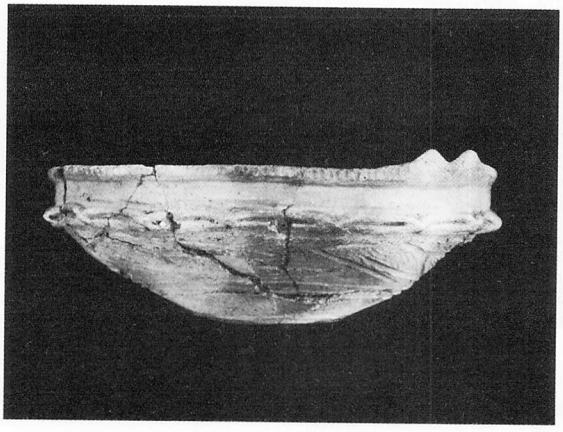
1



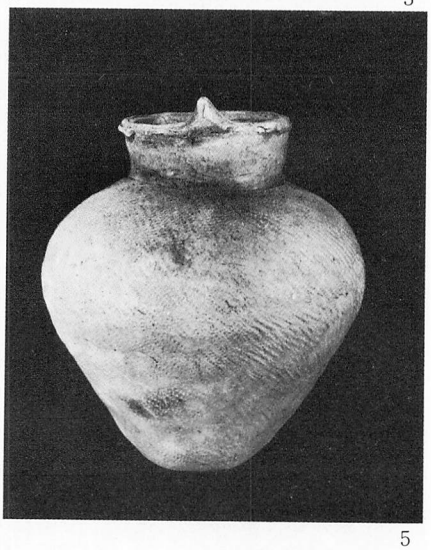
2



3



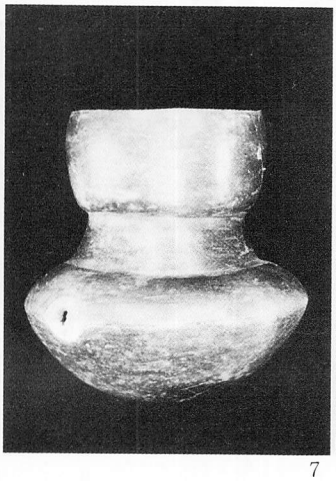
4



5

1～5　F II－6住居址床面出土
6～8　F II－9住居址床面出土

6



7

8

道地III遺跡出土遺物

(12) 馬場野（ばばの）Ⅰ遺跡

遺跡所在地	九戸郡軽米町大字軽米第12地割字馬場野
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年9月7日～11月6日
調査対象面積	11,970m²
発掘面積	11,970m²
遺跡記号	ＢＮＩ81
調査担当者	専門調査員　小平忠孝　　専門調査員　栃沢満郎
協力機関	軽米町教育委員会、二戸市教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は、軽米町役場より北西約 900mに位置する。軽米町周辺においては、北上山地の北東縁が南北に紡錘形にのび低位の丘陵が発達する。その間を北流する雪谷川が小規模な段丘を形成してきた。

本遺跡は、洪積世の段丘が開析されてできた谷とそれを挾む丘陵に載っている。標高は、およそ196m～211mである。

周辺の遺跡としては、本遺跡北側谷筋に位置する叺屋敷II遺跡、さらにその北尾根に位置する叺屋敷III遺跡、本遺跡南側丘陵頂部より南東に広がる緩斜面に位置する馬場野II遺跡、本遺跡北側丘陵部東麓に位置する叺屋敷Ib遺跡、その北側に隣接する叺屋敷I遺跡などがある。

2　調査の概要

本調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査区域は、ほぼ西から東にのびる尾根筋と谷よりなる面積11,970m²である。

本年度は調査区全域に粗掘をかけて遺構の検出のみを行った。その結果、南東に広がる谷筋の緩斜面からは遺構の検出はできなかったが、西から東に延びる丘陵頂部付近とその山腹斜面より遺構の検出をみた。

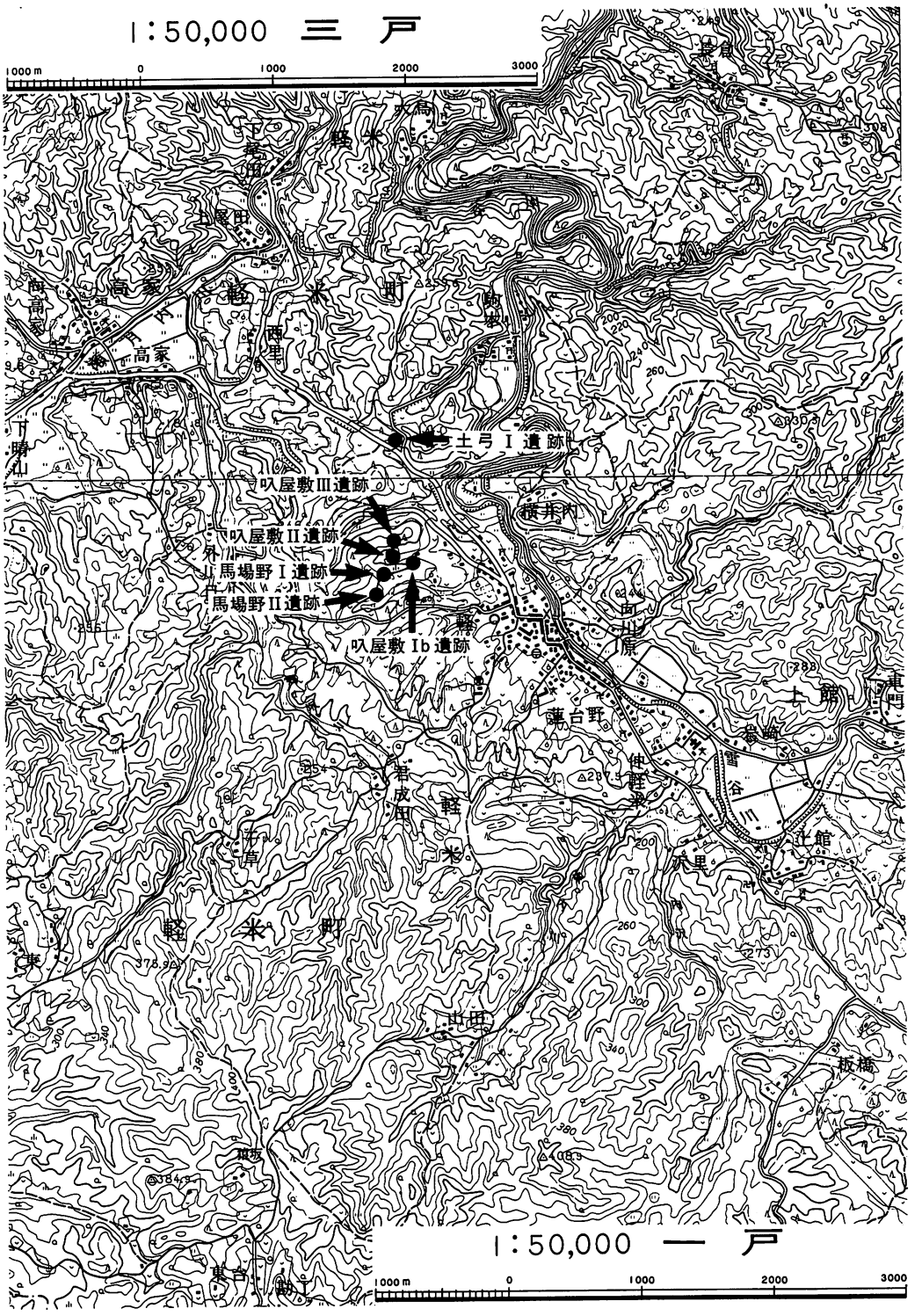
検出された遺構は、住居址11棟、ピット37基である。

〈出土遺物〉

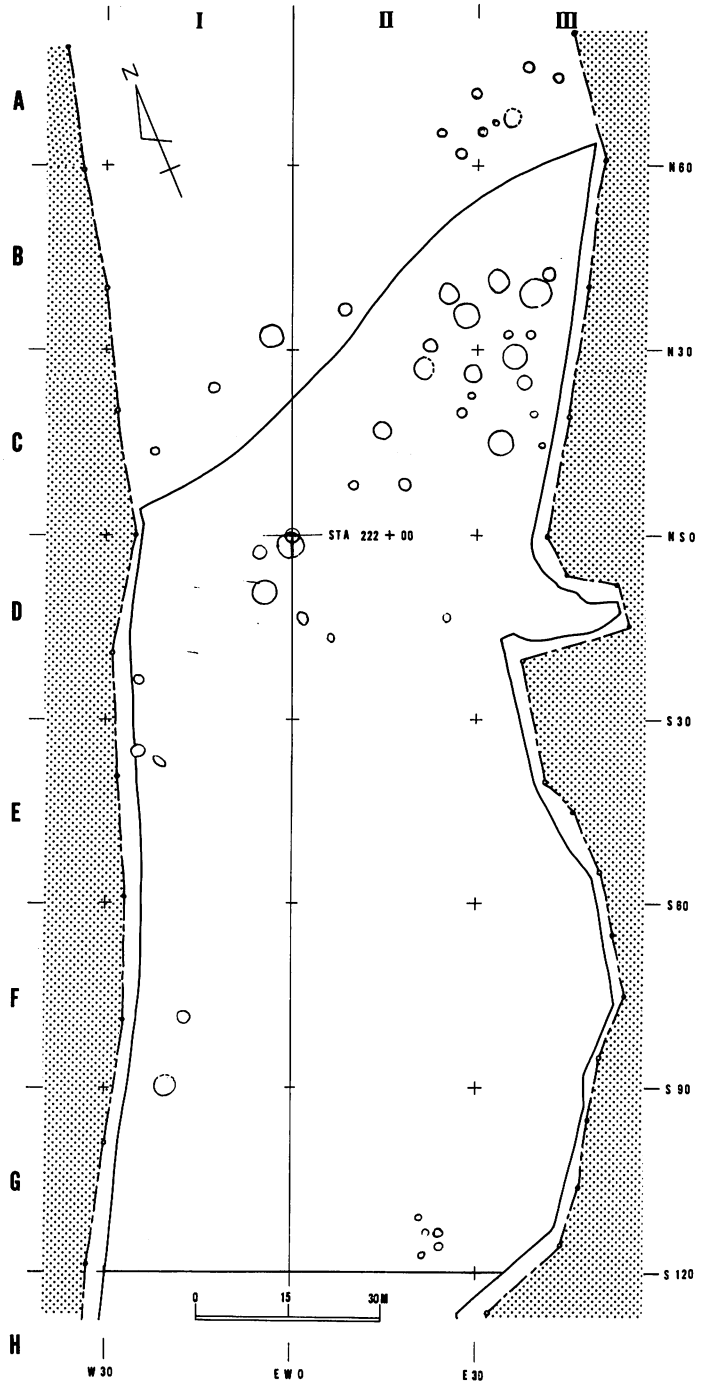
出土遺物は、耳環・深鉢・土器片が丘陵部尾根筋を中心に出土した。縄文土器の時期としては、縄文時代後期・晩期である。石器は、石斧・磨石が出土している。

3　まとめ

本遺跡と周辺の叺屋敷I・Ib・II・III遺跡、馬場野II遺跡は相互に隣接した遺跡であり、57年度の本遺跡発掘調査により、遺跡相互の関連が明らかにされる可能性をもっている。



東北縦貫自動車道関係遺跡位置図（軽米町）



馬場野Ⅰ遺跡遺構配置図

(13) 馬場野(ばばの)II遺跡

遺跡所在地	九戸郡軽米町大字軽米第12地割字馬場野
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年7月20日～11月6日
調査対象面積	20,500m²
発掘面積	20,500m²
遺跡記号	BNII81
調査担当者	主任専門調査員　近藤宗光
	専門調査員　畠山靖彦　　専門調査員　朝野孝二
協力機関	軽米町教育委員会

1　遺跡の立地

馬場野II遺跡は軽米町役場の西約1㎞に位置する、北上山地丘陵の一つに立地している。遺跡周辺はなだらかな丘陵が数列東及び、東北方向に発達しており、その丘陵間の小さな谷や沢が雪谷川に向かって流れている。

本遺跡は埋没谷をさけ丘陵の尾根筋から沢に向かう標高190m～213mの南側斜面にかけ広い範囲にわたっている。

周辺の遺跡は北に向かって連続しており、本遺跡に隣接する馬場野I遺跡、その北側の沢を中心に叺屋敷II遺跡、さらにその北側丘陵の鞍部に叺屋敷III遺跡があり、同じ丘陵の東側に延びた縁辺に叺屋敷I遺跡が続いている。

2　調査の概要

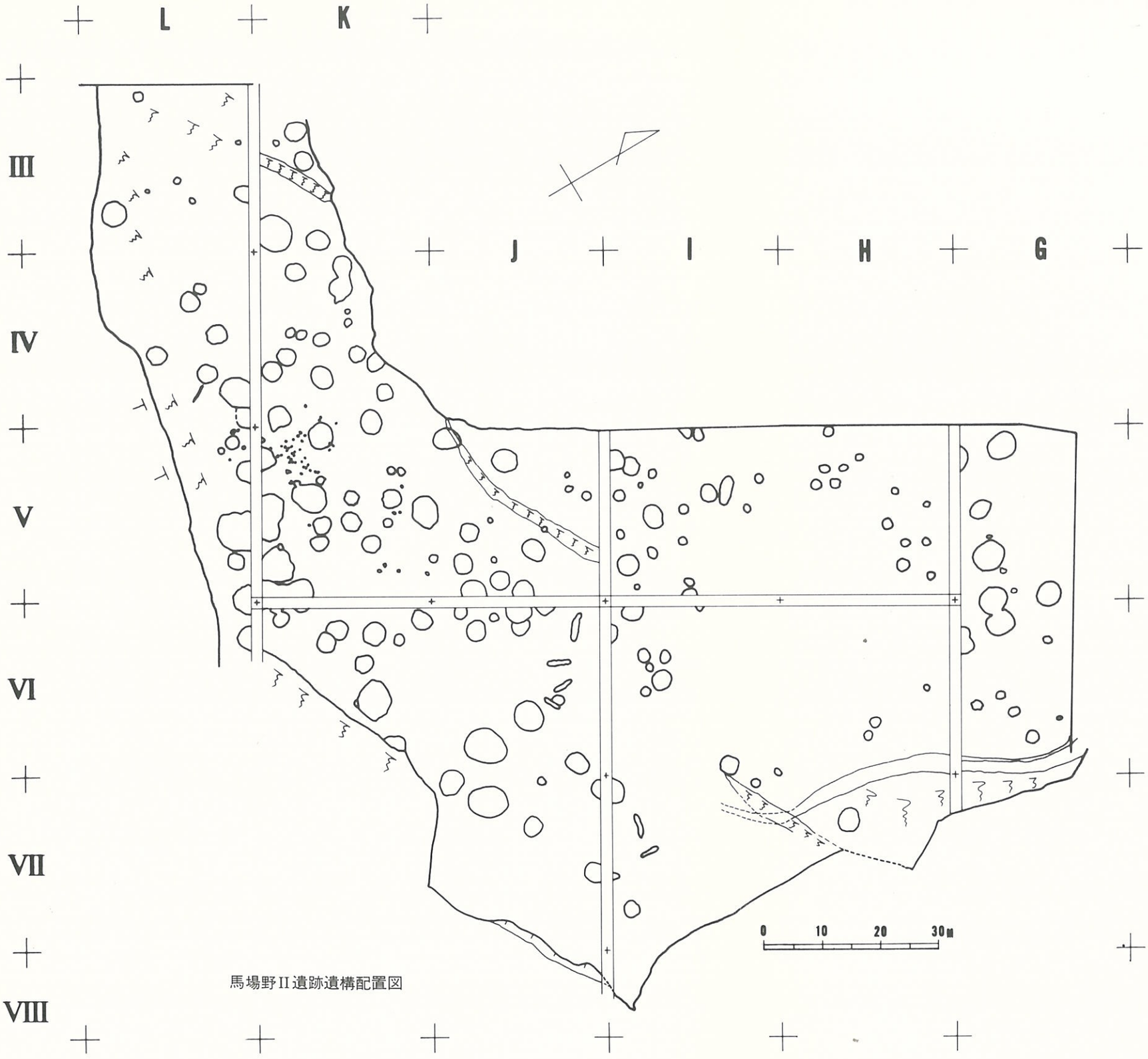
本遺跡は東北縦貫自動車道八戸線建設工事に伴う緊急事前調査である。
本年度の調査は粗掘遺構検出を目的とし実施した。
遺構精査は57年度以降継続調査となる。

検出された遺構は竪穴住居址76棟、陥し穴状遺構8基、ピット 105基、柱穴状ピット41基等である。

出土した遺物は縄文時代中期、後期、晩期及び弥生時代の土器片、石器類である。
その他に土偶等も出土した。

3　まとめ

本遺跡の粗掘遺構検出の結果、竪穴住居址配置や遺物出土数からみて、縄文時代の大集落の存在や弥生時代の集落も考えられ、今後の継続調査により県北地方の歴史解明にとって重要な資料を提示できる遺跡であるといえる。



馬場野II遺跡遺構配置図

(14) 叺屋敷(かますやしき)Ib遺跡

遺跡所在地	九戸郡軽米町大字軽米第13地割字叺屋敷
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年4月13日～8月20日
調査対象面積	12,740m²
発掘面積	12,740m²
遺跡記号	KYIb81
調査担当者	専門調査員　佐々木嘉直　　専門調査員　佐藤　勝
協力機関	軽米町教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は、軽米町役場北西約1kmに位置する。軽米町周辺においては、北上山地の北東縁が南北に紡錘形に伸び低位の丘陵が発達する。その間を北流する雪谷川、瀬月内川が小規模な低地を形成してきた。本遺跡は洪積段丘低位面の背後に連なる緩斜面に載っている。標高は174m～194mである。

周辺の遺跡としては、叺屋敷Ⅰa・Ⅱ・Ⅲ遺跡、馬場野Ⅰ・Ⅱ遺跡、大日向遺跡、君成田Ⅳ遺跡などがある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査は対象区域全域にグリッドを設定し、全面に粗掘をかけて遺構検出し、精査した。

遺構検出面は斜面のため一様ではない。斜面上位では八戸火山灰層、斜面中位では南部浮石層、斜面下位では中掫浮石層が基本検出面である。

検出された遺構は、竪穴住居址6棟、建物跡1棟、小屋跡1棟、ピット29基、陥し穴状遺構7基である。以下調査の概要である。

〈竪穴住居址〉

竪穴住居址は6棟である。時期別にみると縄文時代5棟、平安時代1棟である。縄文時代5棟を時期区分すると、前期2棟、中期末葉から後期初頭1棟、時期不明2棟である。このうち、ほぼ完全な形で検出された3棟は、調査区南辺を占める尾根先端緩斜面を占地している。LⅡ－1住居址は、尾根頂部を占地し、中期末葉から後期初頭の住居址である。平面形は楕円形で、規模は5.8m×4.7mを計る。複式炉系統の炉と3基の地床炉をもち、六角形の柱穴配置である。前期住居址2棟は、.LⅢ－Ⅳ区の南斜面で検出された。平面形は隅丸方形・隅丸台形を呈し、規模は平均2.9m×2.4mを計る。いずれも地床炉をもち、柱穴は5個と6個である。出土遺物には、土器片と石鏃および剝片類がある。

平安時代竪穴住居址1棟は、斜面下位の沢沿いで検出された。埋土に十和田a降下火山灰層がレンズ状に再堆積していることから、平安時代に比定される。平面形は隅丸台形で、規模は4.6m×3.9mを計る。柱穴は4個検出された。カマドは検出されなかった。

〈建物跡・小屋跡〉

斜面下位で検出された柱穴群は、その分布状況から建物跡の柱痕跡とみとめられる。規模は桁行3間×梁行2間の東西棟を身舎とし、庇をもつものと思われる。斜面上位で検出された柱穴群は、やはり柱痕跡から建物跡と推定できるが、柱穴埋土の比較から、最近の小屋跡と思われる。

〈ピット〉

ピットは29基検出された。これを断面形で形態分類すると、皿形に近いもの13基、フラスコ形８基、ビーカー形６基、その他２基である。皿形は斜面下位に多く、フラスコ形・ビーカー形は斜面上位に多い。規模の平均値を開口部径・底部径・深さの順に示すと、皿形ピットは、130cm・106cm・33cm、フラスコ形ピットは174cm・191cm・141cm、ビーカー形ピットは 156cm・109cm・106cmである。最大のピットは開口部径310cm×280cm・底部径343cm×325cm・深さ 232cmを計る。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は７基検出された。そのうち４基は斜面中位で検出された。また６基までが、長軸方向と等高線がほぼ平行する状況で検出された。形態的には細長い溝状を呈するものが多い。ＪⅢ区で並列して検出された２基は、他の５基に比べて規模が大きく、平均計測値は、開口部長軸径 447cm・開口部短軸径 157cm・深さ 180cmを計る。また、この２基の間には、埋土の比較から新旧関係が成立する。

〈出土遺物〉

出土遺物は主に縄文土器片、石器類である。そのほとんどは、遺構外から出土したもので、住居址やピット類などの遺構から得られたものは少ない。

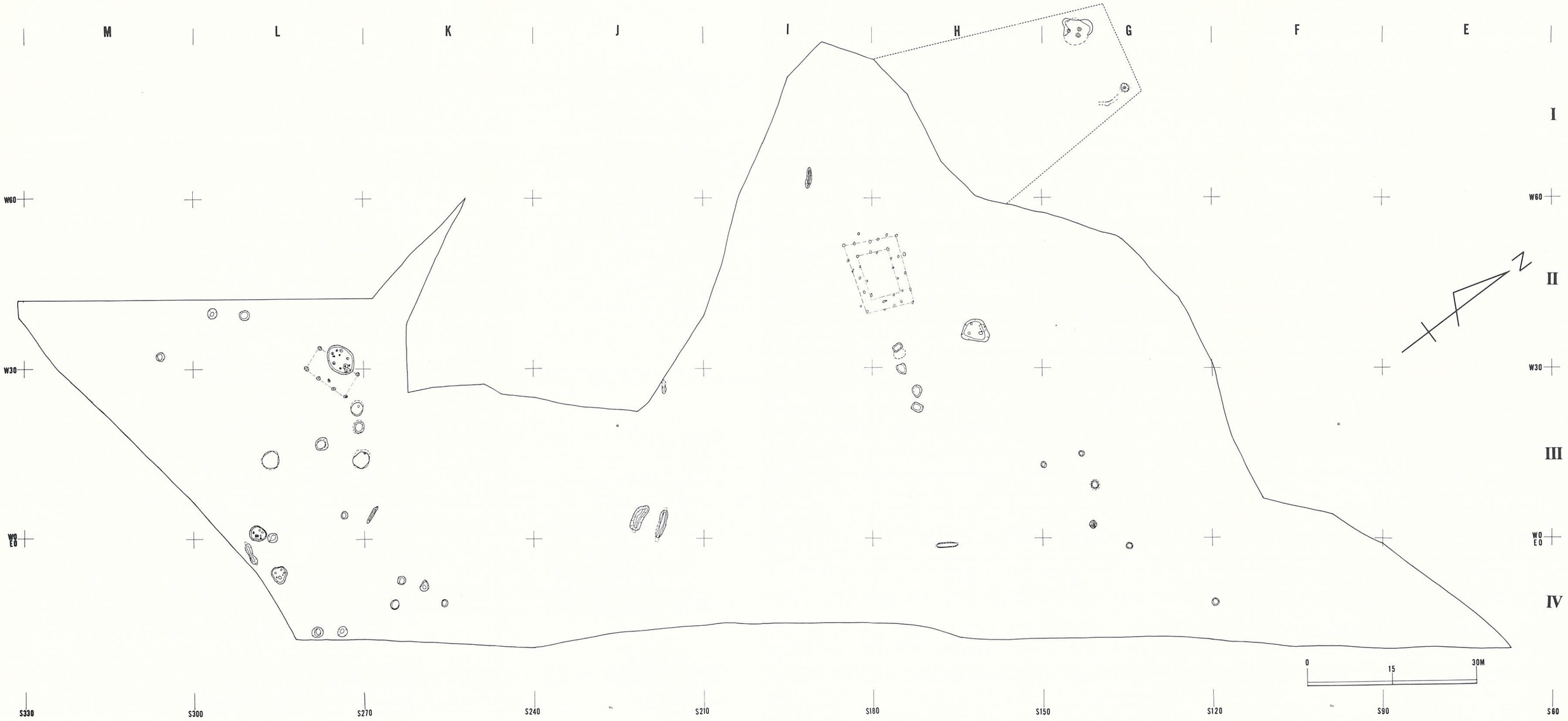
縄文土器片は、前期、中期、後期、晩期にわたる各時期に比定されるものが出土している。量的には、後期に比定されるものが多い。

石器では、石鏃・石匙・石皿・磨石・凹石・半円状扁平打製石器・円盤状石製品・スクレーパー類などが出土している。その他には、「朱」と思われる顔料、古銭（寛永通宝）なども出土している。

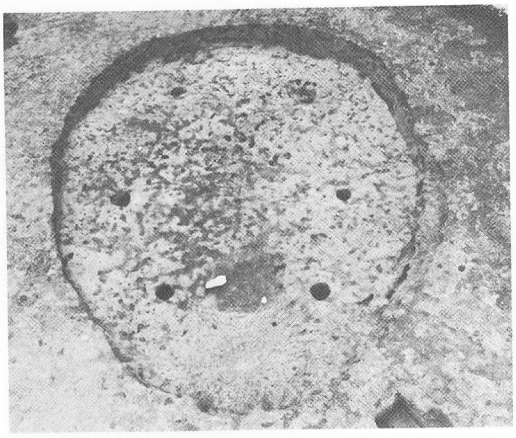
〈まとめ〉

今回調査した範囲は、昨年調査した叺屋敷Ia遺跡の南への拡大部分である。調査区域の大部分を北斜面が占めることもあり、遺構数は叺屋敷Ia遺跡よりも少なかった。しかし、竪穴住居址、ピット、陥し穴状遺構など、種別の異なる遺構群が検出された。これらの遺構群は、地形面との関連で、それぞれ特徴ある分布を示した。このことから、縄文時代における占地を考える資料が得られたものと思う。殊にピット群は、斜面上位と下位で集中的に検出されたが、両者の間には、規模・形態の相違が認められた。ピットの性格を考える上で興味がある。

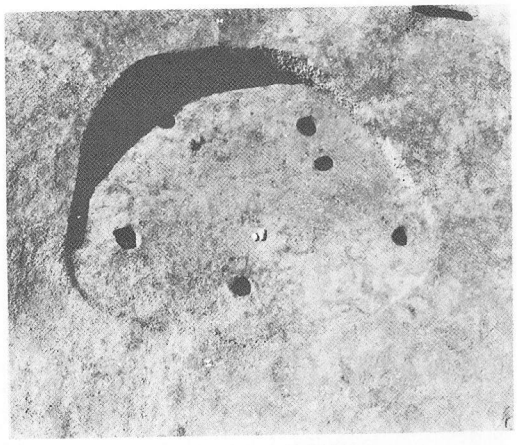
今後隣接遺跡から得られる資料とあわせて検討したい。



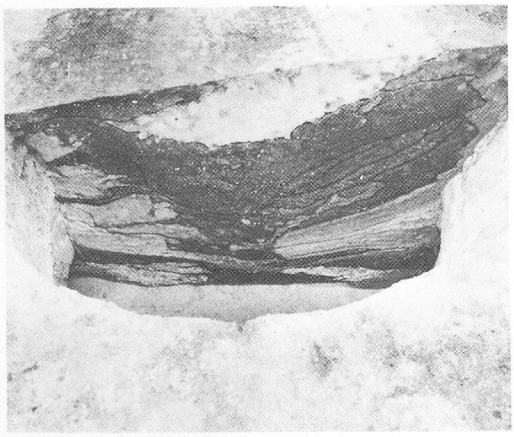
吠屋敷 Ib 遺跡遺構配置図



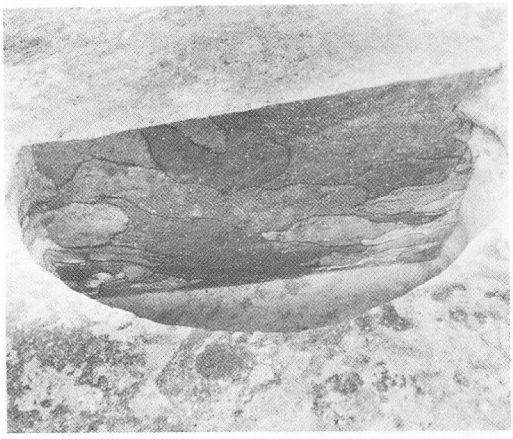
L II－1住居址



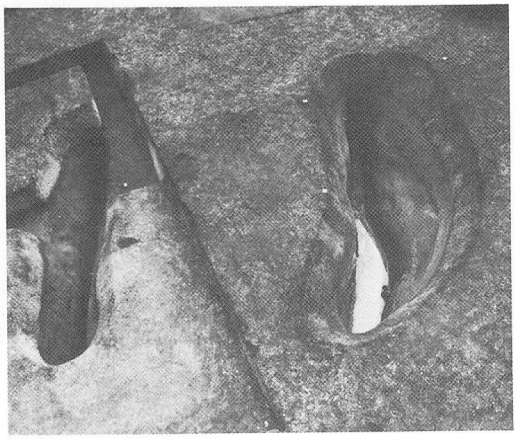
L IV－1住居址



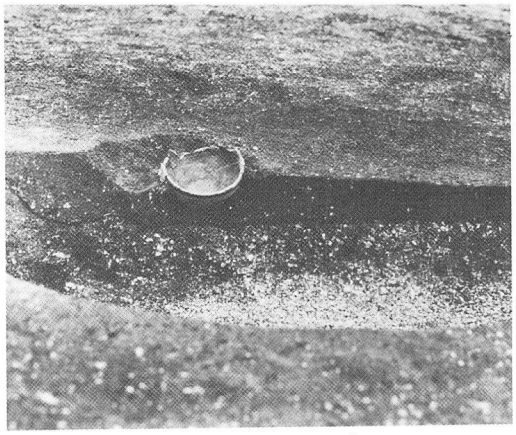
L III－53フラスコ形ピット



L III－55フラスコ形ピット

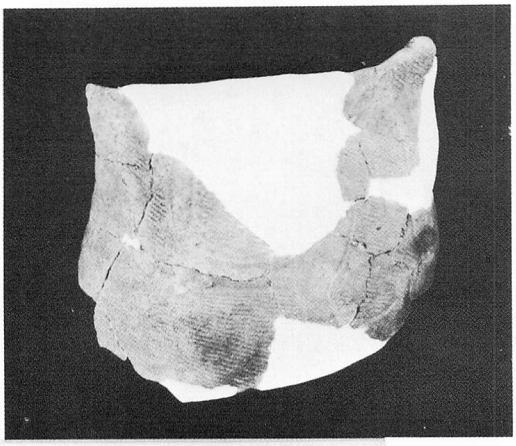


J III－152・153陥し穴状遺構

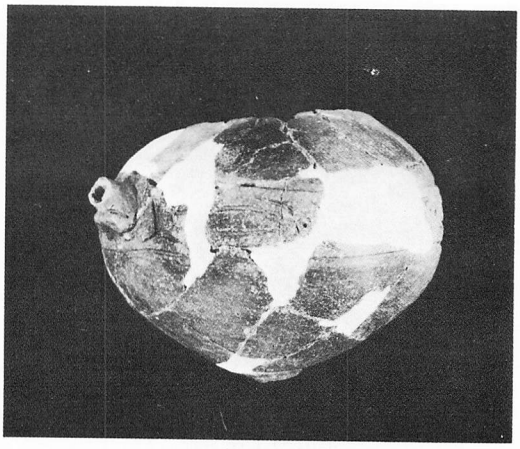


G III－54ピット

吠屋敷 Ib 遺跡

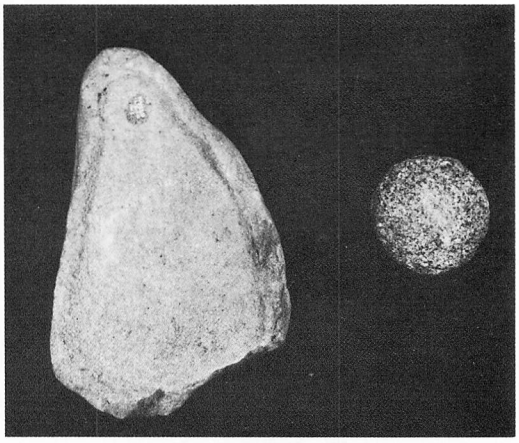


深鉢土器片



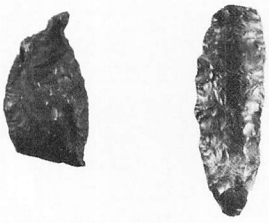
注口土器

台付鉢



石皿と磨石

石　鏃



石匙、スクレーパー

叺屋敷 Ib 遺跡出土遺物

(15) 叺屋敷(かますやしき)II遺跡

遺跡所在地	九戸郡軽米町大字軽米第13地割字叺屋敷
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年6月8日～10月31日
調査対象面積	7,680m²
発掘面積	7,680m²
遺跡記号	KYII81
調査担当者	主任専門調査員　遠藤勝博
	専門調査員　村上達夫　　専門調査員　菊池利和
協力機関	軽米町教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は軽米町役場北西約1㎞に位置する。軽米町周辺においては、北上山地の北東縁が南北に紡錘形に伸び低位の丘陵が発達する。遺跡は軽米町を北流する雪谷川と瀬月内川に挟まれた丘陵地にあって、標高220～230mの尾根にU字状に囲まれ東側に開けた小さな谷に面している。遺構は谷頭付近の南面する緩斜面に構築されている。斜面の標高は 190m余である。

周辺の遺跡として、叺屋敷Ⅰ、Ⅲ、馬場野Ⅰ、Ⅱ、君成田Ⅳ、大日向、土弓の各遺跡がある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査は対象区域全域にグリットを設定し遺構検出を行い精査した。遺跡の層序は二戸～九戸地方に見られる十和田火山起源の堆積物であるが、斜面上位では上層部の削平や流出がみられ、下位では黒色土の堆積が厚くなっている。遺構の大部分は中掫浮石層で検出されている。検出された遺構は縄文時代竪穴住居址18棟、平安時代と推定される竪穴住居址1棟、ピット29基である。

〈竪穴住居址〉

縄文時代竪穴住居址は18棟検出された。時期別に分けると、中期末葉～後期初頭9棟、後期6棟、時期不明3棟である。中期末葉～後期初頭住居址の平面形は円形又は楕円形で、規模は最大で6.0m×4.2m、最小3.0m×2.7mである。床面は斜面の方向に僅かに傾斜をもつがほぼ平坦で、4ケ～5ケの柱の柱穴があり、壁の土留め施設の為の壁溝や小柱穴を周らしたものもある。炉は地床炉が主で、南側に片寄らせて設けられている。炉の周辺から南壁に接する部分の床に踏みしめのある住居址が6棟あり、出入口に接する部分と考えられる。拡張されたり重複している住居址はないが、柱を建て替えた住居址が1棟検出されている。

後期住居址の6棟は平面形が円形又は楕円形で、規模は最大で5.8m×5.2m、最小で 2.1m× 2.0mである。床は斜面の方向に僅かに傾斜するがほぼ平坦である。壁溝を周らす住居址はないが壁にそって小柱穴が周らせてある住居址が1棟検出されている。柱穴は4棟ではそれぞれ4ケ確認されたが、2棟についての柱穴数は不明である。炉は石囲炉のものが4棟で地床炉のものが2棟である。炉の位置は中央にあるものと南側に僅か片寄るものがある。

他の3棟の縄文時代竪穴住居址は時期判定の確実な資料を欠くが、規模や炉の位置などに後期住居址との類似が認められる。

平安時代と推定される竪穴住居址の平面形は隅丸長方形で、規模はほぼ東西方向を長軸とする5.0m×3.7mである。床はほぼ平坦で少量の炭化材があり、床土には十和田a降下火山灰の小塊が点在している。柱穴は確認されず径50㎝ぐらいの浅いピットが3基、東壁に接して検出されている。カマドは北壁東側に片寄って設けられ、くりぬき式の煙道があって北側に開口する。所属時期は遺物の出土がないので確定できないが、カマドの設置位置や床土に認められた

火山灰の降下時期などから平安時代と推定されるが、今後の検討を要する遺構である。

〈ピット〉

ピットは29基検されたが13基が縄文時代のピットで他は近世以降の抜根跡である。縄文時代ピットはフラスコ状や皿状のピットと、円形プランで径３ｍ前後の竪穴とに大別される。フラスコ状ピットは開口部1.7ｍ～1.2ｍ、深さ1.1ｍ～0.3ｍの規模のもので貯蔵穴と考えられるものが多い。大型ピットは住居址と同規模のもので、底面に小ピットを伴うもの１基と、底面になんの施設もないものが２基ある。

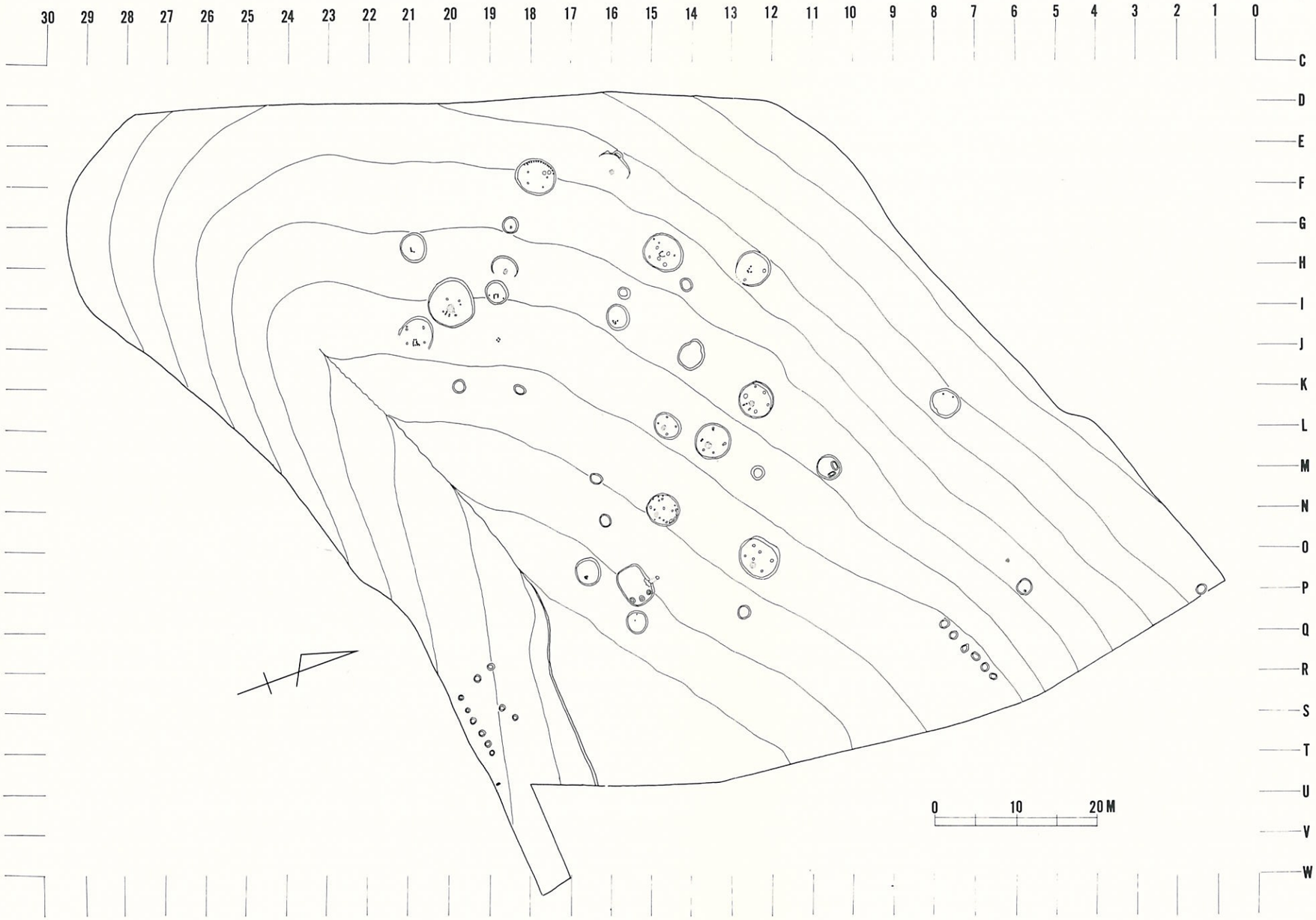
〈出土遺物〉

遺物は遺構とその周辺から縄文土器と石器が出土した。土器は遺構内出土のものは中期末葉から後期後半に所属し、器種は深鉢、浅鉢、注口土器、壺、ミニチュア土器である。出土数は完形品と接合可能なものを合せて約60点である。遺構外出土の大部分は破片であるが、香炉形土器２点が完形に近い状態で出土している。遺構外出土の土器破片には前期・晩期のものも含まれている。

石器は約40点で検出された遺構数からみると比較的少量である。器種は石鏃、石匙、掻器、石斧、凹石、磨石、円盤状石製品、半円状打製石製品、敲石、であるが、剥片石器は少なく大部分は石核石器である。

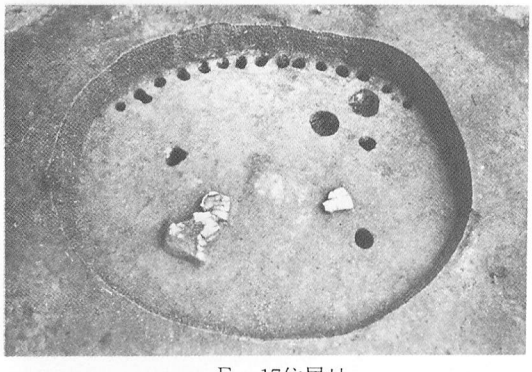
３　まとめ

縄文中期末葉～後期を主とした遺構と遺物の資料が得られ、今後発掘を予定されている周辺の遺跡とあわせて、県北部の歴史解明へ大きく貢献すると考える。検出された住居址の配置には当時の集落構成もうかがわれる遺跡であり、整理を進めながら明らかにしていきたい。



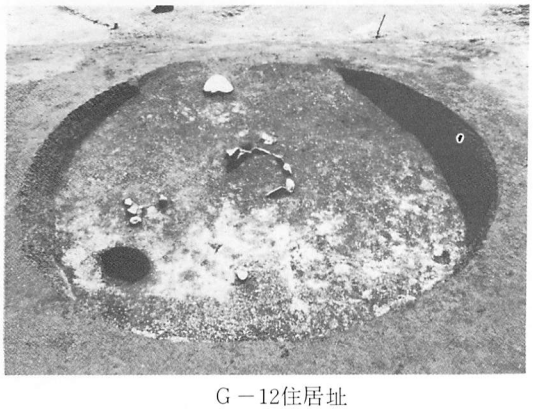
吠屋敷II遺跡遺構配置図

遺 跡 全 景

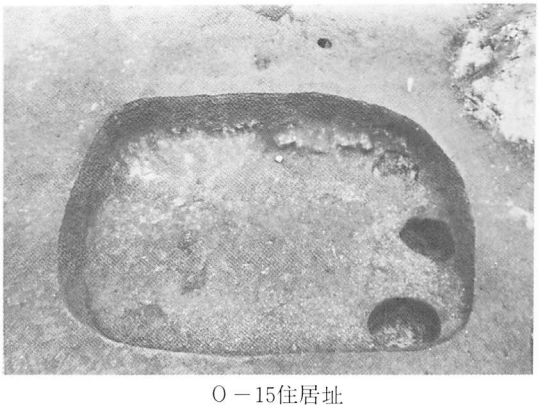


E－17住居址

O－11住居址



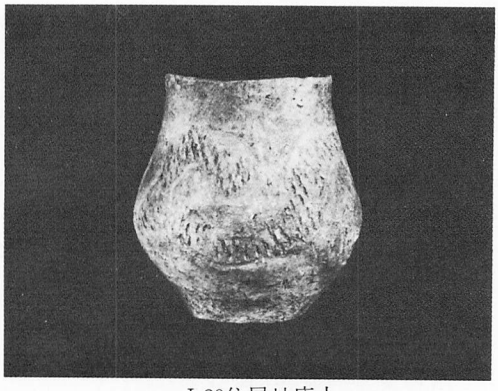
G－12住居址



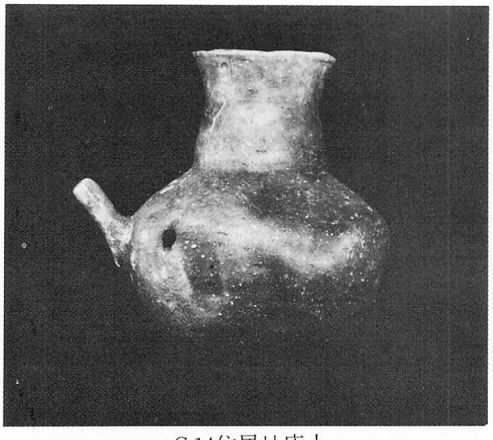
O－15住居址

吠屋敷 II 遺跡

K 14住居址床上



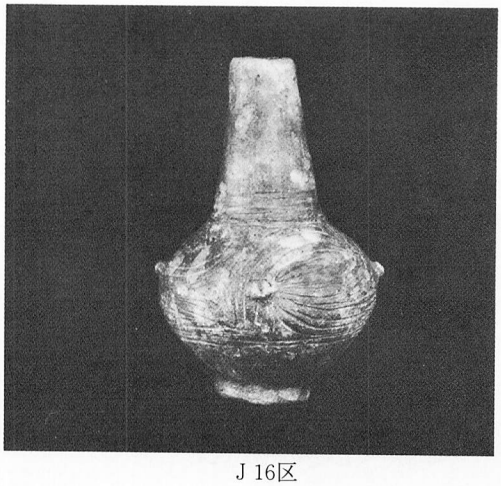
I 20住居址床上



G 14住居址床上

G 20住居址床上

H 14区



J 16区

吠屋敷II遺跡出土遺物

(16) 叺屋敷(かますやしき)Ⅲ遺跡

遺跡所在地	九戸郡軽米町大字軽米第13地割字叺屋敷
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年8月21日～11月17日
調査対象面積	7,000m²
発掘面積	7,000m²
遺跡記号	ＫＹⅢ81
調査担当者	専門調査員　佐々木嘉直　　専門調査員　佐藤　勝
協力機関	軽米町教育委員会

1　遺跡の立地

本遺跡は軽米町役場北西約1kmの所に位置する。遺跡は北上山地北東縁に発達した低位な丘陵の先端部にあり、東側は雪谷川によって形成された低位段丘へと傾く。遺跡付近は南北を支谷によって切られており尾根状を呈する。標高は、210m～220mである。

周辺の遺跡には南側斜面下位の叺屋敷II遺跡、南側の支谷を挟んで馬場野I・II遺跡、さらに東側斜面下位の叺屋敷I遺跡などがある。

2　調査の概要

本遺跡の調査は東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査は路線内対象区域全域に粗掘をかけ遺構検出を行い精査した。その結果、遺構は東西に連なる尾根頂部から南斜面上位にかけて分布していることがわかった。検出された遺構は、竪穴住居址13棟、ピット26基、焼土遺構1基、土器埋設遺構1基である。

〈竪穴住居址〉

検出された竪穴住居址はすべて縄文時代のものである。13棟の住居址は、出土遺物や炉の形態などの類似性から判断して中期末葉～後期初頭に位置づけられる一群と、後期前葉～中葉に位置づけられる一群とに大別できる。

前者は5棟からなり、調査区の西側に寄った分布を示す。形状は楕円形～隅丸長方形を呈する。規模は平均径4mを計り、概ね新規のものよりも大きい。これらの住居址には床面中央部から東壁あるいは南東壁の方向に複式炉系統の炉が設けられている。また、壁際の床面に2個の礫を平行に埋置した〝出入口〟状施設が2棟で観察されている。さらに、西側境界線に近接した2棟は焼失をうけていた。

後者は8棟からなり、調査区中央部から東側に多い。1棟だけ南斜面上位にもある。形状は前群と大差ないが、平均径 3.4mと規模的に小さい。炉はすべて地床炉で、床面中央や壁に寄ったあり方を示す。

〈ピット〉

ピットは総数26基を数え、住居址群同様に尾根の頂部付近に分布する。形態的にはフラスコ形の断面形を示すものが大半で、ビーカー形や皿形、舟底形を示すものは少ない。全体の分布からみれば、フラスコ形のものは中期末～後期初頭に比定される住居址群周辺に多く、ビーカー形などのピットは調査区東側の後期住居址群と近接するあり方を示す。

平均的規模は、フラスコ形のものが開口部径 123cm±・底部径 141cm±・深さ80cm±、ビーカー形のものが開口部径 163cm±・底部径 124cm±・深さ85cm±、そして皿形や舟底形のものが開口部径 124cm±・底部径 110cm±・深さ41cm±を計る。出土遺物には縄文土器片や磨石などがある。

〈土器埋設遺構〉

この遺構も尾根の頂部付近で検出された。土器は縄文時代中期末葉（大木10式）期の深鉢形土器で、直立の状態にその下半部を約20cmの深さまで下位の火山灰層に埋設されていた。

〈焼土遺構〉

この遺構は調査区西縁の南側斜面上位に位置する。検出面は再堆積火山灰層の上部層理面付近で、この土層を挟んで下位からフラスコ形ピットが検出されている、現地性焼土が70cm±×60cm±の範囲に形成されており、下位の火山灰層は使用面から5cmの深さまで火熱による赤色変化をうけていた。

〈出土遺物〉

遺物は遺構群が分布する尾根の頂部付近から南斜面にかけて多く得られており、北斜面からはほとんど出土していない。出土地点をみると、その多くは遺構外から出土し、住居址など遺構に伴うものは少ない。遺物には縄文土器・石器・土製品・石製品などがある。

縄文土器は、時期別に前期前葉・中期末葉・後期前葉～後葉・晩期前葉の各期に比定される器種としては、深鉢・浅鉢・台付鉢・ミニチュア土器があり、粗製深鉢が最も多い。

石器には石鏃・石匙・スクレーパー・磨製石斧・磨石などがある。土製品には滑車形耳飾りや円盤状土製品がある。石製品には円盤状石製品がある。

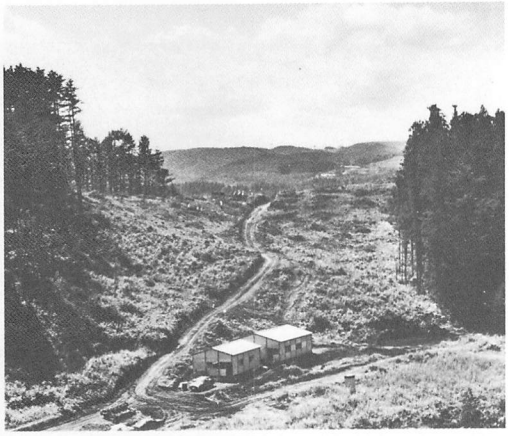
3　まとめ

これまで当埋蔵文化財センターによって軽米町や九戸村周辺で発掘調査された遺跡は10遺跡以上を数え、その結果、縄文時代中期から後期に限っただけでも得られた資料は量的に増加している。これらの調査例をみると、立地面が段丘や丘陵の南側緩斜面という例が多く当遺跡のような尾根状の地形に占地する例としては九戸村川向遺跡や軽米町君成田Ⅳ遺跡があるだけで類例に乏しい。さらに、縄文後期の住居址が主体となるのは君成田Ⅳ遺跡だけに限られる。

本遺跡はこうした数少ない類例の中にあって、単独の遺跡としては貴重な存在であり、住居址を中心として検出された遺構群や出土遺物からは当地方の縄文時代中期末葉から後期へと遷移する時間帯の様相をうかがうことができる。

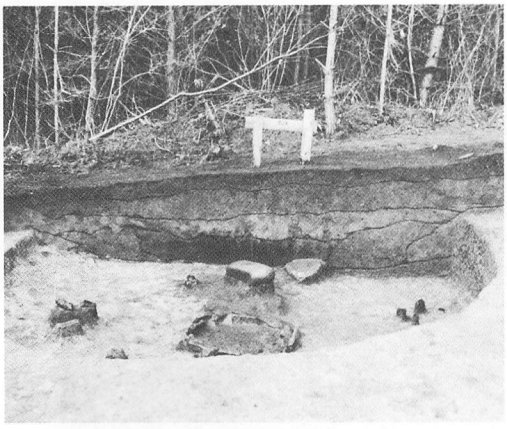
さらに、本遺跡周辺の極めて近接した所でも、叺屋敷Ia・Ib・IIなどの遺跡や馬場野Ⅰ・IIなど計5遺跡の調査が行なわれており、軽米町西方にひろがる丘陵から低位段丘にかけて広範囲に調査区が拡大しつつある。そこで、本遺跡も将来的にはそれらの調査結果と有機的に結びつくことによって岩手県北東部における縄文文化の解明に役立つものと考えられる。

吠屋敷III遺跡遺構配置図

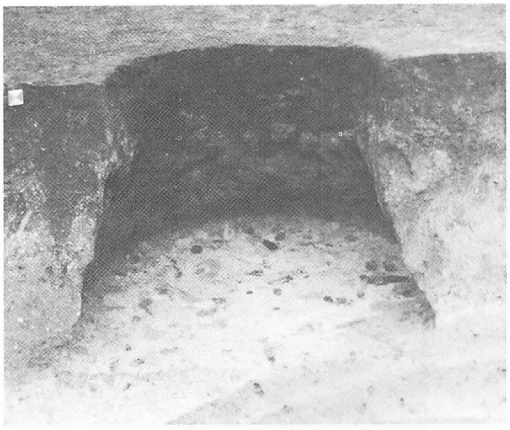


遺跡遠景(北より)

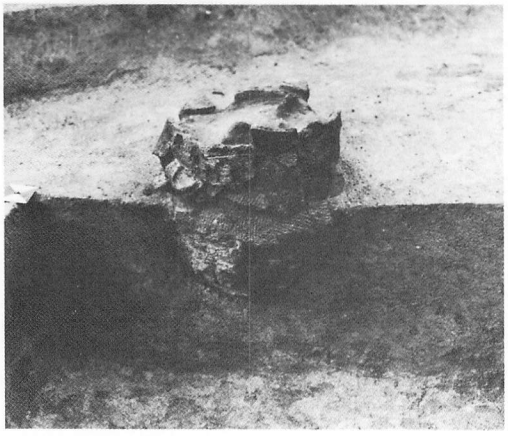
CⅡ－7住居址



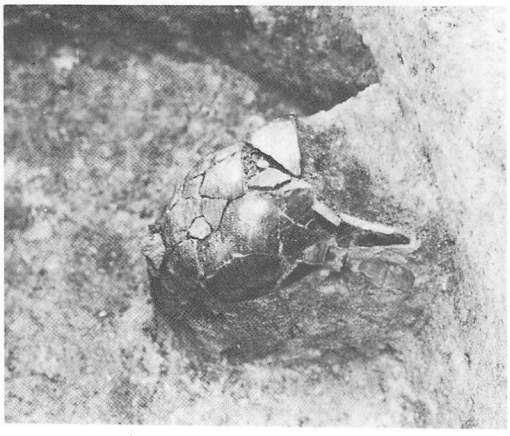
CⅡ－20住居址



CⅡ－3フラスコ形ピット

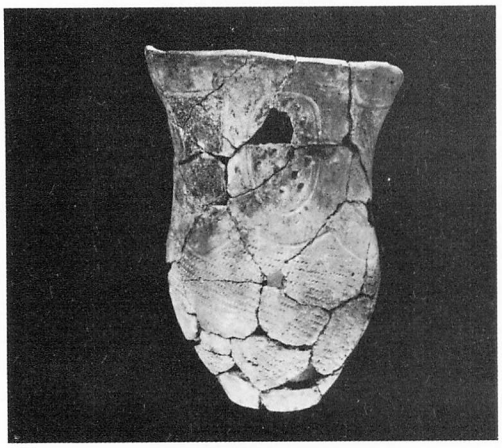


CⅢ－9土器埋設遺構



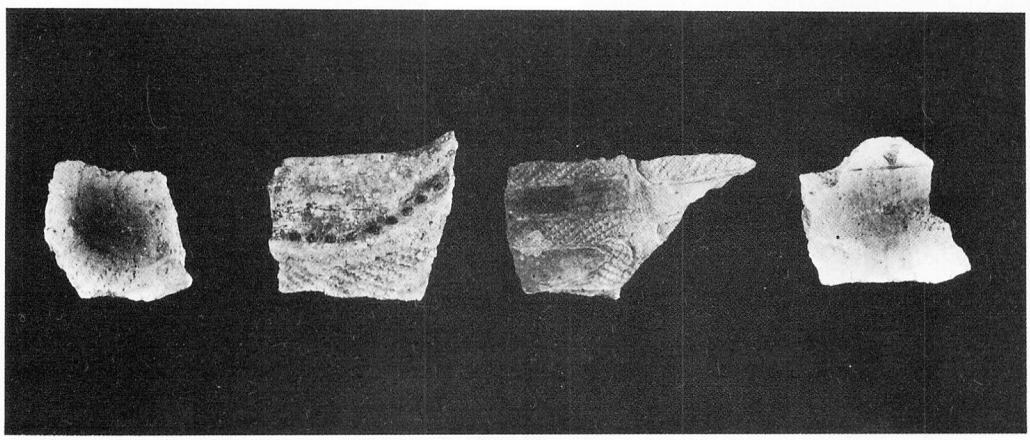
遺物出土状況(CⅢ－12ピット)

吠屋敷Ⅲ遺跡

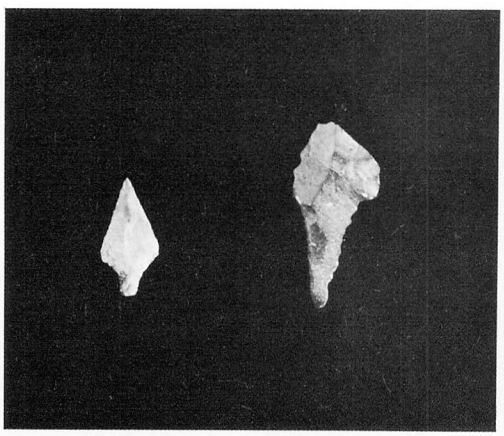


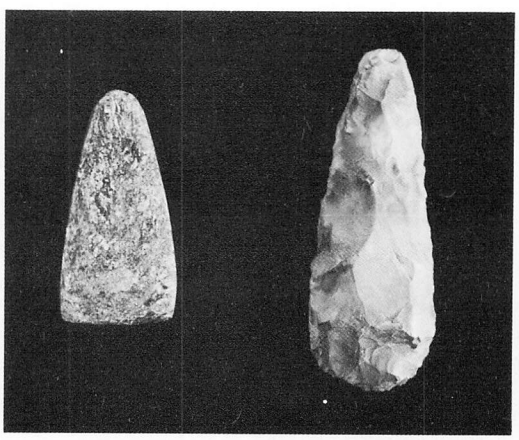
CⅢ－12ピット出土

CⅠ区出土



CⅡ～CⅢ区出土





CⅡ～CⅢ区出土

吠屋敷Ⅲ遺跡出土遺物

(17) 土弓（ど きょう）Ⅰ遺跡

遺跡所在地	九戸郡軽米町大字軽米第15地割字駒木
事業主体	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和56年4月13日～6月6日
調査対象面積	5,580m²
発掘面積	5,580m²
遺跡記号	DOI81
調査担当者	主任専門調査員　遠藤勝博
	専門調査員　村上達夫　　専門調査員　菊池利和
協力機関	軽米町教育委員会

1　遺跡の立地

土弓Ⅰ遺跡は、軽米町役場から北西1.5kmの国道340号線沿いに位置する。この近辺では、北流する雪谷川と並行して、標高 250m 前後の丘陵が南北にのびており、本遺跡は、この丘陵の南側の緩斜面にある。遺跡の標高は約 200m である。周辺の遺跡としては、叺屋敷ⅠⅡⅢ遺跡、馬場野遺跡、大日向遺跡、駒木遺跡がある。

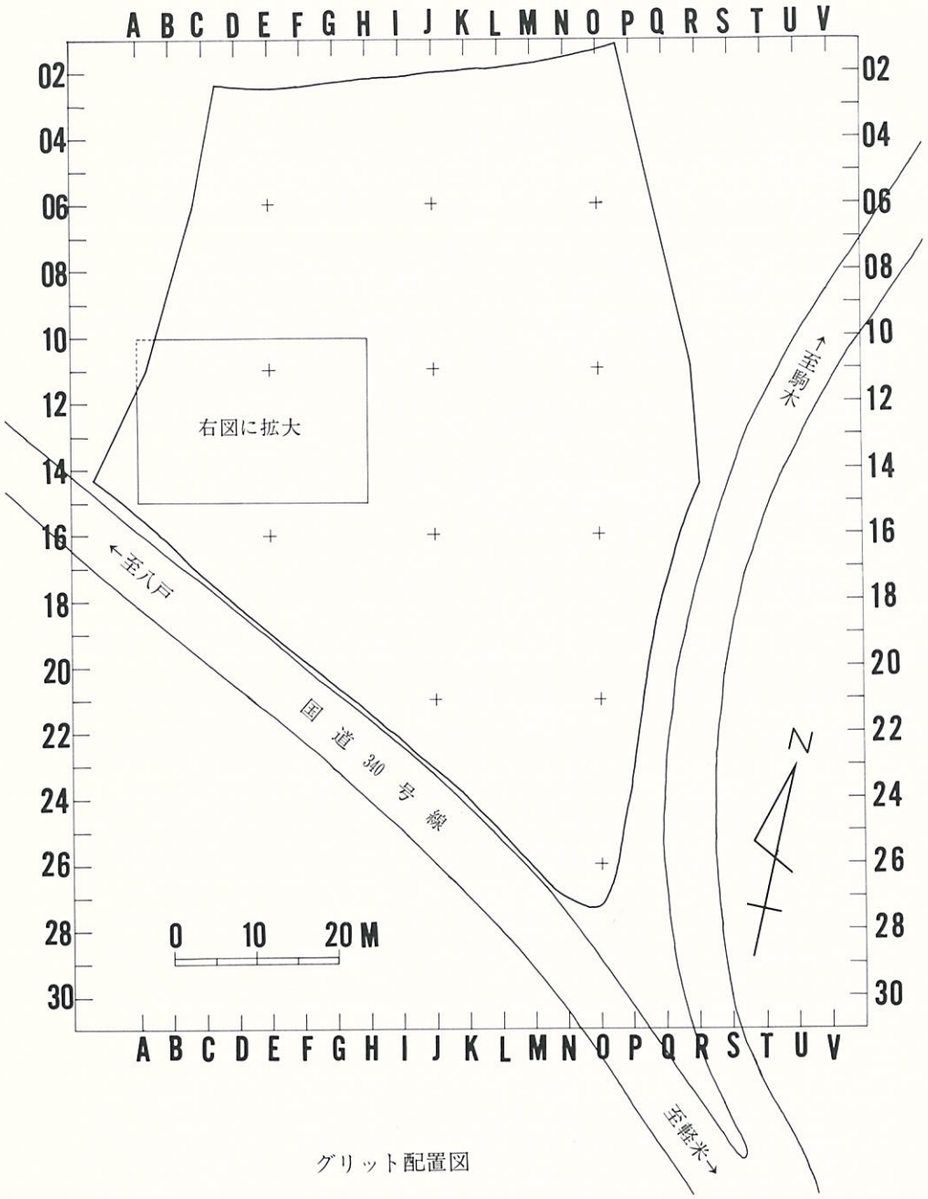
2　調査の概要

本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う緊急発掘調査である。調査は対象区域全体にグリットを設定し、全面調査を行った。遺跡の中央やゝ東側に埋没沢が存在していた。

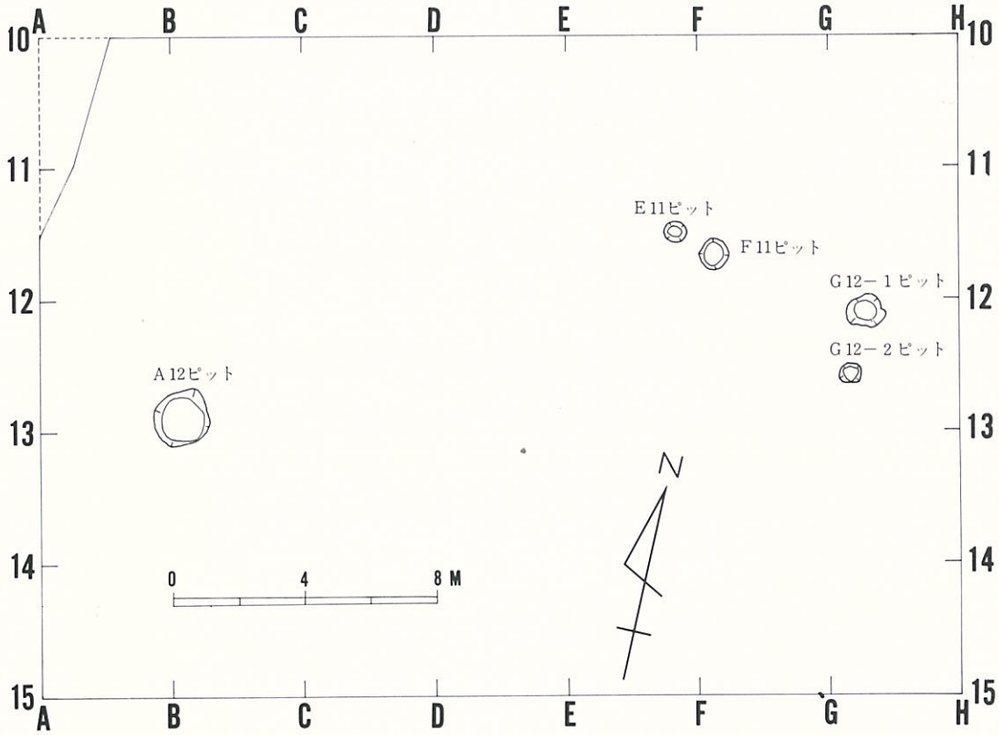
検出精査した遺構は、調査区西側の時期不明のピットが5基であった。出土遺物は石器数点、縄文土器片（早期～晩期）、土師器片がわずかで、まとまったものは出土しなかった。縄文早期の土器片は南部浮石層上面から出土したもので、内外に縄文の施されたもの、貝殻条痕文の施されたもの、平行沈線文の施されたもの、無文のものなどである。

3　まとめ

軽米地区では、昨年度の叺屋敷Ⅰa、君成田Ⅳ、長倉遺跡にひきつづいて、今年度は本遺跡、叺屋敷ⅠbⅡⅢ、馬場野ⅠⅡ遺跡（粗掘）と大規模な発掘調査が行われ、貴重な資料が得られている。本遺跡では遺構も少なく、遺物も少量出土したのみであったが、縄文時代早期の土器片は、今後県北部での調査研究をすすめる上での貴重な資料となろう。



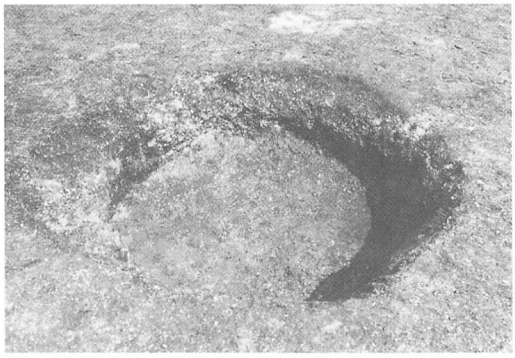
グリット配置図



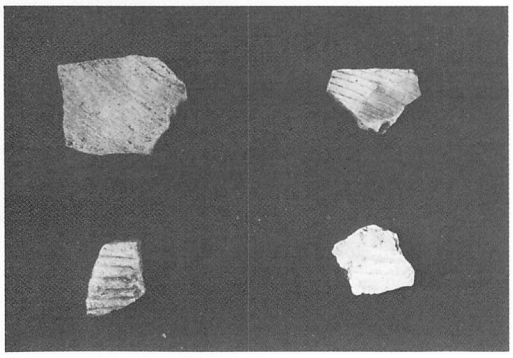
遺構配置図

土弓Ⅰ遺跡

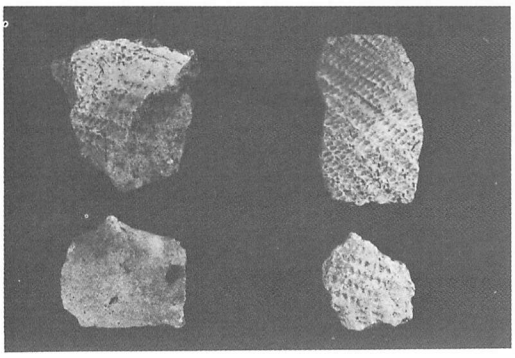
全　　景(北から)



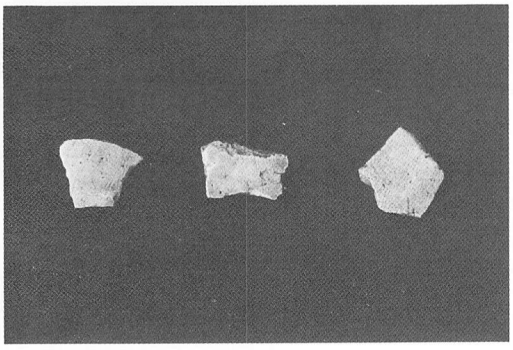
A 12ピット



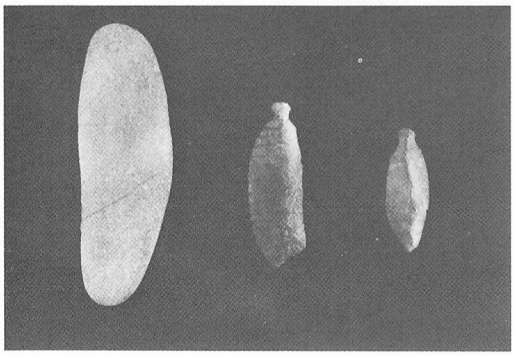
縄文早期土器片



縄文早期土器片



土 師 器 片



凹　石　　石　匙

土 弓 I 遺 跡

岩手県埋文センター文化財調査報告第33集
岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
（昭和56年度分）

昭和57年３月10日　印刷
昭和57年３月20日　発行

発　行　財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185
ＴＥＬ（0196）38－9001

印刷　川嶋印刷株式会社
〒021 一関市上大槻街４－７